

平成29年度文部科学省委託事業

大学入学者選抜改革推進委託事業  
**高大接続改革に資する、思考力・判断力・表現力等  
を問う新たな入学者選抜（地理歴史科・公民科）  
における評価手法の調査研究**

成果報告書

平成30年5月  
学校法人 早稲田大学



## 目次

1. 本事業の目的	1
1.1 目的	1
1.2 実施概要	1
1.3 当該年度における業務実施計画	2
2. 新たな中等教育科目群と接続する高等教育の在り方検討	4
2.1 歴史分科会	4
2.1.1 高校・大学（教養課程）における歴史教育の現状と課題：第1回分科会早稲田 大学都丸教授報告・大阪大学桃木教授・岡田研究員報告及び意見交換を中心に	4
2.1.2 歴史科目における高大接続のデザインと大学入試	6
2.2 公共分科会	9
2.2.1 東京大学・小玉重夫教授との意見交換会（第2回分科会）	9
2.2.2 麻布高校・堀川禎一教諭との意見交換会（第3回分科会）	10
2.3 制度分科会	11
2.3.1 3つのポリシーに即した学生を入学させる方法	11
2.3.2 附属・系属学院長との意見交換会	13
3. 入学者選抜の出題形式や作問方法の検討	14
3.1 地理分科会	14
3.1.1 地理における思考力・判断力・表現力	14
3.1.2 良問の分析	17
3.1.3 出題テーマ・出題形式に関する方針	18
3.2 歴史分科会	19
3.2.1 思考力等を問う既存の出題事例および出題案の検討	19
3.2.2 早稲田大学過去問の検討	20
3.2.3 思考力・判断力・表現力の定義	21
3.3 公共分科会	23
3.3.1 河合塾・梅明宏講師との意見交換会（第3回分科会・7月）	23
3.3.2 「公共」における思考力・判断力・表現力の定義	25
3.3.3 出題テーマ・出題形式に関する方針	26
3.4 制度分科会	26
3.4.1 大学で学ぶ学生として必要とされる資質・要素（社会で必要な資質）	26
3.4.2 「入学試験」の理想形とは（大阪市立大学 教育改革シンポ）倉元直樹教授の講演	28
3.4.3 「高大接続」改革の真の目的	29
4. 試行試験実施に向けた作問および評価の検討	30
4.1 地理分科会	30
4.1.1 試行問題の素材検討	30

4.1.2	試行問題案の作成.....	30
4.1.3	合教科問題の検討.....	31
4.2	歴史分科会.....	31
4.2.1	概要と基本方針.....	31
(1)	問題の構成.....	31
(2)	解答の方式.....	31
4.2.2	大問別概要.....	33
4.3	公共分科会.....	35
4.3.1	試行試験問題案の作成.....	35
4.3.2	プレ試行試験の実施概要（※アンケート、ヒアリングも含む）.....	36
4.3.3	プレ試行試験の採点結果、アンケート結果の概要.....	37
4.3.4	プレ試行試験の結果から析出される成果と今後の課題.....	41
4.3.5	プレ試行試験のアンケート結果.....	44
4.4	コンソーシアム会議.....	56
5.	本調査研究の内容、過程、成果の発信.....	57
5.1	全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会大学入学者選抜改革エキスポ.....	57
5.2	私大連 高大接続改革関係協議会.....	57
5.3	大学入試センターとの意見交換.....	58
5.4	第3回ワークショップ.....	59
5.5	情報発信サイト.....	79

## 1. 本事業の目的

本章では、本事業の目的・概要を説明する。

### 1.1 目的

高大接続システム改革会議の最終報告において、大学入学者選抜改革の基本的な考え方が示された。ここでは、「これからの時代を生きる一人一人が、十分な知識・技能と、それらを基盤にして答えが一つに定まらない問題に自ら解を見出していくための思考力・判断力・表現力、主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度を育てていく」必要性が謳われており、知識だけではない、学力の三要素に対する諸能力や経験をどの程度持っているかという観点で大学入学者選抜を進めるべきとされている。また、大学入学者選抜が「高等学校における指導の在り方の本質的な改善を促し、また、大学教育の質的転換を大きく加速し、高等学校教育・大学教育を通じた改革の好循環をもたらすものとなる」ことが求められている。

社会科（地理歴史科・公民科）は大学入学者選抜の試験科目として幅広く実施されており、高等学校学習指導要領の改革によって新たに必修化されるなど、入学者選抜改革においてインパクトの高い科目である。地理歴史科・公民科の科目において学力の三要素や、これにとどまらない各大学が必要とする能力を如何に問うかを明らかにし、大学が求める人材を適切に受け入れることを可能にするための評価方法開発が喫緊の課題となっている。

一方で各大学においては、大学として必要な人材を選抜するための入学者選抜方法開発を継続的に推進している中で、高大接続システム改革に対応するための個別具体的な問題点の整理、現行入試のどこをどのように変えるべきかという体系的な方法論の構築が十分でない現状がある。さらに、大学入学者選抜改革によって高等学校教育・大学教育の改革をもたらすためには、中等教育における新たな科目群と接続する、具体的な高等教育（大学教育）の在り方を提示し、これらの学問的連続性の中に入学者選抜を位置付けていかなければならない。

本委託事業ではこれらの課題に対し、有力大学における議論を深めるとともに、模擬的な試行試験の実施等を経て、今後入学者選抜改革を進める大学に評価方法開発の手法等を広く公開し展開することを目的とする。

### 1.2 実施概要

#### （1）学力の三要素等評価と各大学の評価要素、入学者選抜改革状況の把握

参加大学の入学者選抜改革における、特に社会科の現状、改革を進めている場合はその方向性を確認し整理する。学力の三要素を計測する方法に関する議論と、新教科への対応の議論は本来別のものであるが、分野に特化した議論に近接させるため、早稲田大学ならびに連携大学において地理歴史科・公民科の入学者選抜に関連する大学教員を中心にした専門家により課題を整理する。ここでは各大学の入学者選抜の方法に着目し、各大学の入学者選抜の改革の経緯と改善を目指す点、方法等を学力の三要素評価と関連付けて整理し、入試方法と評価事項の関連性について検証する。試験対象と試験実施の手法の関連の視点から入学者選抜試験（いわゆる一般入試、AO 入試、センター利用入試等）の在り方、試験実施の手法としてマークシート・記述・面接・調査書などの整理、試験実施

の手法毎の測定事項としての学力の三要素や大学独自の評価視点との関連性などの論点で現状を整理し、ペーパーテストにおいて計測可能なもの、良い事例の収集、現状との比較を実施、計測できない要素を改善し対応する方法を検討する。

また、高大接続システム改革会議の最終報告等の検討における大学入学者選抜の課題を踏まえつつ、各大学の改革推進上の課題について検証し、入学者選抜実施プロセスにおいて変更すべき具体的な点を洗い出す。

## (2) 高大接続科目群の構想構築と各教科における評価方法開発

地理、歴史、公民の教科ごとに、入学者選抜試験の出題形式や作問方法について検討する。これに際しては、中等教育における新たな科目群と接続する、具体的な高等教育（大学教育）の在り方を構想し、中等教育・入学者選抜・高等教育（大学教育）の3つが連続することを意識した、入学者選抜試験のモデルケースを構築する。

それぞれの教科の新学習指導要領に基づき高校での学習内容を想定し、新必修科目を高校生全員が学ぶことを前提にした新たな高等教育（大学教育）の科目として、例えば歴史科に対応するグローバル・ヒストリー、公民科に対応するシビルエンゲージメントなど、中等教育での学びを深化させた科目を構想する。高等教育（大学教育）における学びの在り方を提示することによって、より深い学問的理解に基づく入学者選抜のモデルを模索する。さらに、複数の科目を組み合わせた合教科化の検討、新たな科目において問うべき知識と大学が求める能力評価の実現手法開発などを検討する。

これらの科目ごとの入学者選抜試験開発は(1)で検討した入学者選抜実施プロセス改善と組み合わせ、知識偏重型の入試から脱却した思考プロセスを重視する評価法による、社会科における入学者選抜試験のモデルケースとして策定する。

## (3) 試行試験の実施と評価

社会科における入学者選抜試験のモデルケースの策定を受け、この実現可能性を検証し、さらなる課題を抽出するため、作問・採点等入試プロセスの一部を試行する。学習指導要領を実践する立場の高等学校教諭が大学教員とともに分析に参画、課題抽出と実現性評価を実施する。

## (4) 調査研究成果のまとめと公開

調査成果については上記の実施項目ごとに結果を整理し、入学者選抜改革に取り組む大学の指針となるよう広く公開する。

学力の三要素や大学が必要とする能力の評価方法などの開発される成果については、早稲田大学においては2020年度以降の入試開発にその知見を活用する。連携大学においては、その各大学におけるアドミッション・ポリシーに従い入学者選抜を実施するが、2020年度以降の改革に際して参考として活用する。

## 1.3 当該年度における業務実施計画

平成29年度は以下の業務計画にて実施した。

### (1) 新たな中等教育科目群と接続する高等教育の在り方検討

入学者選抜による人材選抜の方針を明らかにし、必要な入学者選抜の形式や方法の検討につながるため、歴史総合、公共を中心に、中等教育の新学習指導要領を踏まえ、これと接続する高等教育の在り方を検討する。

(2) 入学者選抜の出題形式や作問方法の検討

知識偏重型の入試から脱却した思考プロセスを重視する評価法による、入学者選抜の出題形式や作問法を検討する。

(3) 試行試験実施に向けた作問および評価の検討

次年度に実施予定の試行試験に向け、試行試験の方法、作問方法、結果の評価方法などを検討し、試行試験を設計する。

(4) 本調査研究の内容、過程、成果の発信

連携大学に制限しないワークショップを開催、協力大学を拡張する。

ホームページ等の適切な媒体を利用し取組内容を情報発信する。

## 2. 新たな中等教育科目群と接続する高等教育の在り方検討

本章では、今後の新しい中等教育科目群と接続する高等教育において必要な人材についての議論を述べる。ここでは、入学者選抜による人材選抜の方針を明らかにし、必要な入学者選抜の形式や方法の検討につなげることを目的としている。そのため、歴史、公共、制度分科会を中心に学習指導要領の改訂を見据えた検討を行った。

### 2.1 歴史分科会

本節においては、試行試験を作成するにあたり、その出発点を確認するために行われた高校・大学における歴史教育の現状と課題に関する議論、それをふまえた上での高大接続の入試改革の在り方について述べる。具体的には4月6日に開催された第1回分科会で行われた桃木・岡田報告及び都丸報告、ならびに報告後の討論の模様を中心に述べる。

#### 2.1.1 高校・大学（教養課程）における歴史教育の現状と課題：第1回分科会早稲田大学都丸教授報告・大阪大学桃木教授・岡田研究員報告及び意見交換を中心に

##### <高校教育>

分科会の桃木・岡田報告においては、大学教員と高校教員とが連携しながら歴史教育改革を進めてきた立場から、高校歴史教育の現状と課題を指摘するとともに、今後必要な歴史教育の在り方について議論された。

まず、以下3点を前提とした上で、今次改革の中で、現状のままでは高校における歴史科目ひいては地歴科全体の退潮が予測されることを指摘した。

- ① 一方的に大学側が主導するのではなく中等教育現場の困難な状況や優れた実践に十分注意を払う必要がある
- ② 入試や教養教育・教員養成の保守性など、今日の事態には大学側の責任が大きいことを自覚し大学側の取り組みを変えることが重要である
- ③ 個別高校単独や特定教科・科目単独では歴史教育が抱える課題のすべてを解決することは不可能であり、小中高大接続や教科・科目間連携が必須である

つまり、世界史Aに代わって歴史総合が必修科目になると、必修でなくなった世界史の高校での開講・履修が激減し、その結果「大学進学希望者学力評価テスト（報告時の仮称）」での世界史選択者も激減し、「グローバル人材の育成」に大きな障害が出るのが懸念される。日本史選択者の増加が想定されるが、必修「地理総合」の恩恵で地理選択者がそれ以上に増加する結果、教員採用の重点も歴史から地理へと移行する可能性がある。このため、従来以上に研修や教材開発に力を入れないと、世界史Aや現代社会と同様、「歴史総合」も所期の目標を達成するような教育効果が期待できない、などである。

他方「地理総合」は地理の教員不足のため多数の世界史教員が動員される見込みだが、それがうまくいかなければ、高校地歴全体が危機に陥るだけでなく、大学人文系の苦境を加速させる危険がある。

早稲田大学政治経済学術院での歴史教育の現状と課題について議論した都丸報告においても、現行入試の歴史科目を受験した学生の中でも、世界史Aを必修しているにも関わらず日本史選択者は世界史に、世界史選択者は日本史にそれぞれ苦手意識、忌避意識を持っている現状が指摘された。



両報告後の討論においては、以下のような意見が聞かれた。上記のような現状の背景には、知識レベルのみを準拠枠とする画一的出題へのプレッシャーが存する入試の在り方があると考えられる。特定用語集に載っていない用語は出題できず、新発見や論争のある部分についても出題に大きな制約がかかる。こうした入試を前提とした高校教育では歴史に関する基本的な視野、考え方が養成されないため歴史科目同士でも苦手意識を持つに至ると考えられる。予備校を含め、高大連携の中で、受験で問われる力の見直しが必要である。

### <大学教育>

桃木・岡田報告においては、大学教育の現状における問題点と大阪大学での取り組みが以下のように紹介された。上に述べたような危機的状況にある高校歴史教育の状況を前提とすると、大学では教養課程での世界史教育などを充実させる必要があり、専門研究のさわりを話す従来型の授業スタイルを改める必要がある。

現状では、教職科目ですら十分な概論は提供されていない大学が多い。この状況は研究者養成の在り方にも問題がある。それは、大学での学問の全体像の把握とそれぞれのディシプリンを通じた「思考力・判断力・表現力の育成」が、ほとんど特殊講義とゼミでの徒弟修行に委ねられ、研究者としての訓練を通じてどのような力が付いたのかは、それ自体で言語化されることなく「論文という作品」を通じて評価されるだけという、これまでの人文学の伝統的教育方法である。研究者養成方法としては必ずしも悪いやり方ではないが、教員養成や教養教育においても同じやり方が用いられていることは大学歴史教育の重大な問題である。このことは、中等教育での「歴史的思考力とは何か」の検討の遅れにも間接的に影響している。また史学系特有の問題として、明治以来の歴史教育を貫いてきた西洋中心史観と日本一國史観（とそれを構造化してきた大学の日・東・西の縦割りの研究・教育システム）があげられる。

これらの認識は現代世界を生きる若者の育成にとって相応しくなく、大学教育面の意識的な変革が必要である。入試についても、こうした従来の歴史観を反映した大学教員の分布そのまま、入試の出題委員をその分布に比例して機械的に決め、その研究者としての意識のままの出題委員が中等教育の現場を熟知しないままの片手間仕事で出題するというのが特に難関大学に一般的な状況となっている。そうすると古い歴史像を再生産するだけでなく、自分の専門領域に偏った独りよがりの出題や、逆に満遍なく出題しようとして専門外の領域で不正確な出題をするなどの事態が頻発する。さらに、自分の専門領域だけの部分的な新しさを取り込んだ「意欲的な出題」がかえって混乱を生む場合も珍しくない（cf. 稲田義智『絶対に解けない受験世界史』、『絶対に解けない受験世界史2』）。

これらの状況を変えないかぎり、入試において歴史科目はますます選択されなくなってしまうだろう。「座学による暗記学習と、知識を問う入試」から「主体的・対話的で深い学びと思考力・判断力・表現力を問う入試」への転換が不可欠である。これが実現されなければ科目としての世界史は壊滅し、地歴科教育全体も現在以上の困難に陥ることは確実な状況にある。そのため解決すべき問題は多くあるが、まず「世界史 B・日本史 B の教科書と用語集にもとづく暗記中心の高校教育と知識の多寡のみを問う入試の出題」から脱却することが一番の課題となる。

そのためには、入試を出題し、教科書を書き、高校教員を養成し、それらを担う大学教員を再生産する大学側が率先して変わる必要がある。研究・教育などの活動とその業績評価、採用人事が（研究者の個

性や自由を保証したうえで) 個々人バラバラでなく組織的・戦略的に分担・統合された歴史系のあり方が求められる。

こうした現状認識の下、大阪大学では歴史教育だけでなくグローバル・ヒストリーの枠組みなども利用しながら教育・研究両面での統合された取り組みを進めている。例えば、「アジアを正に位置づけ日本を完全に組み込んだ世界史」を掲げ、教養課程用の教科書『市民のための世界史』(大阪大学出版会、2014年)を刊行している。専門課程においては、従来通りの日本史・東洋史・西洋史の枠組みを維持しているものの、博士後期課程の院生やポスドクを、3分野を横断した高大連携活動や大学の授業に参画させてきた<sup>1</sup>。それらはかれらの大学教員としての就職実績にも一定の貢献をしている(cf.『教育が開く新しい歴史学(史学会125周年リレーシンポジウム2014)』山川出版社、2015年)。

続く都丸報告においては、早稲田大学を事例として次のように大学教育の現状と課題が示された。現行入試に合格した大学生の現状として、推薦入試や数学受験で入学した学生は歴史、地理の基礎学力(時空間認識)を持っていない場合が多く、一定の入学前トレーニングなどの実施も検討する必要がある。また、歴史科目選択者で用語等の知識があっても、国家・アクター同士の関係性やその構造的変動、現代の紛争・協力等へのつながり、比較の視点、同じ出来事を異なるアクターの立場から見る視点などの不足が目立つ。

こうした状況に対して、カリキュラム面では、ミクロ経済学・マクロ経済学、政治学、公共哲学は必修、大学院では経験・数理・規範の方法論は必修なのに対し、歴史科目はほとんど必修に含まれず、専任教員が担当する割合も低いといった問題がある。日本史と世界史の二分法を乗り越えた上で、多面的にグローバル史を検討する歴史の方法論・視点の置き方に関する科目(歴史研究の意義、方法、地域からの歴史、サバルタン/マイノリティの視点からの歴史、社会運動の連動・規範の共有・災害対応等のトランスナショナルな歴史、茶・砂糖などのモノの歴史など多様な分析視角、歴史の重層性を知る科目など)を学部・大学院の両方のレベルでしっかりと教える必要がある。

また質的な面においても、より考えさせる授業への転換が重要である。一例として、学部・大学院の授業(国際関係論分野)において、イギリスの大学の授業で行われる'gobbets'を応用し、異なる立場、状況で書かれた複数の史料を読ませて考えさせるような実践を行っている<sup>2</sup>。専門知識を教授するだけでなく、学生が自身で分析を行う授業や少人数で議論するような授業への取り組みが必要である。

## 2.1.2 歴史科目における高大接続のデザインと大学入試

前項で述べた第1回分科会の報告及びその後の議論から得られた共通理解は以下の3点である。

- ① 現在の歴史教育の最大の問題点は知識量を評価基準とする暗記中心の教育体制である。

---

<sup>1</sup> 大阪大学史学系では高大連携のみならず地域連携にも大学院生、ポスドクを積極的に参加させている。出前授業やNPO法人大阪府高齢者大学校の世界史講義を担当することにより、社会に向けて自分の専門分野についてその意義を含めて発信する能力を身に付けさせることを意図している。

<sup>2</sup> Gobbetsは、イギリスの大学学部の古典学や歴史系の授業で一般的な、多様な歴史資料からの短い抜粋を多く読ませて、それぞれの位置づけ、内容分析、歴史的意義の評価を書かせたり発表させる練習問題のようなものである。直接参考にしたのはオックスフォード大学のModern Historyの授業などで行われているものであるが、イギリスでは高校レベルから生徒に複数の史料を読ませて考えさせる授業が行われている素地があるので、現状においてそのままでは日本の学部授業に適用するのは難しく工夫が必要である。

② 高校社会科教育及び大学の歴史教育の社会的ミッションを再定義し、それに応じた新しい評価基準を構築する必要がある。

③ 入試改革は高校、大学の（研究・）教育システムの改革と一体で行う必要がある。その際、高大だけでなく小中も含めた全教育課程一貫した歴史教育のデザインを考える必要がある。

これらの事項について、現在の高大接続改革の中でのあるべき大学入試のありかたと本事業のスコープを明確にするため、当分科会では以下のように議論を整理した。

①については、知識の有無、多寡を歴史教育における一律の評価基準にすることは問題であるが、他方で歴史科目において思考力を働かせるには一定の基礎知識や常識のようなものが必要があることが分科会において確認された。

都丸報告においては、歴史的な思考を働かせる上での「座標軸」「常識」となる基礎知識が必要であることが指摘され、桃木・岡田報告においても、暗記必要な用語が野放図に増え続けている現状を改善するために、一つの参考基準を示すため、高校レベルで理解しておくべき日本史・世界史それぞれの基本用語 2000 語の精選作業が進められていることが紹介された（同用語精選については 4 章 2 節も参照）。基本知識が活用可能な深い理解とともに身につけているかを入試で問うことは否定されるべきではないことが確認された。また、これまで職人技のような形で明確に言語化されることのなかった歴史に固有な考え方やパターンのようなものを定式化して提示することも必要であるとして、小川幸司氏の歴史リテラシーや桃木氏の歴史の基本公式（仮私案）などの取り組み<sup>3</sup>があることが紹介され、アクティブ・ラーニング型の授業や本事業の試行試験に作成にあたってこれらが参考となりうる事が確認された。

②については「歴史的思考力」の中身について、未だ当該分野で共有される定義が得られていないのと同様、現段階で明解に定義することは不可能であるが、中教審の答申内容、主要大学の三つのポリシー（「ディプロマ・ポリシー」、「カリキュラム・ポリシー」、「アドミッション・ポリシー」）の内容などを踏まえ、幅広い複眼的視野と時間的奥行きに基づく現状分析能力を持って課題解決に取り組むことができるグローバル人材（市民）の育成を目標とすることには一定の共通理解が得られていることが確認された。

このような教育目標を実現するために、教授方法として、中教審の答申で強調されるアクティブ・ラーニング型の「主体的・対話的で深い学び」への転換が必要であること、学習内容についても、各国、各地域の通時的展開のみならず、グローバル・ヒストリーのような横のつながりがより重視されなければならないことについて一定の理解が得られた。そのうえで、入試について、アクティブ・ラーニング型授業（反転学習など）で育成される能力（特に問題発見、解決能力）をいかに評価するかが問題となるとともに、扱うテーマについても上記学習内容にそったものにする必要があることが確認された。なお、高大システム改革会議最終報告<sup>4</sup>におい

---

<sup>3</sup> 小川幸司「高校歴史教育における用語精選と思考力育成型授業への転換をデザインする」（日本西洋史学会小シンポジウム「思考力育成型歴史教育への転換と大学入試改革をどう進めるか」2017年5月21日レジュメ）。桃木氏の歴史の基本公式については、その一部が桃木至朗「歴史教育の未来をひらく－アクティブ・ラーニングと「歴史総合」－コメント1」（シンポジウム「歴史教育の未来をひらく－アクティブ・ラーニングと「歴史総合」－」2016年3月27日、日本大学、『高大歴史教育研究会会報』4、2016年、9-11頁所収）において紹介されている。

<sup>4</sup> 高大接続システム改革会議「最終報告」（2016年3月31日）

[http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2016/06/02/1369232\\_01\\_2.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/06/02/1369232_01_2.pdf)

て、個別大学の入試は、画一的な学力選抜ではなく、三つのポリシーに基づく人材の選抜を可能とするものであるべきことを提言しているが、理系科目と異なり、社会科学科目はコンテンツベースで大学が独自に設ける選抜指針を反映させることが可能な科目であり、その意味でもどのようなテーマ、トピックについていかなる問いかけを行うかということが十分に吟味されなければならないとの意見があった。この点に関して、分科会でも、従来とりわけセンター試験に顕著に見られる満遍なく各地域、各時代から出題するという「公平さ」には、本事業においては必ずしもとられる必要はないという意見が出された。

③について、分科会の議論の中で、桃木氏より、中教審は、中学校ではしっかり基本知識を学び、高校ではそれを再確認しながら、「考え方」、「調べ方」等の応用学習に特化することを想定しており、新指導要領下での学習が一般化すれば、むしろ問われるのは、知識の応用事例を示すことで中等教育との違いを示してきた大学の歴史教育のありかたになるだろうとの見通しが示された（より高度なアクティブ・ラーニング型学習を行うのか、あるいは応用能力を前提とした上で専門知識の教授に重点をおくのか、など）。

高大接続による歴史教育体制のあり方が変わってくれば、ルーブリック評価<sup>5</sup>などが主流となってくる可能性が高いが、それは全体のシステムが構築された後の話であり、本事業においては、新指導要領による変化を見据えつつ思考力・判断力・表現力を問うことのできるような評価手法を検討する一方で、現行の体制の中で各大学での個別入試への適用可能性を出発点とし、それを全国的に普及させることも課題としているので、一定の制約は存在する。

以上の議論をふまえ、本事業で作成する試行試験作成について、以下の基本方針が策定された。

- 知識そのものを問うことは避け、知識を応用する力を問う問題を作成する。（そのため、最低限必要な用語などの基礎知識以外の情報については被験者がなんらかの形で参照できるようにする。）
- 問題形式はアクティブ・ラーニング式授業などの「主体的・対話的で深い学び」を意識しつつ、論述問題、面接の活用などの特色入試の工夫を行う一方で（主に制度分科会での検討に譲ることになるが、現行の特色入試の中にも、合科目入試（国際基督教大学の総合教養（ATLAS）科目入試など）や図書館入試（お茶の水女子大の新フンボルト入試）など地歴科目にも参考になる事例がある。前年度報告書「学力の三要素の評価の観点からの各大学における入試改革動向調査」参照）、多数の受験生の基礎学力を問う選択問題を中心とする試験で「過剰な知識を要求しなくても点数に差が付き、それなりに思考力等を測れる問題の多様なパターンを提示することが重要（その際にはアメリカの SAT 試験など参考可能な事例が存在する。またマークシートでも技術の進歩により複数解の採点も可能となっており、知識以外で難易度を上げる工夫は様々ある<sup>6</sup>）。

---

<sup>5</sup> 中央教育審議会答申によれば、ルーブリック評価は、米国で開発された学修評価の基準の作成方法であり、評価水準である「尺度」と、尺度を満たした場合の「特徴の記述」で構成される。記述により達成水準等が明確化されることにより、他の手段では困難な、パフォーマンス等の定性的な評価に向くとされ、評価者・被評価者の認識の共有、複数の評価者による評価の標準化等のメリットがある。中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」（2012年8月28日）

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingji/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingji/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm)

<sup>6</sup> ICT教育の普及も進んでいく中、CBT方式の試験検討も議論では上がったが、認知科学、情報科学などの専門家との間で別途検討が必要な課題となるだろう。CBT試験の最新動向についてはその導入が最も進んでいるアメリカでの事例を紹介した Paul

各大学の人的資源の制約の下で継続的に毎年出題を続けることができるという意味で持続可能な仕組みを構築する必要がある。なお、現行の歴史科目入試問題にも評価すべきものがあり、それらをきちんと検討し、ノウハウとして蓄積する。

- 出題内容について、思考力等を測るのに適したテーマを考える必要がある。現行指導要領でも重視している歴史的事象の横のつながりを重視し、基本的な知識をもとに「つなぐ」「くらべる」力などを問う問題を作成する。歴史総合を意識した世界史・日本史の統合問題を作成するかどうかも検討する。三つのポリシーとの関係については、早稲田大学政治経済学部の大規模入試を事例研究の主な対象としつつ、他大学の適用可能性をも考慮して検討を進める。

## 2.2 公共分科会

### 2.2.1 東京大学・小玉重夫教授との意見交換会（第2回分科会）

新科目「公共」に適合する思考力・判断力・表現力の評価方法について調査研究を進めるにあたり、まずもって検討すべき論点として分科会内で提起されたのは、次期高等学校学習指導要領において新設される「公共」という科目の狙い、具体的にはいかなる資質・能力の育成をめざすべきかについての全体的イメージをどう描くべきかという点であった。本年度開始時点ではまだ学習指導要領改訂案が公表されていなかったため、本分科会ではまず、中央教育審議会・初等中等教育分科会・教育課程部会社会・地理歴史・公民ワーキンググループによる「社会・地理歴史・公民ワーキンググループにおける審議の取りまとめについて（報告）」（2016年8月26日）を基に検討、討議を進め、新科目「公共」の全体像に関する大まかな理解の共有を図った。

そのうえで、「公共」と接続する高等教育の在り方を理論的観点から追究すべく、平成29年6月の第2回分科会において、日本におけるシティズンシップ教育（citizenship education）研究の主導的理論家であり、高大接続改革の動向についても豊富な知見をもつ東京大学教育学研究科の小玉重夫教授を招き、意見交換を行った。まず、小玉教授より「シティズンシップ教育——高大接続改革の方針をふまえての課題」と題して、シティズンシップ教育の観点から従来の高校における公民科教育に関する評価、そして高大接続改革の方針をふまえて今後の高校教育・大学教育において取り組みが期待される課題について所見をうかがい、その後、分科会委員の間で意見交換を行った。

講演のなかで小玉教授は、従来の公民科教育においてはアカデミズム・専門教育の内容が高校をはじめとする学校教育へとそのまま反映されるという上意下達式の構造が顕著に見られると指摘した。こうした上意下達式の構造からの脱却をめざしてカリキュラム・イノベーションを推進していくために重要となる方向性として、以下の三点が小玉教授より示された。

- ① **教育現場に近いところでカリキュラムを決定**
- ② **自立的な学習主体の育成——アクティブ・ラーニングの重視**
- ③ **コンテンツ重視型からコンピテンス＝資質・能力重視型への転換**

---

Deane「認知科学にもとづいたアセスメント—思考力・判断力・表現力の評価・改善をめざすアセスメント」（『入学者選抜研究に関する調査室報告書3 大学入試センターシンポジウム2016 高大接続における学力評価の最新動向』、[http://www.dnc.ac.jp/research/nyugakusha\\_chyosasisitu/houkoku.html](http://www.dnc.ac.jp/research/nyugakusha_chyosasisitu/houkoku.html)を参照。

分科会委員間での意見交換では、これら三点のうち特に③が議論の焦点となり、いかなる資質・能力が「公共」における学力の「コア」として重視されるべきかが問われた。この点に関して小玉教授は、特定の専門家による知の独占を開放し、職業と結びついた専門的知識・技能について、専門家ではない一般市民が社会における問題を発見し、考察・分析を深め、他者と協働して解決策を模索するための技能へと組みかえていくという観点が重要となると指摘した。

### 2.2.2 麻布高校・堀川禎一教諭との意見交換会（第3回分科会）

「公共」と接続する高等教育の在り方を模索するにあたっては、理論的観点のみならず、教育現場での実践にねざした知見を導入することにも配慮した。そこで、私立麻布高等学校において通常の教科教育の枠にとどまらない独自の教育実践の展開にたずさわる堀川禎一教諭を招き、意見交換を行った。

意見交換に先立ち、堀川教諭から、麻布高校における特色ある教育実践の例として、「教養総合リレー講座」と「社会科基礎課程修了論文」に関する紹介、説明を受けた。それぞれの取り組みの概要は、以下の通りである。

#### 「教養総合リレー講座」（1年生・2年生対象）：

1年生・2年生を対象として毎週土曜日に2時間実施されている連続講座であり、生徒は各自、複数の講座の中から自分自身の興味関心に適うテーマを扱う講座を選択して、受講することになる。各講座では、まず導入として所定のテーマに関してグループ討議と発表を行い、生徒間で現状認識の共有を図る。その後、学外から招いた複数の専門家によるレクチャーと質疑応答を通じて、所定のテーマに対して様々な角度からの理解と考察を促す。最後に、全体のまとめとして再度グループ討議と発表を行い、現状認識を反省的に問い返すという作業に取り組む。

#### 「社会科基礎課程修了論文」（1年生対象）：

地理歴史・公民分野より各自自由にテーマを選択し、各種資料を活用しながら論文を執筆する。生徒一人ひとりに担当教員がつき、各生徒は担当教員の指導の下で論文執筆を進める（教員一人当たり約20数名の生徒を担当）。

これらの学習の狙いについて堀川教諭は、生徒一人ひとりの「言葉の力」を育成するという点を強調した。より具体的にいえば、社会的問題について互いに意見を交わしながら自分自身の意見を形成していく力、そして、口頭での意見主張と議論をあわせて、文章という形式で自らの意見を説得力のある仕方提示するための構成力と論述力を育むことが、学習の狙いである。

さらに堀川教諭からは、高校教育と大学教育をいかに適切に媒介していくべきかという点に関して、現在の大学においては専門教育の枠にとらわれず、学生たちが社会問題について公共的に議論を交わすための場と時間が乏しいのではないかと、との見解が示された。分科会委員間の意見交換においても、高校教育・大学教育の両面において生徒・学生が公共的な議論を行うための場と時間をいかに確保すべきかという問題意識が共有された。

## 2.3 制度分科会

### 2.3.1 3つのポリシーに即した学生を入学させる方法

#### 【3つのポリシーと入試制度】

制度分科会では、現在の日本の大学入試制度において、新学習指導要領に大きく取り上げられた思考力・判断力・表現力、協調性・主体性を対象の学生から引き出すにはどのような問いかけをするのが適切かを検討した。

まず、各分科会（歴史・公共・地理）では定義表を作成することから、社会科目における定義付・定義表の内容を検討した。また、現在、各分科会において進めている事業として、学力の3要素のうち、第1の要素である知識・技能を超えて、第2の要素である思考力・判断力・表現力のどこまでをどのように対応することが可能か、試験問題の構成・解答方法を工夫し、その工夫次第で可能なかを検討した。

その検討内容から地理、歴史、公共のいずれの科目であっても、試験の工夫次第で学力の第2の要素は測定可能であることは分かった。更に第3の要素である主体性、多様性、協働性も、価値観の異なる人々の間で協働する必要がある社会的な状況（公共科目に典型的に現れてくる）をうまく想定すれば、記述問題の中で部分的に対応が可能であることが分かった。これにより試験設計がより重要視されることになる。

しかしさらに詳しく生徒の能力を評価しようとするれば、別の方法によって測定しなければならない。そのため、どのような方法を用いるべきかについて検討した。

そこで、大学入学希望者選抜に係る課題の中の一つから、「調査書」記入の手法について考察を進めた。

調査書は現在紙で作成することとされており、高校側の教師が記入のうえ、最終的に学校長の押印が必要とされている。しかし、この調査書作成についてはかなりの労力を必要とし、教員には事務的な負担が大きいとされる。

そのため、教師が作成する調査書、生徒が作成する志望理由書、その他様々な学校生活での経験、クラブ活動や運動競技への参加、またそれらの結果、町内活動やボランティアを通じた学び、気づきなどが多面的に記載されたe-ポートフォリオが提出されれば、それは情報源として極めて価値が高い。

また、高等教育機関である大学にはアドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーの見直し・設定と、入学者選抜試験の方法の見直しを同時に行うことが求められている。さらに、国全体の入学者選抜改革においては、学習指導要領の大幅な改訂と調査書の改訂が明言されている。

しかしながら、現在の紙面に記入するのみの調査書の内容と教科試験のみで、高等教育を受けるに足る基礎学力、「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力」の3要素を備えているか、「主体性、多様性、協働性」が測れるのか、新学習指導要領で育成を目指す要素・資質をその生徒が備えているのか、疑問が残るところである。

その点において入学試験時に教師が記入する調査書や学部志望書などを活用することが効率的ではないかと考えた。調査書をどのように入学者選抜に活用するかは各大学の募集要項に明記することとしていることから制度検討分科会では教育現場でのICTを活用し、「e-ポートフォリオ」を調査書の代わりとして入学者選抜に利用できないか、という検証作業を進めることを目標とする。

もし、ポートフォリオを入学者選抜に利用するのであればその価値を高めるためには、そこに記載されている内容と事実との齟齬がないことが必要である。

ここで重要になるのは、ポートフォリオの記入は生徒がするということである。自分で記録を残す作業をすること（この時の文章は記録文であり、作文でないことが必要）また記入をすることによって本人に気づきを与えることがあること、その気づきから再度学び直し、その後の学修に生かすことができるようになる、それが生徒にとって重要な体験になると考えるのである。

また、ポートフォリオの導入をすることによって、学生のみならず、高校教員・大学側の事務的な負担を減少させることが可能だと考えられる

なお、生徒自身が記入するうえでの重要視したい内容は生徒自身の「気づきでどのように成長したと感じたか」である。そのためにも記録文を残す指導・訓練を早い段階から実施する必要がある。

ポートフォリオを利用した入学者選抜をするのであれば、生徒が記入したポートフォリオから、その大学のアドミッション・ポリシーに適した情報をどのように拾い出すか、また拾い出した情報が有効なものかどうか、を見極めることができる専門の人材を置かなければ混乱をきたすだろう。そこには多面的・総合的な見方のできる人材の育成・配置が望まれる。その役目を担うのがアドミッションオフィサーになると考える。

現在でも九州大学などで教職員向けにアドミッションオフィサー養成セミナーなどが行われている。追手門学院大学のアサーティブ入試がアドミッションオフィサー（職員が本業務との兼務である）を起用したよい例といえるだろう。

ただし、すべての人を全人的に評価するのが正しいともいいがたい。そのためにも学力テストを評価方法のひとつとして残しておくことも必要である。

#### 【歴史・地理・公共科目を利用する入試と制度検討】

世界史、日本史を入試科目に導入している大学は多く見られるが、それについては以下のような課題があると考えられるため、2018年度もさらに掘り下げて検証していく必要がある。

- 該当の試験方法で大学に入ってから必要とされる学力をその試験で的確に測れているか、歴史でどのような内容の試験を作成し、解答させることが大学生として必要な資質を持っていると判断できるのかを各大学はどのように判断しているのか。
- 地理・現代政治・政治経済科目は社会生活上必要な情報をカバーすることのできる教科であるがそれをどこまで問うのが入学試験として適切なのか
- 高校生までで修得した知識及び技能で培った力をつかって現代の諸問題をとらえ、その解決に向けて他者と協働して考察・構想する「思考力、判断力、表現力」を育成し、公共的な事柄に自ら参画していく態度の育成や、現代社会に生きる人間としての在り方生き方の自覚、国民権を担う公民としての自覚などの涵養に向けて設置される公共科目を高等教育以降の学びで役立てるためにはどのような試験が適切なのか
- 高校時に修得した数学・国語・英語の基本的知識を利用してその後のキャリアを形成していくうえで必要になる応用力をどのような試験内容で確認することが適切なのか

社会科目（一部教科）のみ点数がよく、希望する学部に入学ができたとしても必要とされる数学や外国語（基本的科目）に関する習熟度が低い状態の学生だった場合、その学部で必要とされるカリキュラムについて行くことが難しく、転部や最悪の場合、中退という選択をせざるを得ない恐れがある。



そのような学生が現れるのを防ぐ、という意味でも社会科目に限らず、各教科科目の試験利用をどのようにしていくか、入学試験全体の内容、方法、時期も含めたうえで再度検討し、議論を交わす必要がある。

### 2.3.2 附属・系属学院長との意見交換会

#### ① 参加者

早稲田大学高等学院 本杉秀穂学院長、早稲田大学本庄高等学院 吉田茂学院長、  
早稲田大学 須賀晃一教授  
早稲田大学大学総合研究センター 山田晃久  
早稲田大学教務部教務課 高橋一城、久保徹  
早稲田大学政治経済事務所 松本百合奈

#### ② 実施日 2017年7月7日

#### ③ 開催場所 早稲田大学 教務部応接室

#### ④ 概要

附属校と大学との連続性を持たせるには、受け入れる側の大学・学院と学部側がどのような事項を重視するかが問われる。

なお、附属校での教育は学生が「入学試験」のことを考えなくてもよい附属校の利点を生かし、高校生である時期の教育の質をいかに高めるか、ということも問われているのではないか。そのためには大学として協力をどのようにしていくのが効率的か。具体的にどのようなことが必要になってくるか、ということも含め議論がかわされた。

附属校独自の選抜方法・学習方法にポートフォリオを組み込んでみる、ということが可能なのか、また、それが今後の附属校からの学生選抜の可能性としてあるのか、その選抜方法に一般の大学・高校（中学）が対応可能なのか、そもそもポートフォリオの導入、実施が実現可能なのか、ということも含め今後の入学者選抜方法の検討事項に挙げ、引き続き議論を重ねていく必要がある。

### 3. 入学者選抜の出題形式や作問方法の検討

本章では、知識偏重型の入試から脱却した試行プロセスを重視する評価法による、入学選抜の出題形式や作問法について述べる。地理・歴史・公共分科会においては、各科目が評価すべき思考力・判断力・表現力を定義するため、定義表作成に向けた検討の経過を言及する。また、出題テーマ・出題形式に関する方針に関する議論の経過を述べる。

#### 3.1 地理分科会

##### 3.1.1 地理における思考力・判断力・表現力

地理分科会では、試行問題を作問するに先立ち、第1回分科会において地理科目として問うべき思考力・判断力・表現力について議論した。地理では、従前より学習指導要領解説に地理的見方や考え方が記述されており、今回の大学入学者選抜改革で求められる思考力・判断力・表現力に対する土台は既にあるものと考えた。しかし、社会科の他科目（本事業における歴史、公共）が求める思考力・判断力・表現力と整理することによって、社会科全体として科目間の共通理解だけでなく、各科目の特性をより明らかにすることができる判断し、地理分科会として、各能力を定義した定義表を作成することとした。

定義表を作成するにあたり、たたき台として、高大接続システム改革会議で提出された資料を参考にした。資料では、特に思考力・判断力・表現力等を評価するために、7つの「論理的な思考の活動」を整理している。

表 3-1 新テストで評価すべき能力等（特に思考力・判断力・表現力等）のイメージについて

理論的な思考活動		具体的な内容
①規則、定義、条件等を理解し適用する	⑦ 思考の過程や結論を適切に表現する	資料から読み取ることのできる規則や定義等を理解し、それを具体的に適用する。
②必要な情報を抽出し、分析する		多くの資料や条件から推論に必要な情報を抽出し、それに基づいて分析する。
③趣旨や主張を把握し、分析する		資料は、全体としてどのような内容を述べているのかを的確にとらえそれについて評価する。
④事象の関係性について洞察する		資料に提示されている事象が、論理的にどのような関係にあたるのかを見極める。
⑤仮説を立て、検証する		前提となる資料から仮説を立て、他の資料などを用いて仮説を検証する。
⑥議論や論証の構造を判断する		議論や論争の論点・争点について、前提となる暗黙の了解や根拠、また、推論の構造などを明らかにするとともに、その適否を判断する。
認知プロセスの分類（一例）		
問題解決	①問題発見、②問題定義、③解法探索、④実行、⑤振り返り	
批判的思想	①情報の明確化、②推論の基盤の検討、③推論、④行動決定・問題解決（メタ認知が全ステップに働く）	
帰納的推論	①事例収集、②仮説形成（事例、目標、知識、期待の制約を受ける）、③一般化、④仮説検証（確証バイアスが最大の制約として働く）	
知識総合	①アイデアを引き出す、②アイデアを付加する、③アイデアを選別する、④振り返ってアイデアを分類・構造化する	

高大接続システム改革会議資料（2015.6.18）より

また、より入試問題を解答する力を見据えた思考力・判断力・表現力とするため、河合塾作成の「地理の入試問題を解くために必要な力」を参考にした。

河合塾「地理の入試問題を解くために必要な力」

地理科が考える知識・技能とは一身につけておかなければならない基本的な力

地理における知識・技能は、系統地理と地誌に大別され、各学習項目に対して以下の各3段階がある。特に技能については、「地理的技能」と呼ばれるとおり、他教科の定義とは異なり、単純なもの（例：等高線の読み取り）だけでなく、思考力（情報収集・分析）を要するもの（写真データからの読み取り）まで多岐に渡る。

<系統地理>

段階1：基本的知識・理論・スキルを身に付ける。

段階2：段階1をもとに理解考察する。

段階3：理解を深め、自らの考察を表現する。

<地誌>

段階1：地域的特色に関する基礎的・基本的知識を習得する。

段階2：地域的特色と地域的課題を考察・理解する。

段階3：地域的特色と地域的課題を多面的・多角的に探究・展望させ、自らの考察を表現する。

地理科が考える思考力・判断力・表現力とは一問題を解くために必要な力

a. 因果関係を理解する力

（例：気候や地形などの自然環境の成因や社会的事象の要因や背景を理解）

b. 資料を選択する力

（例：多くの統計資料から推論に必要な情報を抽出し、それに基づいて分析）

c. 資料を判読する力

（例：資料や分布図などがどのような事象を示しているかの確に捉える）

d. 相互関係を判定する力

（例：異なる事象を示した分布図や統計資料（グラフ）をもとに関係性を把握）

e. 事象や地域を比較・分類する力

（例：資料をもとに国や地域の共通点や相違点を整理し、グループ分け）

f. 地域の特徴を説明する力

（例：的確な図表（地図・グラフ）を作成し、地域の特徴を表現）

g. 複数の解釈が考えられるなかで、最適なものを選ぶ力

h. 分析した内容を適切な文章で表現する力

i. 地理的な知識を適切な文章で表現する力

これらの定義を基に、思考力・判断力・表現力の定義表案を作成した。各カテゴリーは公共分科会作成の原案を基にした。

表 3-2 地理における思考力・判断力・表現力の定義表（案）

能力	定義	大カテゴリー		中カテゴリー
		Reading	Connection	
<b>思考力</b>	推論の正しさを判別する。自分で推論を構築する。	図表（地図を含む）・文章等の資料を読み取り、意味内容を理解する力（事実的思考）。	図表（地図を含む）・文章等の資料を読み取り、事象間の相互作用を理解する力。	<ul style="list-style-type: none"> <li>空間的な視点から事象をとらえ考察する。</li> <li>事項の記述・表現に内在する明示的・默示的意図を読み取る。</li> <li>事項間の関連がもつ空間的な規則性やトレンドオブを見出す。</li> <li>事項に内在する問題・法則原理、事象間の因果関係を推論する。</li> <li>事項の特性を説明するうえで有用なモデル化や抽象化を行う。</li> <li>他の地域・事象と比較して共通点や相違点を整理し、地域・事象の相対的な位置づけを行う。</li> </ul>
		図表（地図を含む）・文章等の資料の中で明示されていない事柄を発見する力。	図表（地図を含む）・文章等の資料を読み取り、事象間の因果関係を理論的に考える力（理論的思考）。	
		図表（地図を含む）・文章等の資料を読み取り、事象間の因果関係を理論的に考える力（理論的思考）。	他の事象と比較しながら事象を相対的にとらえる力（理論的思考）	
		Inference	地理的な課題を多面的・多角的に考察する力（理論的思考）	
<b>判断力</b>	複数の発見した事柄や推論の筋道の中から正しいものや重要なものを選択する。 ※ 選択する際には前提とする状況や制約を踏まえる。	推論に必要な資料・情報を選択する力（事実判断）。	見解が分かれる論点をめぐって各々の主張を支持する理由・論拠を見分ける力。	<ul style="list-style-type: none"> <li>多様な資料・情報の中から説明に必要なものを選択し収集する。</li> <li>自らの見解を支える理由・論拠と他者の理由・論拠を比較検討し、その共通点と差異を探る。その上で他者に対して可能な対応（同意・批判・妥協等）について判断する。</li> <li>認識が正しいか（correct）、倫理的に見て正しいか（right）、手続きや人々の扱いが公正か（fair）、目的を達成する手段として効率的か（efficient）などの規準で判断する。</li> </ul>
		Judgement	複数の解釈が考えられる中で最適なものを選択する力（価値判断）。	
<b>表現力</b>	発見した事柄や自分の推論・判断を適切に表現する。 ※ 与えられた資料を活用した表現を含む。	地理的な知識を適切な図表（地図を含む）・文章等で表現する力。	分析した内容を適切な図表（地図を含む）・文章等で表現する力。自分の主張の根拠を論理的に整理して順序立てて述べる力。	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本語表現としての適切性。</li> <li>地理的な知識を整理するうえで適切な図表（地図を含む）・文章等を採用する。</li> <li>分析結果を適切な図表（地図を含む）・文章等を用いて他者にわかりやすいように示す。</li> <li>適切な図表（地図を含む）・文章等を用いて論拠を示し、他者が理解し納得するような論理的な説明を行う。</li> </ul>
		Expression		

### 3.1.2 良問の分析

地理分科会で作成した思考力・判断力・表現力の定義表を基に、思考力・判断力・表現力を評価する良問の分析を行った。参考資料として、河合塾高大接続改革シンポジウム（2015/2016）で使用された以下のサンプル問題を参照した。

◆サンプル No.1

テーマ：メンタルマップ

出典：1996 年度一橋大（地理）の出題を元に設問を改編

◆サンプル No.2

テーマ：世界の自然災害

出典：2016 年度大学入試センター試験（本試）地理 B 第 1 問（改題）

◆サンプル No.3

テーマ：世界の自然災害

出典：2011 年度東京大学 地理 B 第 1 問（改題）

上記サンプル問題を基に、下記の点について意見が出された。

- 一番問題なのは表現力が問えるのか。思考力、判断力は問えるが、表現力を付け加えるということとは可能なのか。日本語の表現力を問うのであれば、現代文でやればよいので、地理としての表現力は何になるのか。
- 今の流れは、知識偏重の問題から、判断力、思考力、表現力を問う流れだが、知識の力は必要だと思う。知識の力も地理、歴史でも違うところがあり、地理は知識を置いておいても、判断力、思考力の評価は出来る。
- 知識と言っても色んな知識があるわけで、今、問題にされているただ単に知識を問う設問は、事実に知識をそのまま聞いているようなものが多い。そういうものは内容も分からず暗記すれば点が取れる。そういう設問は今批判されている。同じ知識でも事実に知識ではなくもう 1 つ上の概念的な知識を持っているのかどうかを問うような問題であれば意味があるのではないか。そういう問題は思考力とも密接に結びついてくると思う。例えば、地形がどのようにできるのか、そういう概念的な知識があるのかを評価するのが大切。
- 概念的な知識になると思考力に近くなるのではないか。単純な知識は必要。どの程度問うて良いのかという点も重要。教科書にあるから大事という意味ではなく、一問一答程度でも覚えておく知識があることを示した方が良いのではないか。
- 地理を学ぶ目的の一つは、さまざまな断片的な知識の中から全体的な傾向が分かるようになることではないか。
- 最近、得点開示を含めて入試問題にミスがあってはいけないと厳しくなっている。このことが、問題がつまらなくなっている背景の一つだと思う。

- 論述問題では出題者が何を求めているかを考えるよう教えているが、時として出題者に迎合する解答になりかねない。そうすると、出題者の意向とは異なるが思考力のある生徒を排除してしまう恐れがある。そうならないためには、採点しながら採点基準が変わっていかざるを得ない。想定しなかった答えが出てきたときにそれを評価する仕組みを考える必要がある。

### 3.1.3 出題テーマ・出題形式に関する方針

「地理総合」を見据えた試行試験を実施するため、3.1.2 で述べた思考力・判断力・表現力に関する評価を踏まえながら、作問テーマを検討した。

地理総合の内容は以下の通りである。

- A 地図や地理情報システムで捉える現代世界
  - (1) 地図や地理情報システムと現代世界
- B 国際理解と国際協力
  - (1) 生活文化の多様性と国際理解
  - (2) 地球的課題と国際協力
- C 持続可能な地域づくりと私たち
  - (1) 自然環境と防災
  - (2) 生活圏の調査と地域の展望

上記内容を基に、試行試験として実施する出題テーマを検討した。テーマとしては、地図を重ね合わせるような問題（2,3 個地図を並べて見比べて、空間を分割）、国際協力、環境、防災などが挙げられた。とりわけ、「地理総合」の柱として注目されている地理情報システム（Geographic Information System、GIS）や持続可能な開発のための教育（Education for Sustainable Development、ESD）といった内容を踏まえた作問を行うこととした。

また、試行試験の出題形式の方針として以下の意見が出された。

- 問題文は同じにして設問を記述式とマーク式に分けて解かせるのはどうか。
- 解答者を固定した上で問題の形式を変えて、出てくる結果の違いを評価した方が、アンケートだけ答えさせるよりは良いのでは。
- どうしたら記述量を増やさずに思考力を試すような形の問題に出来るか目安ができるかよい。試行試験とはいえ実際の試験をするので、採点の時間、手間、継続的に出来るか等を含めて意識する必要がある。
- ある程度絞った学力の生徒に違うタイプの問題を受けさせて、結果の違いをその問題に反映させる方が、問題を作るという手続きとしては良いと思う。しかし、それが入試として使えるかが測れなくなるジレンマではある。

## 3.2 歴史分科会

### 3.2.1 思考力等を問う既存の出題事例および出題案の検討

歴史分科会では、(1) 第2回分科会(6月22日)と(2) 第3回分科会(8月2日)において、思考力・表現力・判断力(以下、思考力等)を問う既存の出題事例および出題案を検討した。

#### (1) 第2回分科会：河合塾青木講師による報告と意見交換

第二分科会では、河合塾の世界史講師である青木裕司氏を招いた。まず青木氏から、センター入試および個別入試(国公立大学の二次試験および私立大学の試験)の出題事例と、河合塾世界史科プロジェクトチームが作成した出題案についての紹介・説明を受け、その後に質疑応答と、本委託研究に関するより広い意見交換を行なった。

青木氏によれば、思考力等を問う問題の出題事例は増加しつつある。河合塾の出題案も、既存の出題事例をアレンジしたものである。それらのいわゆる「良問」の形式面および内容面の特徴は次の通り。

- 小問の間に連動がある問題(前問の正誤が後問の正誤に影響を与える問題)
- 正答数が決まっていない問題(「すべて選べ」問題)
- 長期の歴史変動についての問題
- 合科目的な問題(例：地理を意識した問題)

また質疑応答(意見交換)においては、知識と思考力等との関係について次のような議論があった。青木氏は、予備校講師としての長年の経験に基づいて、「知識はないが思考力はある」という生徒はおらず、しっかりした知識をもたなければ、思考はできないのではないかと思うと述べた。しかし、大学教員である分科会の委員からは、知識はあるけれども、自分の頭で考える(新しい知識を生み出す)ことができない学生が大学には多い、という別の認識が示された。このような認識に対して青木氏は、生徒たちの基本的な読み書きの力が減退してきているように思われ、それが思考力に影響を与えているのではないかという見解を示した。

なお、分科会の委員からは、青木氏が紹介した出題事例と出題案の多くが統計資料に基づく問題であったため、統計資料に限られるようなテーマ(例えば文化・芸術分野)あるいは時代についての出題が難しくなるのではないか、という問題提起があった。

#### (2) 第3回分科会：早稲田大学岡田・加藤両研究員による報告及び意見交換

第3回分科会では、岡田研究員が日本国内の個別入試およびアメリカの大学進学希望者対象の共通試験(SAT: Scholastic Assessment Test)の出題事例と、高大接続歴史研究会のメンバーが作成した出題案についての分析結果を提示した。その後に質疑応答を行なった。

岡田研究員は、まず高大接続システム会議最終報告書を参照し、個別大学選抜の意義が、「これからの時代を生きる一人一人が、十分な知識・技能と、それらを基盤にして答えが一つに定まらない問題に自ら解を見出していく思考力・判断力・表現力、主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度を測った上で、アドミッション・ポリシー、ディプロマ・ポリシーなどに基づく、大学側が求める人材をいかに選抜するか」にあることを確認した。その上で「答えが一つに定まらない問題」についての思考プロセス(「思考力・判断力・表現力」)についての学びの成果を、ある特定の答えを求めざるを得ない入試でどのように測るかが課題であり、その一

方で、歴史科目を含む社会科学科目は、各大学が求める人材の特色を最も出しやすいはずだ、という見解を述べた。

次に、思考力等を問う問題事例についてはすでに一定の蓄積があると述べた上で、①記号選択式（マーク式）・語句記入式と②記述式の2つの出題形式についてのそれぞれの特徴と課題を下記のように述べた。

① 記号選択式・語句記入式

- 歴史用語を問う問題ではなく、SAT 試験にあるように、より理論的な理解（地域間比較、歴史のパターン、概念理解など）を問う問題。
- 史資料の解釈、文章の読解、対話形式で展開される歴史解釈などを問う問題。

② 記述式

- 採点コストを踏まえた上で、いかに思考のプロセスあるいは表現力を評価できる問題を作るかが課題。
- 知識をまとめる「記述」ではなく、史資料から読み取った情報と知識を踏まえて「論述」する問題。

あわせて岡田研究員は、地域・テーマ・時代などが「バランスよく」含まれている大問群、という全体構成から脱却する必要があるという見解を示した。

3.2.2 早稲田大学過去問の検討

歴史分科会では、7月末の早稲田大学分科会メンバーによる検討会を経て、第3回分科会（8月2日）において、本委託研究の幹事校である早稲田大学の過去の入試問題の傾向や改善を要する点について議論した。

加藤研究員はまず、主要6学部（政治経済学部、法学部、文化構想学部、文学部、教育学部、国際教養学部）の日本史・世界史の出題形式（2016年度）は次の通りであることを指摘した。

表 3-3 主要6学部の日本史・世界史の出題形式（2016年度）

<2016年>		政経	法	文化構想	文	教育	国際教養
日本史	大問数	5	4	4	6	5	4
	1 語句選択	20	6	11	19	14	9
	2 正誤判定	12	13	15	10	11	23
	3 年代整序	3	3	0	1	1	0
	マーク式	35	22	26	30	26	32
	4 記述	12	18	18	14	12	8
	5 論述	1	0	0	0	0	0
	記述式	13	18	18	14	12	8
	小問 計	48	40	44	44	38	40
世界史	大問数	5	5	8	9	4	5
	1 語句選択	11	13	13	6	17	19
	2 正誤判定	12	19	10	18	20	22
	3 年代整序	5	1	1	1	3	0
	マーク式	28	33	24	25	40	41
	4 記述	19	0	20	12	10	2
	5 論述	2	1	0	1	0	0
	記述式	21	1	20	13	10	2
	小問 計	49	34	44	38	50	43

表注:

- 1 語句選択 語句の判定。正誤を判定すべき語が1つないし2つに限られているもの。
- 2 正誤判定 文の判定。正誤を判定すべき語が複数含まれているもの。
- 3 年代整序 出来事の順序を並べるもの。出来事を表す語句・文の正誤等の判定が必要なものは、語句選択あるいは正誤判定としてカウント。
- 4 記述 単語を書く。
- 5 論述 文を書く。15字程度のものからより長いものまで。



表 3-3 にあるように、早稲田大学の過去問は、概ね、10 問程度の枝問（小問）からなる 5 問程度の  
大問から構成されており、構成上は、一つのテーマについてじっくりと思考を掘り下げられるようになっている。そし  
て全体的な特徴として、「マーク式」の問題が多いこと、これに対して「記述式」の問題は一定数出題されている  
ものの、15 字以上の文章の書かせる「論述（5）」式の問題は、政治経済学部、法学部、文学部の他で  
は出題されていないことが示された。加藤研究員は、このような出題形式の選択は、採点コストを踏まえたもの  
だと考えられると述べた。そして、例えば、2017 年度の政治経済学部と法学部では、日本史と世界史それぞ  
れ約 2,000 件ずつ（合わせて約 4,000 件）の答案の採点を、限られた数日の間に行なっていること、また  
「論述」問題が出されていない文化構想学部の採点対象答案の数は、10,000 件を超えていることを紹介し  
た。

次に、同主要 6 学部の出題内容（2016 年度と 2017 年度）の検討の結果として、加藤研究員は、ま  
ず学部別には、次のような特徴があると指摘した。

- 文・文化構想：多くの大問から構成され、毎年広い時間と空間（以下、時空）とテーマを問う。
- 教育・法：複数年にまたがり、広い時空とテーマについて問う。
- 政経・国際教養：時間は近現代、空間はアジアが主要。

次に全体的な特徴について、次のように指摘した。史資料を読ませる問題が少なめであり、その傾向は日  
本史より世界史の方に強い。また、大問の史資料やリード文を読まなくても、小問の問題文さえ読めば解ける  
ような問題（「それはさておき」式問題）が大半を占め、すなわち大問と小問との間に有機的な繋がりが確認  
できない。加藤研究員は、このような特徴が、「知識偏重」問題との批判を受けるひとつの原因であるという見  
解を示した。

ただし、史資料あるいはリード文を読ませた上で思考力等を問おうとする工夫がなされた、いわゆる「良問」も  
あり、それが 2016 年度よりも、2017 年度の方に多いことが指摘された。

### 3.2.3 思考力・判断力・表現力の定義

歴史分科会では、第 4 回以降の一連の分科会において、思考力・判断力・表現力の定義表（以下、定  
義表）を完成すべく、検討を重ねた。この定義表については、定義それ自体を抽象的に検討するよりも、4 章  
で詳しく述べる「試行試験実施に向けた作問および評価の検討」と並行して具体的に検討した方がよい、とい  
う分科会の総意に基づき、分科会および作問ワーキンググループ（4 章 2 節で詳述）が、本格的には第 3 回  
分科会（8 月 2 日）以降、年度内の時間をかけて継続的に検討した。

そして、下記の表 3-4 を暫定版として、第六回分科会（12 月 25 日）で、試行試験問題案（小問単  
位）と紐づけて提示した。

表 3-4 思考力・判断力・表現力の定義表（1）

能力	定義	大カテゴリー	
思考力	推論の正しさを判別する。 自分自身で推論を構築する。	Reading	1) 与えられた資料を読んで意味内容を理解する力。
		Connection	「 <u>関連性</u> 」を見出す力 1) 複数の時空間 2) 領域間の結びつき 3) 異なる次元における位置づけを見出す
		Discovery	「 <u>多面的・多角的な見方</u> 」を発見・尊重する力 1) 与えられた資料の中で明示されていない事柄 2) 資料の複数の解釈の可能性
		Inference	得られた資料などから、「 <u>論理的・経験的に考える</u> 」力 1) どのようなことが原因で、どのようなことが結果として起こるのかという、事象間の因果的な関係 2) 現代的な諸課題とのつながり
判断力	複数の発見した事柄や推論の筋道の中から正しいものや重要なものを選択する。 ※選択する際には前提とする状況や制約を踏まえる。	Judgement	1) 複数の事項・選択肢の中で正しいもの、あるいは誤っているものを識別する力 2) 複数の事項・選択肢の間で優先順位をつける力 3) 見解が分かれる論点をめぐって各々の主張を支持する理由・論拠を見分ける力
表現力	発見した事柄や自分の推論・判断を適切に表現する。 ※与えられた資料を活用した表現を含む。	Expression	1) 論理的に表現する力 2) 簡潔に表現する力

この定義表は、本委託研究全体の一定のフレームワークとして第 2 回分科会（8月2日）において共有された、その当時の公共分科会においてすでに作成が進んでいた定義表<sup>7</sup>を改定することにより作成したものである。定義の内容に他の分科会との重なり合いがあるのはそのためであるが、これは、社会科学科目における思考力等の定義は、分野間で重なり合う部分が多いとの認識に基づく。

また、「判断力」の定義に含まれる「前提とする状況や制約を踏まえる」という条件は、とりわけ歴史分野では重要であると考えられるとの意見が出された。また、一方で「多面的・多角的な見方を発見・尊重」（表 3-4 中、「思考力」の「Discovery」要素）することを求めつつも、他方で生徒に対して、教育現場より一層厳密に、ある特定の解を求めざるを得ない大学入試という状況においては、リード文や史資料から判断の「前提とする状況や制約」を読み取る力が、鋭く問われることになるとの認識が共有された。

<sup>7</sup> 同表は、「平成 29 年度全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会(第 12 回)・大学入学者選抜改革エキスポにおける大阪大学の報告資料(「情報科」における思考力・判断力・表現力の評価手法および CBT プロトタイプシステムに関する研究)」を、公共分科会が改定したバージョンであった。

なお、表 3-4として上述した定義表（1）の「思考力」の定義の中に「判別」という「判断力」にかかわる文言が含まれているように、思考力・判断力・表現力は実際の思考のプロセスにおいては不可分であって、あえて区別して定義することには違和感もあるとの意見が出され、多くの賛同を得た。そのため、分科会は下記の別案を、第2回公開ワークショップ（3月12日）において提示した。この別案は、大学入試センターとの意見交換（12月13日）を踏まえて、思考力は判断力および表現力と「不可分」という観点で定義したものである。分科会では、上述の暫定版とともに今後も定義表についての検討を重ねていくことを確認した。

表 3-5 思考力・判断力・表現力の定義表（2）

能力	定義	大カテゴリー	
<b>思考力</b> →判断力・表現力 と 不可分	知識を活用して歴史事象を多角的に考察し、因果関係、歴史的意義、現代へのインプリケーションを説得的に（再）構築する。	Reading	1) 与えられた資料を読んで意味内容を理解する力 2) 知識を活用して歴史事象とその展開を類推する力
		Connection	「 <u>関連性</u> 」を見出す力 1) 時系列的な把握、複数の時空間での位置づけ 2) 領域間の結びつき(接触・交流) 3) 事象間、登場主体間の関係（重みの判断も含む）
		Discovery	「 <u>多面的・多角的な見方</u> 」を発見・尊重する力 1) 与えられた資料の中で明示されていない事柄（当時の文脈、資料の書き手の立場など）の考察 2) 資料の複数の解釈の可能性、各資料の重み・意義の判断 3) 異なる次元における位置づけを見出す（ビッグピクチャー、歴史的意義の把握） 4) 比較の視点
		Inference	得られた資料などから、「 <u>論理的・経験的に考え・表現する</u> 」力 1) 事象間の因果的な関係を把握し、概念やパターンを抽出する 2) 現代的な諸課題とのつながりを考察+課題分析への応用

### 3.3 公共分科会

#### 3.3.1 河合塾・梅明宏講師との意見交換会（第3回分科会・7月）

公共分科会では、高大接続改革の全体的な方向性に関する検討作業と並行して、より具体的に、個別大学の入学者選抜試験において新科目「公共」の試験問題を作成するにあたり、適切な方法ならびに出題形式についても検討を進めてきた。まず本年度の第1回、第2回分科会では、「公共」における思考力・判断力・表現力の評価という観点から、従来の個別大学の公民科試験問題（過去問）の中から「良問」と思われるものを抽出し、検討を行った。検討対象として取り上げた過去問の例（一部）は、以下の通りである。

#### [選択式問題]

- ・2017年度早稲田大学法学部「政治・経済」大問1
- ・2016年度慶應義塾大学商学部「論文テスト」大問II etc.

#### [記述式問題]

- ・2016年度一橋大学「倫理・政経」大問2
- ・2015年度信州大学教育学部「公民」 etc.

これらの過去問の検討をふまえて、適切な出題形式、作問方法をめぐって議論し、次年度に予定している

試行試験実施に向けた作業の方向性の共有を図った。

こうした検討作業をふまえた上で、2017年7月の第3回分科会において、河合塾で長年、公民科科目の授業を担当し、大学入試センター試験・個別大学の入学試験における公民科科目の問題に関する豊富な知見を持つ梅明宏講師を招き、意見交換会を実施した。同分科会では、まず梅講師より従来の大学入学試験に見られる思考力・判断力・表現力を試す良問の紹介と解説を受け、そのうえで試行試験の作問にあたって重視すべき方針について分科会委員の間で意見交換を行った。

思考力・判断力・表現力を試す問題を作成する際に重視すべき点として、梅講師により主に以下の三点が指摘された。

**○過去と未来の間の不確実性を扱う公民科科目においては、一義的な解がない問題の作成を模索する必要がある。**

公民科科目は、多様な人々の間で行われ、その動向・変化の不確実性を避けがたい社会的事象を扱う。そうである以上、多様性と不確実性を受け入れ、必ずしも一義的な解を導き出すことのできない社会的問題の考察も求められることになる。

**○問題文をしっかりと読ませる工夫が必要。読解力、特に論理についての判断力と構成力を試すことがポイント。**

従来の個別大学入試の問題には、リード文や図表・資料の読み込みをせずとも、例えば選択肢文の検討のみで正解の発見が可能な設問が散見される。そこで、問題文の読解を迂回させず、しっかりと読み込ませるための工夫が求められることになる。その際、特に、論理関係に関する判断力と構成力を試すための工夫をいかにして施すかという点が重視されるべきである。

**○現代社会への感度をいかに高めていくかという点もちろん重要。**

公民科科目においては現代社会における諸問題の分析、考察を学習上の課題として含む以上、大学入試問題においても現代社会の諸問題に対する受験生の感度をいかに高めていくかという視点がやはり重要となる。それゆえ、時事的な問題やテーマを扱うことに積極的な姿勢を持つべきであるが、どのような性質の時事的な問題・テーマを取り上げるべきかの基準としては、さしあたり以下の3点が挙げられる。

- ①事実関係が確定されていること
- ②簡潔に説明可能であること
- ③時事的問題・テーマに関する情報に、受験生がアクセス可能であること

### 3.3.2 「公共」における思考力・判断力・表現力の定義

試行問題の作成、ならびに、その結果を検証する際の基準を設定することを目的として、本年度初頭より、新科目「公共」における思考力・判断力・表現力の定義表の作成を漸次進めてきた。定義表の作成にあたっては、平成 29 年度全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会（第 12 回）・大学入学者選抜改革エキスポにおける大阪大学の報告資料「「情報科」における思考力・判断力・表現力の評価手法および C B T プロトタイプシステムに関する研究」を参考にした。ただし、同報告資料における思考力・判断力・表現力の定義はあくまで情報科に適合するものとして示されたものであることをふまえつつ、「公共」という科目の特性にふさわしい定義表の作成を進めてきた結果、ここに示す思考力等の定義は、同報告資料における定義とは実質的に異なる、独自の内容を含むものとなっている。また、分科会、コンソーシアム会議、公開ワークショップ等での意見交換の内容もふまえ、定義表には逐次改訂を施しており、ここに示す表もあくまで 2017 年度終了時点における暫定的な案であり、次年度の成果を反映させてさらに改訂を加える可能性があることに留意されたい。

表 3-6 公共分科会における思考力・表現力・判断力の定義表

能力	定義	大カテゴリー	
思考力	推論の正しさを判別する。 自分自身で推論を構築する。	<b>Reading Connection</b>	与えられた資料を読んで意味内容を理解する力。 複数の事項間の結びつき（関連性）を見出す力。
		<b>Discovery</b>	与えられた資料の中で明示されていない事柄を発見する力。
		<b>Inference</b>	得られた資料などから、どのようなことが原因で、どのようなことが結果として起こるのかという、事象間の因果的な関係を論理的に考える力。
		<b>Judgement</b>	複数の事項・選択肢の中で正しいもの、あるいは誤っているものを識別する力。したがって、偏りのない、公正な判断基準を形成することが求められる。 複数の事項・選択肢（トレードオフを含む）の間で優先順位をつける力。 見解が分かれる論点をめぐって各々の主張を支持する理由・論拠を見分ける力。
判断力	複数の発見した事柄や推論の筋道の中から正しいものや重要なものを選択する。 ※選択する際には前提とする状況や制約を踏まえる。		
表現力	発見した事柄や自分の推論・判断を、論拠を挙げて表現する。 ※与えられた資料を活用した表現を含む。	<b>Expression</b>	文学表現や芸術表現と異なり、自分の意見を読み手が理解し納得するように、自分の主張の根拠を論理的に整理して順序立てて述べる力。 その意味では、小説などの創作文における表現力とも、初等・中等教育で重視されている感想文とも異なる、社会科学的な説明文の表現力を求めるべきである。

公共分科会における思考力・判断力・表現力の定義表のポイントは、以下の通りである。

**思考力**：事象間の因果関係に関する推論を特に重視。

**判断力**：高校学習指導要領改訂案の内容をふまえ、公正な判断基準の形成を強調。

**表現力**：文学・芸術表現とは異なる、社会科学的な説明文の作成を重視。

まず、思考力の定義においては、社会的事象について考察、分析する上で、与えられた資料などから事象間の因果的な関係を論理的に考える力として推論の能力を特に重視している。こうした推論能力は、社会科学における仮説を構築する上で必須の能力であり、さらにまた、「公共」における課題解決型学習においても、社会的問題の解決の糸口をつかむためにまずもって求められる能力であると考えられる。

最終的にいずれの対応が適切であるか否かを判断するにせよ、それに先立って価値観や観点の多様性を視

野に収め、偏りのない公正な比較考量を行うことがきわめて重要である。

表現力の定義においては、思考力・判断力に関する定義を受けて、文学・芸術表現とは異なる、社会科学的な説明文を作成すること、特に論拠を挙げて自らの主張・見解を表現することを重視している。より具体的にいえば、社会的事象の因果関係に関して自らが構築した推論や、見解の分かれる論点に関する自らの判断などについて、他者が理解し納得するように確かな論拠を挙げ、論理的に整理して順序立てて説明する力が、「公共」における表現力として特に重視される。こうした意味での表現力は、小説などの創作文における表現力や、いわゆる「感想文」における表現力とは性質を異にしている。

### 3.3.3 出題テーマ・出題形式に関する方針

2017年7月の第3回分科会にて、それまでの調査、意見交換の内容をふまえて、試行試験問題案の作成プロセスにおける出題テーマならびに出題形式に関する方針を以下のように定めた。

#### ①政治・経済・法・情報の4領域を（可能な限り）横断する問題の作成

大問ごとに扱う領域が1つに限定されがちであった従来の公民科試験問題における「縦割り」傾向を脱却して、1つの大問のなかで可能な限り複数の領域を横断する問題を作成する。

#### ②表現力を問う要素を盛り込む（少なくとも各大問の中に1問）

表現力の評価のために、具体的には各大問中に少なくとも1問は記述式問題を盛り込む。数百字の長文記述式だけでなく、与えられたデータをグラフという形式で表現することを求めるような小問も設ける。

#### ③複数タイプの資料を活用する

学術的文献からの引用のみならず、新聞・雑誌の記事や、既存の教科書には掲載されていないような統計資料など、複数タイプの資料の読み取りを求められるような問題を作成する。

#### ④リード文、資料・図表を「読み込ませる」ことを意識する

リード文や資料の読み取りを迂回して解答することが困難な問題を作成する。

#### ⑤時事的な問題・テーマに関する「教育効果」を意識する

高校生にとってもアクセス可能な時事的な問題・テーマを取り上げることが心かげつつも、問題の解答を通じて当該の問題・テーマに対する興味関心、そして理解・考察の深化が促されるような構成をもつ問題を作成する。

## 3.4 制度分科会

### 3.4.1 大学で学ぶ学生として必要とされる資質・要素（社会で必要な資質）

- ・認知能力
  - ・メタ認知能力 の2種
  - ・「知識・技能」
  - ・「思考力・判断力・表現力」
  - ・「学びに向かう力・価値観の醸成」
- } 21世紀型能力

思考力 ⇒ 批判的思考力、協働的思考力、創造的思考力

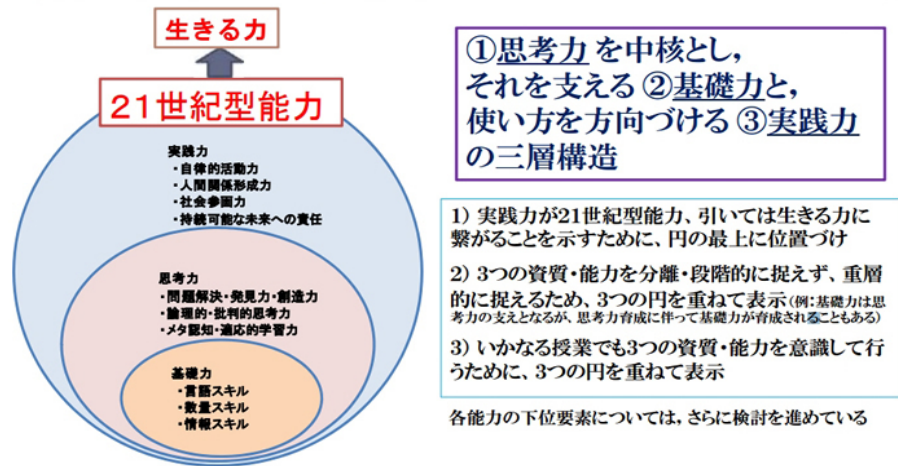


図 3-1 基礎力・思考力・実践力の概要

初等教育から中等教育を経て、「グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の有為な形成者」として社会生活を送るための実践力を身につけるため、高等教育機関において更なる教育をうけられる資質・能力を備えているか見極める必要がある

### 求められる資質・能力の枠組み

21世紀型能力:「生きる力」としての知・徳・体を構成する資質・能力から、教科・領域横断的に学習することが求められる能力を**資質・能力として抽出し**、これまで日本の学校教育が培ってきた資質・能力を踏まえつつ、それらを「基礎」「思考」「実践」の観点で再構成した**日本型資質・能力の枠組み**である。



「文部科学省 育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会（第6回） 配付資料」より引用

図 3-2 21 世紀型能力の概要

高等教育機関で社会科学目（歴史・公共・地理）を深く学び、研究者としての進路を選ぶのであればその進路先・専門、専攻したい教科・科目によって必要とされる資質・要素は変わってくるはずである。

しかしながら専攻の決まっていない学生が、高等教育機関に進学し、進学先での教育を受けられるだけの資質をはかるのであれば関西学院大学主体で検討中の「JAPAN e-Portfolio」を入試に活用し、そこに記入された内容を試験時の参考とするのもよい案といえるのではないだろうか。

「JAPAN e-Portfolio」に記入された内容（課外活動、部活動、科目オリンピックなど記入できる内容は多種多様である）を各大学の 3 ポリシーに照合し、ルーブリック評価などを用い、数値換算することで選定に生かす、もしくはその内容そのものを試験の代用とすることもできるのではないだろうか。そのためにはそれぞれの大学のポリシーが募集要項に明示されている必要がある。

なお、ポートフォリオ導入を現実的にするためには、ポートフォリオに記入する内容・添付データの保存方法、大学側が入試の際に必要なとする選択項目など、決めることは多く、数多くの関係者の意見も取り入れながら検討を重ねる必要があるだろう。

そのためにも大学側でのルーブリック評価表を確かなものにしておく必要がある。ルーブリック評価にはどの項目を用いたら大学としてほしい人物選定に利用できるか、その評価をするための基準を新たな入試導入前には確実にしておく必要がある。

社会科目での試験の一助として、英語科目のように社会科目においても外部検定試験を利用する、というのも一案かもしれない。だが、社会科目における外部検定試験で汎用性の高いものは資格検定試験になってしまう。

点数化の難しい資格検定試験を適用させることや、利用することが入学時に必要な力を測ることになっているのか。そのような試験は専門的な知識（記憶力）を測っているのみであり、思考力・表現力・判断力を測っているとは言い難い。趣味の域をでない検定試験は入学試験利用には不向きなのは明白である。

英語科目の外部検定試験導入についても、学力担保ができていくかどうか、ということでは各大学で議論が必要とされるところである。

### 3.4.2 「入学試験」の理想形とは（大阪市立大学 教育改革シンポ）倉元直樹教授の講演

【入試における「公平性」の原則】

2017年9月12日（火）@大阪市立大学 教育改革シンポジウム

「入試のデザインを考える-大学入試の諸原則と高大接続改革の深層-」

東北大学 倉元 直樹教授 の講演

【概要】

・大学入試をどのように理解するか

大学入学希望者選抜試験がなぜ、変革を求められているのか？

⇒現状の大学入試が、本来の入学試験の意味を持たなくなってきたためである。

これまでの入学試験とは、その大学での教育を受けるだけの力があるか、

それを見極めるためのスクリーニング機能を持っていたはずである。

・大学入試が多様化していること、多様化による評価尺度の多元化。

・国が求める「社会に参画できる人間像」、他者との協働により当事者として国家・社会などの「公共的な空間」をつくる存在である、ということを知っているか、持続可能な社会づくりに向けた役割を担う主体となることができるか、様々な観点から課題を見出し、考察・構想できる人間であるか、といったことをどのような試験をもって測るのか。教科書の内容を覚えた一律の点数評価のみでよいのか。その能力をペーパー試験で測る必要があるか

⇒ペーパー試験でわかる内容・能力には限界があるのではないかな？

・入試は大学から高校へのメッセージをこめることができるとして設計し、学生が記す志望理由書・面接はその学生の大学への思いを伝えることが可能な仕組みになっていることが公平であるといえるのではないかな

一例) 東北大学型 AO 入試の諸原則

・公平性の原則、納得性の原則



- ・育成の原則 ⇒ 選抜を通じて高校側にメッセージを送るべき  
(高校で育ててほしい人材像を伝える)
- ・募集優先の原則

### 3.4.3 「高大接続」改革の真の目的

#### 【これからの入試の姿】

- 個別問題作成は各大学のポリシーを反映させるために各々の大学で作成することが望ましい。しかしながら時間的な制約もあり、問題作成に係る教員の多くの高校・大学・教育業界関係者に協力を仰ぐことが必要になってくるのではないのだろうか（大学の教員が問題作成するのには限界がきている。入試問題作成者は学習指導要領を読んだこともない、研究者であり、教育者としては適任とは言い難い）
- よりよい入学者選抜制度を維持するためには現制度をどのように変更するのがよいか
- 入学試験は誰にとってのものであるか、公平性・公正性を保ち続けたまま、入試を行うためにはどのようにするのが適切か
- 入試とはどのような性質のものであるのがよいか、公平・公正であることは絶対条件になるのだろうか

上記に加え、AI の発展・活用や、職業選択・キャリアの積み方など、これからの学生が社会において直面するであろう多くの課題・事柄・事象を含めた内容での検討が必要になってくるだろう。

主にこうした点を 2018 年度も継続して研究していき、2018 年度の制度検討分科会の最終報告書としてまとめる予定である。

#### 4. 試行試験実施に向けた作問および評価の検討

本章では、2018年度に実施予定の試行試験に向け、試行試験の方法、作問方法、結果の評価方法について述べる。また、地理・歴史・公共の試行問題案作成の経過を述べる。とりわけ、公共分科会においては、早稲田大学学部生向けに実施したプレ試行試験の実施結果についても言及する。

##### 4.1 地理分科会

###### 4.1.1 試行問題の素材検討

試行試験問題の作問のため、たたき台として問題に使用する素材を各メンバーが持ち寄り検討した。検討した素材は以下の通りである。

###### ● 統計データに関する素材

- 自然災害の死者数や被災者数
- 各都道府県の人口増加率や県民所得
- 各国の家畜の飼育頭数の肉の生産量
- 国内の食糧需給率
- 各国の出生率・死亡率
- 各国の一人当たり国民総所得（GNI）とジニ係数
- 各国の一人当たり国民総所得（GNI）と人間開発指数（HDI）

###### ● 地図に関する素材

- 架空の災害発生時における、自治体の災害対策本部会議資料
- 国内地形図
- ハザードマップ

上記素材を用いた作問に関して、主に下記の意見が出された。

- 思考力は空間的な発生件数、発生場所を考えてもらう。判断力は選択肢を選ぶ中で論理的に考えてもらう。表現力は文章で表現させる。少なくとも1つは書かせる問題を出題したい。
- 雑多な情報の中から何が重要で何が重要でないかを取捨選択させる。思考力を試せるのでは。
- 国や地域の特徴を問えるような素材を選んだ。見慣れないグラフがきちんと読み取れるのか、資料を読み取るスキルは思考力につながる。
- 具体的な地形を考えさせながら何が問題かを考えさせたい。資料を正確に読み取れるか。平面で地図的な発想が出来ると思った。具体的な場所を想定しながら、何が問題か考える。ハード・ソフト面から合わせて災害対応を考えてみる。

###### 4.1.2 試行問題案の作成

4.1.1 で検討した素材を基に試行試験として出題するテーマを決定した。出題テーマは「地理総合」を見据え、以下の3種類とした。

- 防災・災害
- ジニ係数、ESD

- 地形図・断面図

#### 4.1.3 合教科問題の検討

地理分科会において、複数の科目を組み合わせた合教科化問題の作成に関して検討した。その結果、以下の意見が出された。

- 食料問題や課題に関するテーマならば、地理と公共の総合問題が作成できる。
- 同じ資料を使いながら、それぞれの特徴を問題でつくと総合的な問題が出来るのでは。世界史の人名や王朝名を抜くとかなり地理との親和性が高い。
- 歴史や公共の問題に地理の設問を入れるのはそう難しくない。
- 地理のオリジナル要素（グローバルな課題、地形図、ローカルな課題）も入れ込む必要がある。
- 自然地理と人文社会的な問題ができるのではないか。
- 各科目の問題を他科目から見る
  - ⇒公共からは特に移民は良いのでは
  - ⇒例えば、ジニ係数の資料を公共の先生に渡したらどうい問題を作成するのか

これらの意見を基に、2018 年度事業においても他分科会と連携しながら引き続き検討を行う予定である。

## 4.2 歴史分科会

### 4.2.1 概要と基本方針

歴史分科会は、作問・評価ワーキンググループ（以下、WG）が提案する試行試験実施に向けた作問および評価案（以下、問題案等）の検討を行った。WG は、世界史と日本史を専攻する早稲田大学所属の専任教員 2 名（分科会代表である都丸教授と副代表である鎮目教授）と博士号を持つ研究員 2 名（岡田研究員と加藤研究員）で構成された。分科会は、この WG が提案した問題案などを、2017 年 8 月から 2018 年 3 月にかけて開催された 5 回の分科会（第 3 回から第 7 回）で検討した。その間 WG は、分科会委員から得たコメント等を踏まえて、問題案等の改定を行い、大学生を対象に実施するプレ試行試験の問題（後述）が、2018 年 3 月末に完成した。歴史分科会は、2018 年 4 月に大学生を対象にプレ試行試験を実施し、その結果を踏まえて試行試験の問題案の再検討を行ったうえで、夏休み以降に高校生を対象とする試行試験を実施する予定である。

問題の概要（問題の構成と解答の方式）および思考力等の評価にかかわる基本方針は次の通り。

#### （1）問題の構成

日本史と世界史に分けて作問した問題（それぞれ大問 2 つずつ）と、新学習指導要領により導入される「歴史総合」を念頭に作問した共通問題（大問 1 つ）からなる。ただし、日本史問題を含む全てにおいて、グローバル・ヒストリーという考え方を重視した。そして各大問には、10 問程度の小問が枝問として含まれている。

本委託研究では、思考力等を問う出題事例および出題案の検討は、小問単位で断片的に検討するのではなく、ある一つのテーマについてじっくりと思考を深められるような大問単位での問題の検討・提案を目指すこととした。

#### （2）解答の方式

解答の方式としては、次の 3 種類を採用した。第一に選択・穴埋め（マークシート）式問題、第二に短答

(記述)式問題、第三に論述問題である。論述および短答式問題は少なめで、主に選択・穴埋め問題で、思考力・判断力・表現力の評価をめざすこととした。

本委託研究は、論述形式の問題は採点に時間がかかるという意見が委員から出されたことに鑑み、私大の個別入試の様々な制約(作問および評価のための資源の不足など)を踏まえて、実現・持続可能性に配慮しつつ、論述形式だけでなく、それ以外の形式(選択・穴埋め式)の問題の検討・提案もあわせて目指すこととした。

前述の第2回分科会の検討結果として紹介した、思考力等を測定する問題の形式のうちのひとつ「正答数が決まっていない問題(「すべて選べ」問題)」については、マークシートの判読における技術的な問題と予算上の制約などを踏まえ、今回作成する問題には含めないことにした。

### (3) 基本方針

問題は、全体として、知識と技能、および思考力・判断力・表現力を次のような二段階からなる「歴史的思考力」として問うことを目指すこととした。

① ある歴史事象についてのリード文あるいは複数の史資料を読む技能。

② そのような技能により得られた情報について、知識を援用しながら思考し、判断し、表現する力

このうちの第一段階「ある歴史事象についてのリード文、あるいは複数の史資料を読む技能」については、分科会において複数の委員から、「資料に基づく論理パズルを解けることが歴史的思考力であるのか」という問題提起を受けた。この問題提起は、本委託研究が一般的な読解力を研究の対象とするものではない、という点において、重大な問題提起であった。それにもかかわらず、第一段階を「歴史的思考力」に不可欠な段階として含めた理由は2つある。

第一に、前述のように、「知識偏重」と批判されることの多い早稲田大学の過去の入試問題が、読む技能をほとんど測定できていないように思われたからである。したがって、早稲田大学の入試を一例とする大学の個別入試を改革するためには、史資料等を読む技能を評価しようと意識する態度を持つことは必要であるとの考えが共有された。

第二に、読む技能は、「これからの時代を生きる一人一人」(前述、高大接続システム改革会議最終報告書の表現)にとって、より一層重要な技能になると考えられるからである。それほど遠くない将来に、人間とAIが共存する社会が到来すると予想されているが、AIについての研究プロジェクトは、人間がAIに対して圧倒的に優位な一般的能力の一つとして、資料から意味を読み取る読解力を指摘している<sup>8</sup>。また、同プロジェクトは、AIが大学入試模試で、歴史科目については数学科目に匹敵するほどの好成績を修めることも指摘している。したがって、大学入試は、特に歴史科目においては、これからの時代を生きる人間を育てるために、本格的にまずは試行錯誤する必要があるとの考えが共有された。

以上のような理由から、委員の中には多様な意見があったものの、今回の問題作成においては、史資料の読解力それ自体を評価するための問題を、大問を構成する枝問(小問)として含めることとした。

また、いわゆる従来型の知識問題も、思考プロセスを構成するひとつのステップという位置付けとして、小問としては含んでもよいこととした。しかし、その場合も、大問のリード文あるいは史資料を読まずして解答できる問題を

<sup>8</sup> 新井紀子『AI vs.教科書が読めない子どもたち』(東洋経済新報社、2018年)；新井紀子、尾崎幸謙「デジタルライゼーション時代に求められる人材育成」NIRA オピニオンペーパー、no.31、2017年7月 (<http://www.nira.or.jp/pdf/opinion31.pdf>)。

含んではならないこととした。その際、解答に必要な知識の範囲として、高大連携歴史教育研究会の精選後用語を活用した<sup>9</sup>。とりわけ、用語精選において重視された概念用語の理解を問うことも意識した。

最後に、問題はそれ自体が教育効果を持つように設計された。それは大学入試が、一方で生徒の選抜を目的とせざるを得ないが、他方で、高校生らが大学の学びに触れる機会でもあってよいとの考えによる。そのような目的に応じて、問題には多くの未見の資料や、最新の研究成果を含めることとした。

#### 4.2.2 大問別概要

こうした方針に基づく検討の結果として、先に触れた大学生を対象にしたプレ試行試験の問題が 2018 年 3 月に完成した。歴史分科会では、そのプレ試行試験を 2018 年 4 月に実施し、試験後に実施する記述式アンケートとヒアリング調査の結果も踏まえて、高校生を対象とした試行試験の問題の検討をさらに重ねる予定である。したがって、プレ試行試験の問題はあくまでも高校生を対象にした試行試験を行うための暫定的な問題案として位置付けられる。そこで、本報告書においては、現時点で完成している問題について、下記の通り大問別の概要を述べるにとどめ、問題の検討プロセスの詳細については、2018 年度の報告書で述べることとする。

##### ● 日本史

###### <大問 1>

前述のように、早稲田大学の過去の入試問題の中にも、思考力等を測定する工夫がなされた問題が含まれていた。そこで、日本史の大問 1 は早稲田大学の過去の入試問題のなかから大問 1 つを選び、それを改良することで作成した。

大問 1 は、ある特定の時代（第一次世界大戦前後）の日本の対内・対外関係に関する、質の異なる 3 つの史資料（①当時の日本政府外相の発言および②対外関係についての文書史料と③輸出入額など複数の情報が含まれる統計資料）を読み解かせ、歴史事象についての多面的・多角的な知識と思考力等を評価することを目的とした。そして、より深い思考力等を問うための工夫として、問題の時代が第一次世界大戦前後の時代であることは明示せず、史資料を併せ読むことでそれを類推させることとした。また、こうした工夫は、一見知識問題に見えるような問題にも、思考力等を問う問題としての性格を帯びさせる工夫にもなると考えられる。

小問は 8 問で、すべて選択・穴埋め（マークシート）式問題から構成された。マークシート式問題により表現力を問うための試みとして、また表現力を高める教育効果を期して、統計資料の読みおよび考察の論述文の穴埋めを行う問題を含めた。ここでは、論述文にいくつかの概念を含め、その概念の意味を理解し知識と結びつける力を問う工夫を行った。

###### <大問 2>

この大問は、複数の史料を読み比較する力（上述「表 3 思考力・判断力・表現力の定義」における Discovery 要素の 4））を評価することを主眼とした。より具体的には、日本と中国の「開国」にかかわる諸条約（日米和親条約および日米修好通商条約と、中国が西洋諸国と結んだ南京条約など 4 種類の

---

<sup>9</sup> 高大連携歴史教育研究会「高等学校教科書および大学入試における歴史系用語精選の提案（第一次）およびアンケート実施」、高大連携歴史教育研究会ホームページ（[http://www.kodairen.u-ryukyu.ac.jp/new/new\\_91.html](http://www.kodairen.u-ryukyu.ac.jp/new/new_91.html)）。

条約)を比較し、それらの効果(開国の意義)の共通性および差異を発見させると同時に、その原因を類推させることとした。

また、この問題では、日本史受験者にとっては未見の資料である可能性の高い中国の開国にかかわる西洋諸国との諸条約を史料として含んだ。それは、史料を読み比較し、歴史事象を相対化する力を測定することと同時に、歴史学研究の基本的な方法に触れるという教育効果も期してのことである。

小問は5問(小問がさらに枝問を含む構造)で、短答(記述)式と選択・穴埋め(マークシート)式問題からなる。記述式の問題においては、上記のようなねらいに基づいて、開国の意義の共通性あるいは差異を裏付ける語句を条文の中から抜き出すことを求めることとした。またマークシート式問題においては、概念知識として既知であるはずの開国の意義(「領事裁判権」や「関税自主権の放棄」など)を、実際の条文の語句とつなげる力を問うこととした。

## ● 世界史

### <大問1>

この大問のテーマは、主にアメリカ合衆国をめぐる移民についての長期的動向である<sup>10</sup>。問題の教育効果を期して、アクティブ・ラーニング形式の授業場面を想定し、教師・学生の対話文をリード文とした。そして、質の異なる3つの資料(①移民数の長期的動向に関するグラフ、②出入国管理にかかわる法律についての年表、③移民にかかわる風刺画)を読み解かせ、歴史事象についての多面的・多角的な知識と思考力等を評価することを目的とした。また、アメリカ合衆国の現代の移民政策についての知的な関心を喚起することを意図して、メキシコとアメリカ合衆国間の移民の起源にかかわる問いを含めた。

小問は5問(小問がさらに枝問を含む構造)で、すべて選択・穴埋め(マークシート)式問題からなる。それらの小問は、教師・学生の対話の深まりと並行して進行するような構成とした。すなわち大問の中に、まず思考の第一段階として、資料を正確に読む力(上述「表3-5 思考力・判断力・表現力の定義」におけるReading要素)を測定する小問を配置し、その後の第二段階として、資料から読み取った情報を比較したり既知の知識と組み合わせて考察する力(上述「表3-5」におけるDiscovery要素およびInference要素)を測定する小問を配置した。

### <大問2>

本問は、特定の疫病の原因と影響を複数の時代、地域にまたがって考察させる内容となっている。解答のために読解させる史資料は、疫病と関係するグラフ、地図、同時代の記述史料、学術書からの引用文である。これらの性格の異なる史資料から必要な情報を読み取った上で、同時代の基本的な歴史、地理的知識と組み合わせることにより解答が可能な問題設計を試みた。

小問全6問は全て選択式(正誤選択及び穴埋め選択)で、前半の4問は前近代のヨーロッパを中心とする疫病流行、後半の2問は近代のアジアを中心とする疫病流行に関する問題となっている。前半部分では、気候・人口のグラフ、感染地・感染年代を示した地図、疫病と森林開発との関係を論じた学術書からの引用文を読み解いた上で、疫病流行の背景に、交通の拡大・森林減少・気候変動など多面的な要因があり、それらと各地域の継時的な社会発展とを関連づけて考察する力(上述「表3」における

<sup>10</sup> 本大問作成のインスピレーションは、第3回分科会(8月2日)で岡田研究員が提出した資料に含まれた次の資料から受けた。磯谷正行『「大学入学希望者学力テスト」の『世界史』の問題例の公開を受けて』『高大歴史教育研究会会報』2、152-181頁、2016年。

Connection、Discovery 要素および Judgement 要素) を正誤選択により評価する小問を配置した。後半の2問は近代アジアの疫病流行と近代交通ネットワークの拡大との関連を問う問題と、近代的衛生観念の普及とその裏に生まれる差別意識について考察させる問題である。問題形式としてはある見解を裏付けるために必要な情報を選択させる問題、及び複数の史資料を読解した上で、ある主張における論理の根拠を構成する資料を選択させるものとなっている。現在も存在する病気と差別の関係の歴史的淵源への洞察や他者の議論をその根拠に基づき検討する力など上述「表3」における Discover、Inference 要素に焦点をおいた思考力の評価を意識している。

## ● 歴史総合

### <大問3>

本問は、世界史・日本史の総合問題で、明代のアジア海域史をテーマに日本列島を含めた東・東南アジアの歴史展開を、グローバル・ヒストリーの文脈で地域間の横のつながりにもとづき考察させる問題とした。教師・学生の対話文、長文の史料をもとに、世界史 A レベルの日本史・世界史の基本知識を組合わせて思考を働かせることで解答が可能となる問題設計とした。また、記述問題を多く含み、記述による表現力の評価に重点をおいた点も本問の特徴である。

小問全7問の内、4問が正誤選択問題であり、対話の内容や史料を正確に読解できているかを評価する問題や、より抽象度を高めてそこから読み取れる同時代の国際秩序について判断させる問題により構成される。残る3問は、それぞれ語句記述式、短文記述式、論述式という異なるタイプの記述問題とした。語句記述は単純に知識を問うのではなく、その時代を理解する上での重要なキーワードを対話文の中の空欄穴埋めの形で問うことにより、前後の文脈を正確に読み取る力と、キーワードの歴史的意義の理解を問う形となっている。

短文記述式は史料の内容から、対話文や教科書レベルの基本的知識から描かれる歴史像から逸脱する部分を発見させる問題となっており、それにより上述「表3」における Connection、Discovery 要素とそれを短文で解答する表現力を評価することを企図した。

長文論述は、当時のアジア海域の国際秩序の特徴と銀の流通拡大という経済動向がもたらした変化を関連付けて論述させる問題となっており、使用語句を指定して一定の条件付けを行った上で、基本知識、与えられた対話文・史料から得られる情報（他の小問もヒントになりうる）を総合して歴史像を構築し、表現させる問題とした。

## 4.3 公共分科会

### 4.3.1 試行試験問題案の作成

2.3 および 3.3 に記した調査・検討作業を経て、2017年8月より、試行試験問題案の作成を進めてきた。問題案の作成は、次のようなプロセスで進められた。まず、分科会委員の間で大問のテーマを設定し、大問ごとに作問を担当する委員を決定して素案の作成に着手した（2017年8月～10月）。その後、第4回分科会（2017年10月）、第5回分科会（2017年12月）と二度にわたる素案の検討・修正作業を経て、2018年2月実施のプレ試行試験（次項参照）で使用する問題案を完成させた。

作成した問題案は、計9つの大問から成る。各大問で扱っているテーマ、トピックについては、以下の通りである。

### 【パターンA】

- 第1問：日本の人口問題、都市と地方の格差  
国ごとの人口の年齢別構成、日本の少子化、  
日本における移民の積極的受入れの是非 etc.
- 第2問：日本の労働問題  
労働時間規制、時間当たり賃金と年間総労働時間の関係 etc.
- 第3問：グローバル・コモンズ  
コモンズ（共有地）の悲劇、地球環境問題に関する「共通だが  
差異ある責任」原則、排出権取引制度 etc.
- 第4問：リスク社会  
日本の公害問題、市民の健康な生活と社会発展との間のバランス etc.

### 【パターンB】

- 第1問：日本の立法過程と選挙  
二院制の意義、国会での質問時間の配分、業績評価投票 etc.
- 第2問：日本の財政  
消費税の逆進性、ベーシック・インカム etc.
- 第3問：立憲主義  
立憲主義の2つの意味——権力の制限と権力の創出
- 第4問：株式会社  
株式会社における「所有と経営の分離」、株価変動の要因 etc.
- 第5問：EUを中心とした国際関係  
ギリシャ財政危機、イギリスのEU離脱、ポピュリズムの台頭 etc.

#### 4.3.2 プレ試行試験の実施概要（※アンケート、ヒアリングも含む）

##### プレ試行試験・アンケート 実施概要

2018年2月2日（金）に、早稲田大学政治経済学部部の学部生を対象として、プレ試行試験を実施した。プレ試行試験の主な目的は、次年度、高校生を対象に実施する試行試験に向けて、これまで作成してきた問題案が技術的な欠陥を抱えていないか否かを検証することであった。ただし、実施に際しては、作成した問題案が思考力・判断力・表現力の評価に資するものであるか否かについて、問題案の再検討を進める際に参考材料とするデータを得ることに留意した。

プレ試行試験では、パターンAとパターンBという形で二つのパターンの問題を用意し、それに応じて被験者も二つのグループに分けた。パターンAの被験者は18名、パターンBの被験者は17名、被験者総数は35名であった。

試験当日のタイムスケジュールは、以下の通りである。

- 09:30～10:00 被験者受付  
10:00～10:10 試験概要の説明



10:10～11:40 試験

11:40～11:55 アンケート回答

試験後には、試験に関するアンケートも実施した。アンケート項目としては、試験時間、試験の難易度が（高校生を対象とした場合）適切であるか否か、従来の公民科試験との違い、被験者の高校生時の学習環境や利用した入試形態などに関する質問を設けた。

#### プレ試行試験の採点 実施概要

試験の採点は、2月15日（木）に行なった。採点作業は、公共分科会リーダーの齋藤純一教授、公共分科会委員の井之口研究員に加えて、採点補助者4名の計6名で進められた。ダブルチェックを含め採点に要した時間は、実質4時間程度であった。

#### プレ試行試験 成績上位者に対するヒアリング 実施概要

上記アンケートに加えて、プレ試行試験の成績上位者計7名（パターンA：4名、パターンB：3名）を対象としたヒアリングを2月28日（水）に実施した。ヒアリングでは、試行問題の改善すべき点や高校生時の学習経験、具体的には高校の授業でアクティブ・ラーニングに取り組んだことはあるか否か等について、質問・聴取を行なった。

### 4.3.3 プレ試行試験の採点結果、アンケート結果の概要

#### プレ試行試験の採点結果 概要

##### ● パターンA（200点満点）

平均点：129点 最高点：145点 最低点：110点

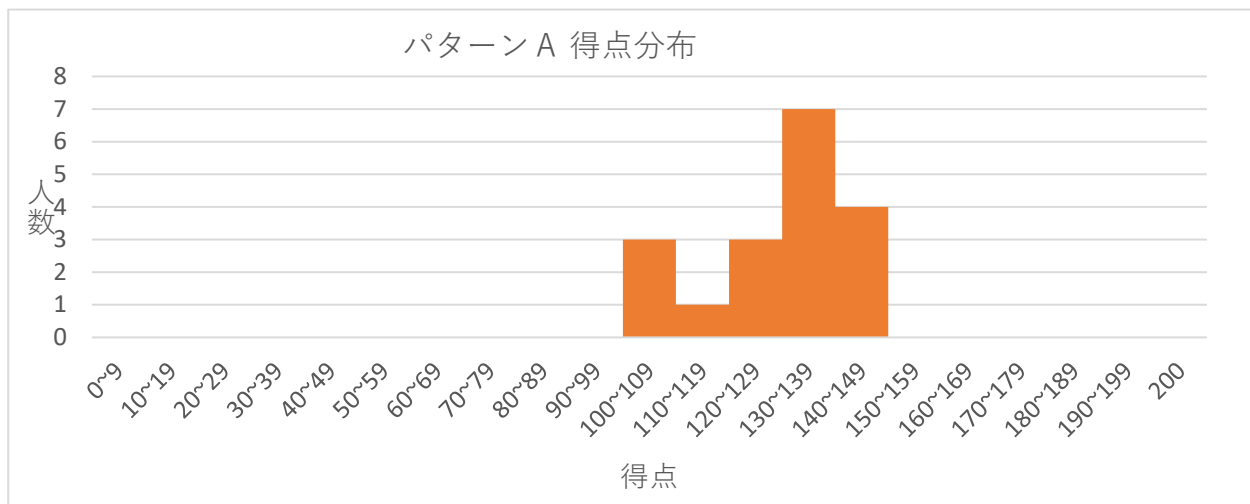


図 4-1 パターンA 得点分布

#### 【大問ごとの平均得点】

第1問：47.6点（70点）

第2問：28.2点（45点）

第3問：24.8点（45点）

第4問：28.7点（40点）

第1問<日本の人口問題、中央と地方の格差>では、やはり、複数の資料読解+400字程度の記述を求める問4（移民の積極的受入れの是非について賛成・反対いずれかの立場を選び、その立場を支持する論拠を記述する設問）の平均得点が12.3点（25点）と低く抑えられている。

第2問<日本の労働問題>では、問2の選択式問題（労働組合法に関する4つの記述のうち、「正しいものをすべて」選択する設問）の平均得点が1.33点（6点）と著しく低いことが、注目に値する。

第3問<グローバル・コモンズ>の問2（世界の二酸化炭素排出量に関する2つの資料を読み、地球温暖化問題をめぐる開発途上国側の主張として推定される選択肢を選ぶ設問）は、「適当なものを2つ選びなさい」という選択式問題であるが、完全解答8点／1つのみ選択は2点という配点にしていた。採点結果を見ると、正解の選択肢を1つのみ選んでいた被験者の割合が高く、平均得点も3.78点（8点）となっている。

● パターンB（200点満点）

平均点：125点 最高点：174点 最低点：69点

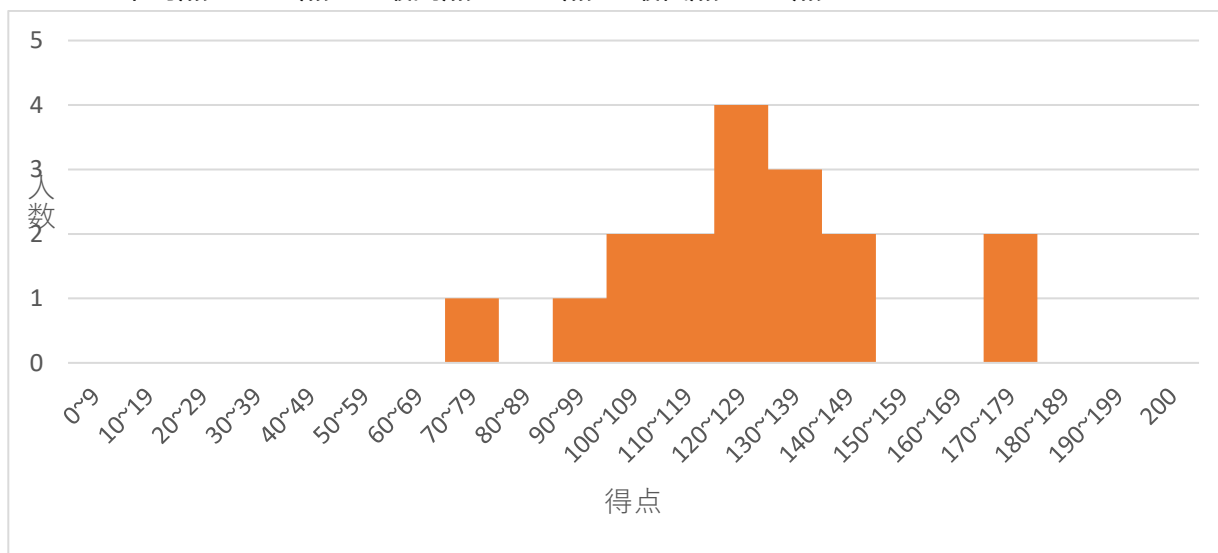


図 4-2 パターンB 得点分布

【大問ごとの平均得点】

第1問：34.9点（50点）

第2問：24.2点（35点）

第3問：14.9点（35点）

第4問：25.9点（35点）

第5問：25.1点（45点）

第1問<日本の立法過程と選挙>では、問4に日本の経済成長率と衆議院議員選挙における与党（第1党）の得票率との関係を考察し、作図+記述する問題を設けたが、問4の平均得点は19.8点（26点）と比較的高く、第1問全体の平均得点の低下を招く要因にはなっていない。ただし、作図問題（枝間）では、経済成長率と与党（第1党）得票率の相関がわかるように散布図を作成することを期待していたものの、経済成長率、得票率をそれぞれ折れ線グラフで表している答案も一定数見られた。

他方、第3問<立憲主義>の平均得点は、とりわけ低い。高配点の第3問・問3（立憲主義に関する二つの文章を比較し、その共通点と相違点について、200字内で記述する設問）において0点の被験者が半数ほど出たことが、平均得点の低下につながっている。また、第5問<EUを中心とした国際関係>では、

特に記述式問題の問6（欧州におけるポピュリズムに関する新聞記事を読んだうえで、なぜポピュリズムが民主主義にとって脅威になると考えられるのかについて考察し、150字以内で記述する設問）が平均得点の低下要因になったと見受けられる。

パターンAと比較した場合、パターンBでは170点台の高得点者が2名いるが、両者ともに第3問・問3や第5問・問6といった高配点かつ平均得点が高い設問で高得点をあげている。

## アンケート結果 概要

※以下2.(1)等の数字は、アンケートにおける質問番号。

### 【試験時間について】

2-(1)「与えられた試験時間（1科目90分）の長さについてどう思いますか」という質問については、被験者全体では「短い」と「ちょうどよい」がほぼ半数ずつであるものの、パターンA・パターンBを比較すると、パターンAの被験者の方が「短い」と回答している人数がやや多い。

### 【試験の難易度について】

3-(1)「試行試験は、高校課程の地歴・公民科目の学習で解答可能できる内容だと思えますか」への回答において、パターンA被験者とパターンB被験者との間で若干の差異が見出される。パターンAの被験者の回答は、「あまりそう思わない」、「どちらともいえない」、「ややそう思う」がそれぞれ6名ずつであった。これに対してパターンB被験者の回答では、「そう思わない」・「あまりそう思わない」が計4名にとどまる一方、「ややそう思う」・「そう思う」という回答が計9名であった。

### 【従来の公民科目試験との違いについて】

今回のプレ試行試験と従来の公民科目試験との違いについて、4-(2)試験に関する感想（自由回答）からは、今回のプレ試行試験に対して「従来以上に思考力・判断力・表現力が要求される問題である」という認識をかなりの被験者が抱いたことが見て取れる。

より具体的にどういう点に従来の試験との違いを感じたかという点については、まず、「今回の試験は、記述式問題が多い」（4-(1)-2）に対して「そう思う」・「ややそう思う」と回答した被験者はパターンA・パターンBいずれにおいても8割超であった。自由回答欄においても「記述式問題が多い」という意見が散見された。

他方、「今回の試験で扱われているテーマが多様」（4-(1)-4）、「今回の試験では、図表や資料の読み込みが必要」（4-(1)-8）については、パターンA被験者とパターンB被験者の間に差異が認められる。特に「図表や資料の読み込みが必要」という点について、パターンB被験者の8割超が「そう思う」と回答している点は、注目に値する。

また、「今回の試験では、幅広い知識が必要」（4-(1)-7）については、被験者全体でも8割弱が「そう思う」・「ややそう思う」と回答、パターンB被験者の中では約7割が「そう思う」と回答している。3-(2)「大学の授業で学習した内容をいなければ解答できないと思った設問はありますか」への回答、および4-(2)の試験に関する感想（自由回答）を見ても、単純な知識問題でなくとも、従来の公民科よりも「幅広い知識」が必要となると考える被験者が一定数いる。

### 【興味深いと感じるテーマについて】

2-(4)「今回の試行試験問題の中で、個人的に興味深いと感じるテーマを扱っている設問はありましたか」という質問に対する回答では、特に、以下の設問を挙げる回答が多かった。

・パターンA・第1問・問4：日本における移民問題

「移民問題は今後の日本や世界を考える上で必ず壁になると思う」

「日本の抱える課題について考える力が試されていると思った」

「経済、社会保障、安全保障など、様々な政策分野に関連する問題」 etc.

・パターンA・第2問：日本の労働問題

「身近なテーマ」

「過労死の問題や働き方改革など、昨今ニュースで大きく取り上げられているから、……ある程度の労働法を高校で教えることも大切だと感じる」 etc.

・パターンB・第4問：株式会社

「株に関するテーマは高校生だった当時は習っていなかった」

「大学での学習内容を扱っており、またその上で高校生でも解けるように配慮されていて興味を持って解答できた」

「経済学の知識を活用できる問題」 etc.

・パターンB・第5問・問6：ポピュリズム

「ポピュリズムは最近ホットな話題であり、また民主主義や現代の社会情勢を考えるのに重要なトピック」

「グローバルな話題で被験者の民主主義および世界に関する考えがわかって、興味深そうだと思う」 etc.

### 成績上位者に対するヒアリング 概要

成績上位者7名を対象としたヒアリングにおいて提起された論点のなかでも特に注目すべき論点としては、以下の三点が挙げられる。

#### ①科目「公共」における知識と思考力・判断力・表現力の関係

試験問題の中に独立した小問として純粋な知識問題を含めるべきか否かという点をめぐっては、ヒアリング参加者の間でも意見が分かれている。

一方において、純粋な知識問題はすべてなくして、与えられた資料の読解に重点が置かれた問題だけにすべきという意見も出されていた。ただし、この種の意見を抱く参加者も、資料読解に重点が置かれた問題であっても、解答にあたっては一定の基礎知識が必要と考えているように見受けられる。

他方、「公共」に関する最低限の知識を問う設問を独立した形で含めるべきではないかという意見もあった。共通性のある試験として一定の得点が担保される方がよいだろうというのが、その理由である。また、「最低限の知識」の範囲とも関連する点として、あまり最近の時事問題を扱うと生徒間の情報格差が試験結果にも反映されてしまう恐れがあるのではないか、という指摘もあった。

## ②文化資本面における格差

従来よりも思考力・判断力・表現力が要求される試験になると、文化資本の面で恵まれている学生にとってより有利となり、教育格差の拡大が助長されるのではないかという意見も、ヒアリングでは出された。これは、大学受験に至るまでの間に経験する学習環境（具体的には家庭、学校、学習塾など）のなかで思考力・判断力・表現力を発達させるための機会がどれほど与えられるかという点で、現に生徒間に格差が生じている、という被験者の現状認識に基づいた意見であると解釈できる。

## ③アクティブ・ラーニングの経験

プレ試行試験の被験者全員を対象とするアンケートでは質問項目として盛り込まなかったが、ヒアリングでは「高校生の時にアクティブ・ラーニングの授業（公民科科目に限らず）を受けたことがあるか」という質問にも回答してもらった。この質問に対し、ヒアリング参加者 7 名中 4 名がアクティブ・ラーニング形式の授業を受けた経験があると回答した。実際に体験したことのある具体的な授業形態としては、

- ・複数の教科書（日本史 B）を比較検討して、その相違点を述べさせる
- ・生徒が発表を行ない、それを教員が評価するという形式の試験
- ・数学の演習において、生徒が解答を板書し、それに対して教員が別解を提示する

などが挙げられた。

### 4.3.4 プレ試行試験の結果から析出される成果と今後の課題

今回のプレ試行試験の結果からは、2017 年度における公共分科会の取り組みの成果、ならびに、次年度の試行試験実施に向けた課題をそれぞれ析出することができる。

#### 【成果】

**①従来の公民科試験問題以上に、図表・資料の読解力、それを前提とした思考力・判断力・表現力が要求される問題の作成に一定の成果が得られた。**

**②時事的な問題やトピックへの興味関心の喚起という面で一定の効果が見込まれる。**

①については、4.3.3 にてすでに述べたように、プレ試行試験の被験者全員を対象としたアンケートの結果からは、今回のプレ試行試験において出題した問題が、従来の公民科試験問題以上に、図表・資料の読解力、そしてそれを前提とした思考力・判断力・表現力が要求されるものであるという認識を相当数の被験者が抱いていることが見て取れる。無論、プレ試行試験の被験者が大学において政治学・経済学・法学の専門的教育を受けている大学生であり、しかも今回のプレ試行試験が「公共」における新たな評価方法に関する調査研究の一環で行われるという趣旨を理解した上で自発的に協力しているという点を考慮に入れて、アンケート結果についても分析、判断する必要はある。しかし、それでもなお、従来型の公民科試験の枠組みを超えて、新科目「公共」における思考力・判断力・表現力を測定するための作問方法をさらに追求するうえで一定の成果を得ることができたといえる。

また、②今回のプレ試行試験の結果は、問題の解答を通じて時事的な問題やトピックへの興味関心が喚起されるという面でも一定の効果が見込まれることを示唆するものであったといえる。次年度実施予定の高校生を対象とする試行試験においても、試験を通じて時事問題に対する被験者の興味関心、さらには理解と考察がいかにかに促されるかという点に着目したい。

## 【課題】

①適切な問題の分量、試験時間をいかに設定すべきか。

②記述式問題において公正な採点基準をいかに設定し、採点基準の共有をいかに図るべきか。採点に要する時間と労力はどれほどのものであるか。

③知識と思考力・判断力・表現力の関係をどう捉えるか。

他方、今回のプレ試行試験の結果からは、主に上記三点の課題も浮き彫りとなった。

まず、①入学者選抜試験として適切な問題の分量および試験時間をいかに設定すべきかという点は再考の余地がある。今回のプレ試行試験は、作成した問題案（大問にして9つ）すべてについて技術的な欠陥がないか否かを検証することを主な目的としていたため、問題の分量（大問数・小問数）という面ではかなり多いものとなった。それに応じて試験時間も90分と比較的長めに設定したものの、アンケートでは、大学生である被験者ですら、その半数が「与えられた試験時間は短い」と回答している。それゆえ、高校生を対象とする試行試験においてもプレ試行試験と同等の問題の分量に設定したならば、相当数の被験者が解答困難になると見込まれる。

以上の点をふまえて、本分科会ではプレ試行試験で使用した問題案を再検討し、次年度の試行試験において採用する大問を以下の4つに絞ることを決定した。これら4つの大問に絞るにあたっては、出題テーマのバランス、出題形式のヴァリエーションなどを選定の基準とした。

- ・パターンA・第1問〈日本の人口問題、都市と地方の格差〉
- ・パターンB・第1問〈日本の立法過程と選挙〉
- ・パターンB・第2問〈日本の財政〉
- ・パターンB・第4問〈株式会社〉

さらに各大問内の小問の数についても再検討し、試験の実行可能性が担保されるよう全体としての問題の分量を調整する作業を進めている。こうして試行試験問題案を確定させるとともに、歴史、地理といった他科目の方針を踏まえつつ、試行試験の試験時間を設定する予定である。

②記述式問題において公正な採点基準をいかに設定すべきか、そして設定された採点基準を採点担当者間でいかに共有していくべきか、という点についても、やはりさらなる検討の余地がある。公正な採点基準の設定という課題は、今回の問題案の作成に際して分科会委員が特に意識していた点である。例えば、パターンA・第1問・問4「日本や海外の移民問題に関する別紙【別紙資料①～④】を読み、日本の移民政策の現状を概略した上で、今後、日本はどのような移民政策を採るべきか、A移民の積極的受入りに賛成の立場、B移民の積極的受入りに反対の立場のいずれかを選択し、その立場から400字程度で論じなさい」という設問（配点25点）については、以下のような採点基準をあらかじめ設定した。

### 1. 日本の移民政策の現状（8点）

- ・移民や外国人労働者の数など客観的な事実を摘示している。
- ・日本の移民政策の現状として、単純労働目的の移民が原則拒否されていること、その代わりとして「外国人技能実習生」制度が広範に利用されていることに言及している。

### 2. 支持する移民政策とその根拠（12点）

- ・自らが支持する移民政策の支持根拠を資料から抽出できている。

- ・今後の課題、およびそれに対する改善策が示されている。
- ・異なる立場からの批判に対して反論・応答が提示できている。

### 3. 全体の構成など（5点）

- ・全体の論旨の明確さ・一貫性
- ・字数の過不足（360字～440字）

この設問の採点は、まず採点者1名が答案すべて（18名分）に目を通して被験者の答案の傾向を大まかに把握したうえで上記の基準に従って採点を行い、その後、別の採点者が同様の流れでチェックをするという手順で進められた。

しかしながら、実際の採点作業では、あらかじめ設定した採点基準の単純な適用では処理しがたい答案をどう扱うべきかという課題に直面することもあった。例えば、移民問題に関して与えられた資料からは読み取れない知識を基にした記述をどう評価すべきかという点について、採点担当者の間でも協議が求められることとなった。加えて、答案およびアンケート結果からは、一部の記述式問題において設問文の条件設定に幾分曖昧さがあるがゆえに被験者が解答に困難を覚えたことも示唆されており、この点についても再度慎重な検討が必要となる。

こうした採点基準の公正さに関する課題とあわせて、採点に要する時間と労力についてもさらなる検討を必要とする。例えば、上記の設問の採点には、被験者の答案の傾向の把握した後でも、答案1つ当たりの採点に約4分、ダブルチェックの過程でも同等の時間を要した。この結果をふまえ、数百、数千単位の受験者を対象とした場合に、記述式問題の採点にどれほどの時間と労力を要するのかについてより詳細な分析を行うことは、試験の実行可能性の確保という観点からも重要な課題であると結論づけられる。

最後に、③知識と思考力・判断力・表現力の関係をどう捉えるかについても、改めて検討する必要がある。この点は、公共分科会のみならず、歴史・地理各分科会においても、委員の間で議論的となってきた点である。問題案の作成は、主に使用する用語という面で現行学習指導要領において規定されている事項を前提としつつも、すでに習得した知識を試験においてそのまま「再生」することで解答できる純粋な知識問題からの脱却を方針として進められてきた。しかし、アンケートならびにヒアリングでは、一方において従来の公民科試験以上に知識が要求されるという声、他方において純粋な知識問題をも盛り込むべきではないかという意見も見られた。この結果をふまえて、問題案の各設問で要求される「前提知識」がどの程度のものであるかについて再検討し、さらなる明確化を図っていく必要がある。

#### 4.3.5 プレ試行試験のアンケート結果

本項では公共プレ試行試験で被験者に実施したアンケート結果を記載する。

##### ■実施日

2018年2月2日（金）

##### ■被験者数

パターンA 18名

パターンB 17名

##### 1. 被験者情報に関する設問

##### 2. プレ試行試験の設問内容についてお聞きします

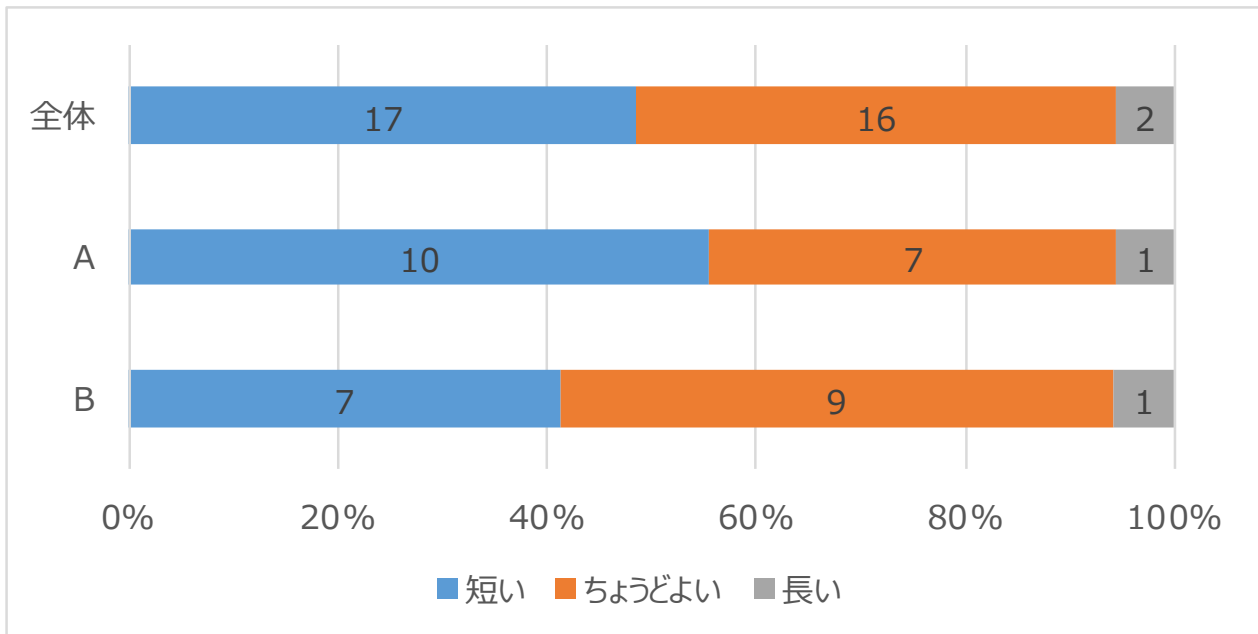


図 4-3 設問 2- (1) 与えられた試験時間



### 3. 試行試験の難易度についてお聞きます

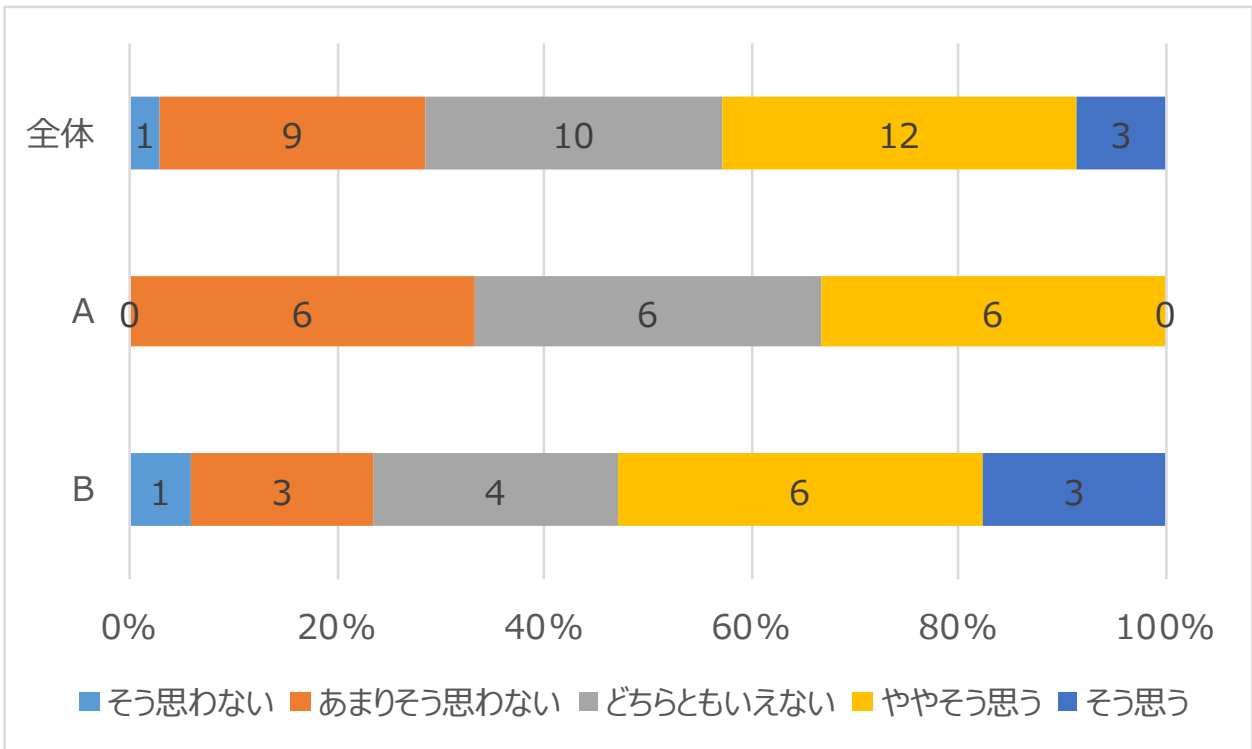


図 4-4 設問 3- (1)

試行試験の難易度 (高校課程の地歴・公民科目の学習で回答できる内容か)

### 4. 今回の試験とこれまでの試験との違いについてお聞きます

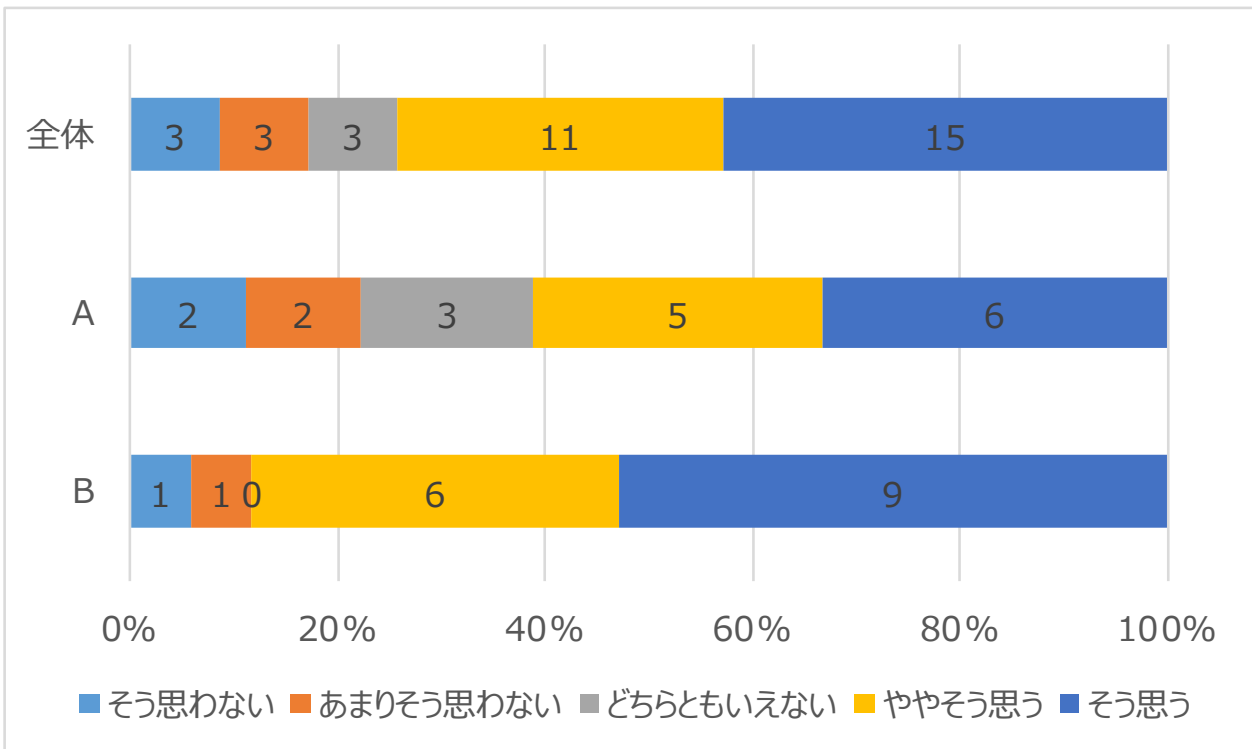


図 4-5 設問 4-(1)-1) 今回の試験とこれまでの試験との違い 図表や資料が多い

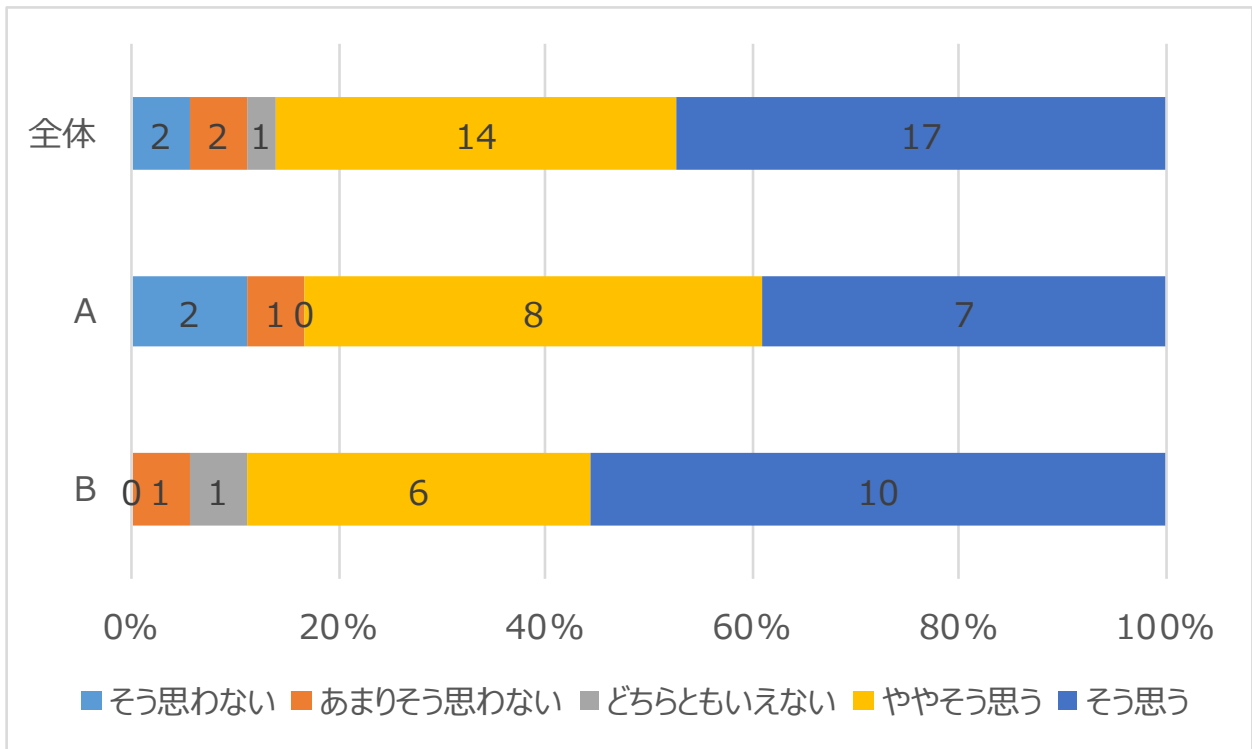


図 4-6 設問 4-(1)-2) 今回の試験とこれまでの試験との違い 記述が多い

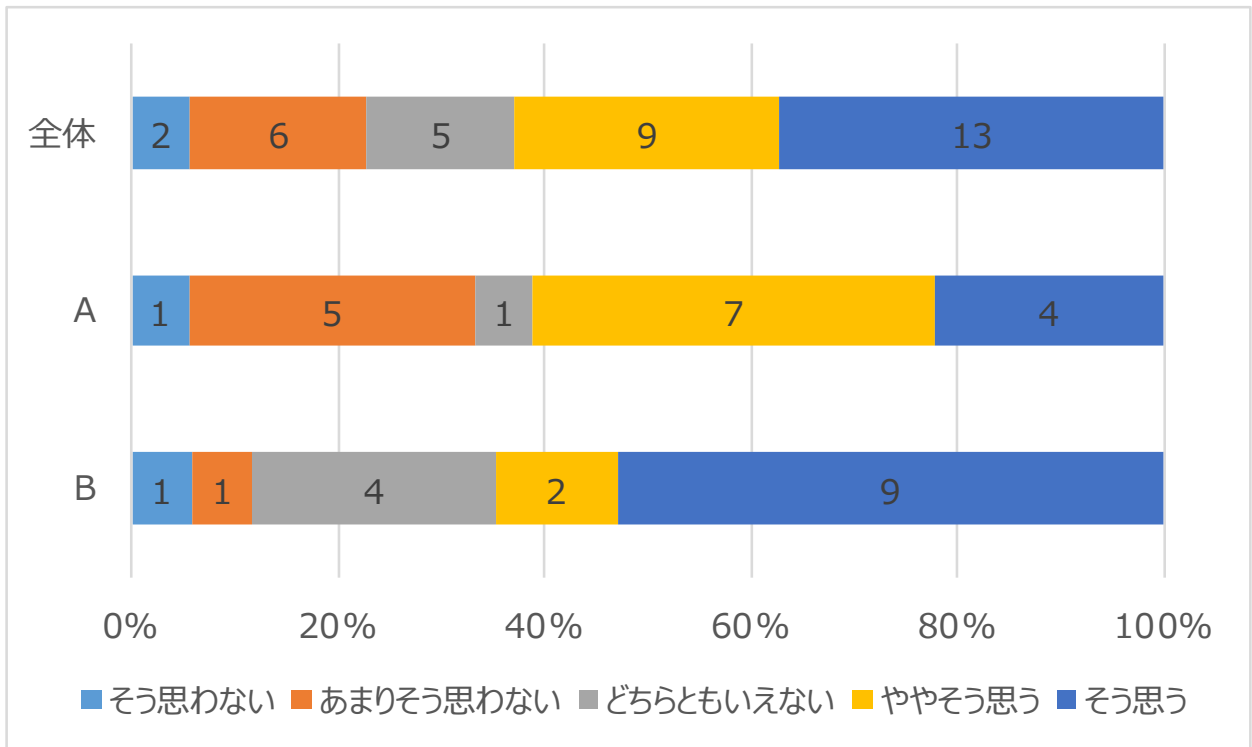


図 4-7 設問 4-(1)-3) 今回の試験とこれまでの試験との違い リード文が長い

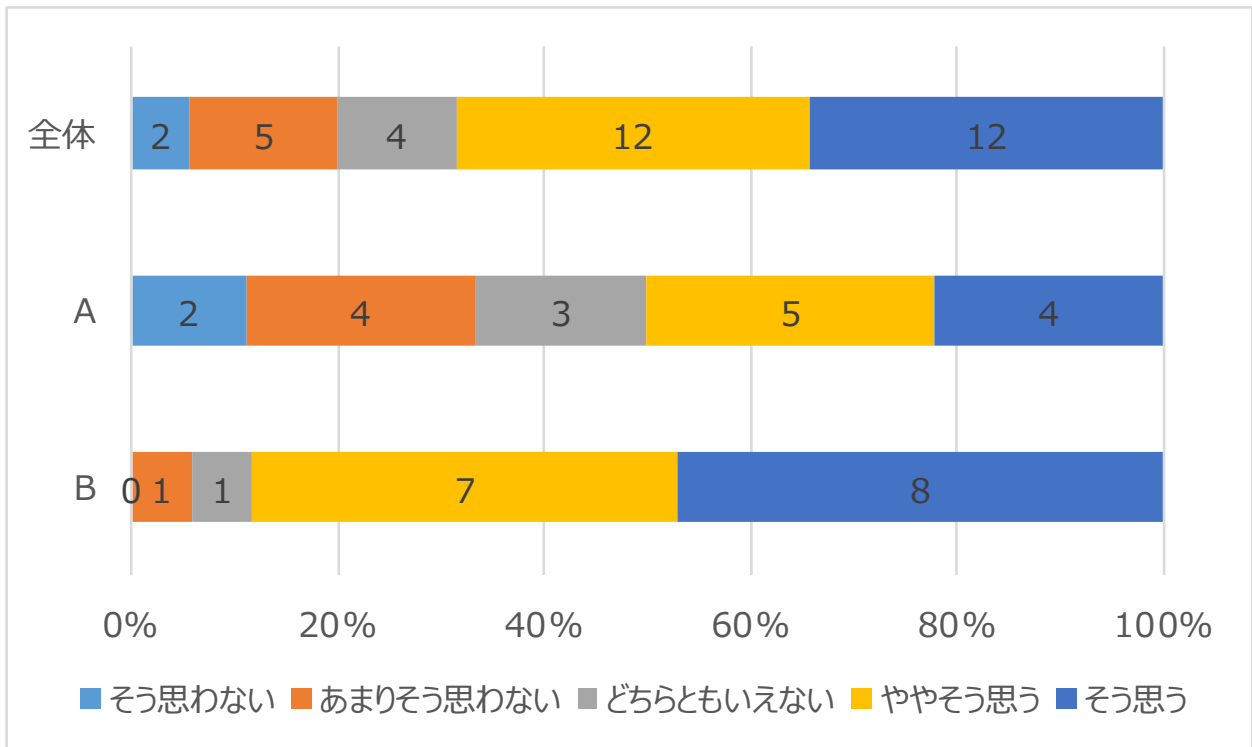


図 4-8 設問 4-(1)-4) 今回の試験とこれまでの試験との違い テーマが多様

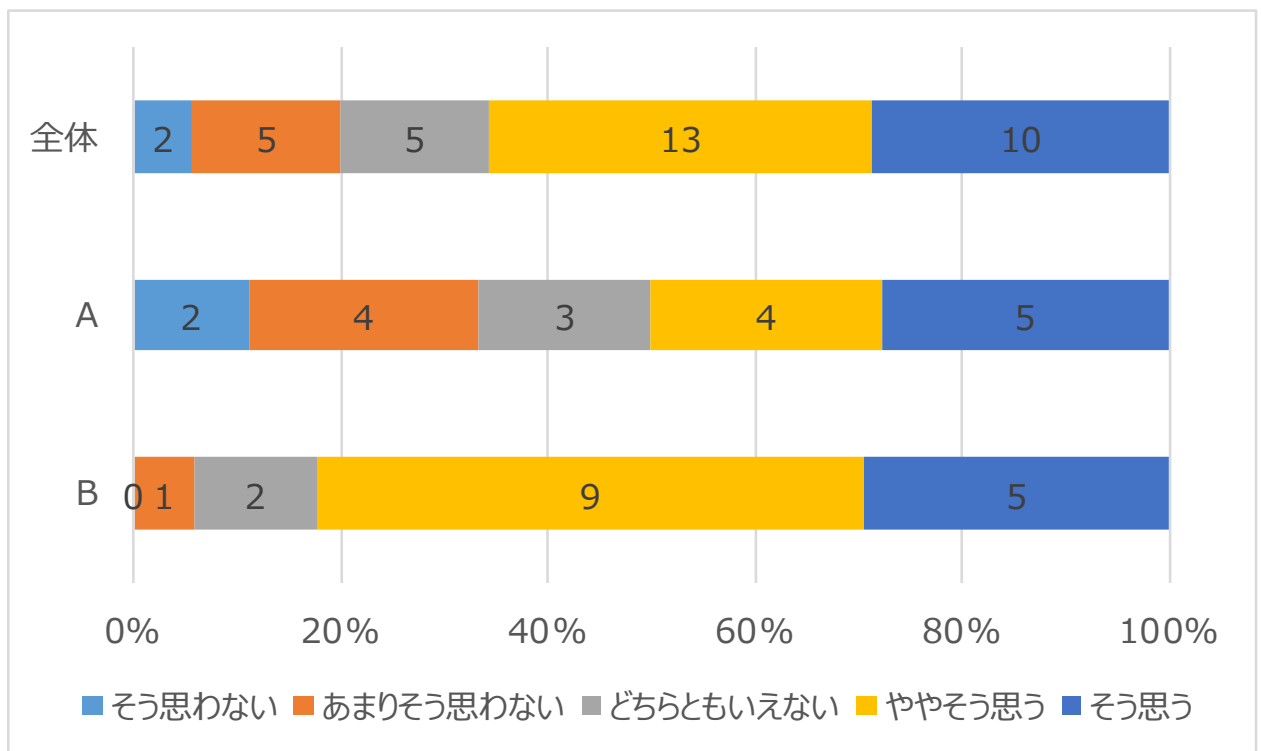


図 4-9 設問 4-(1)-5) 今回の試験とこれまでの試験との違い テーマが身近

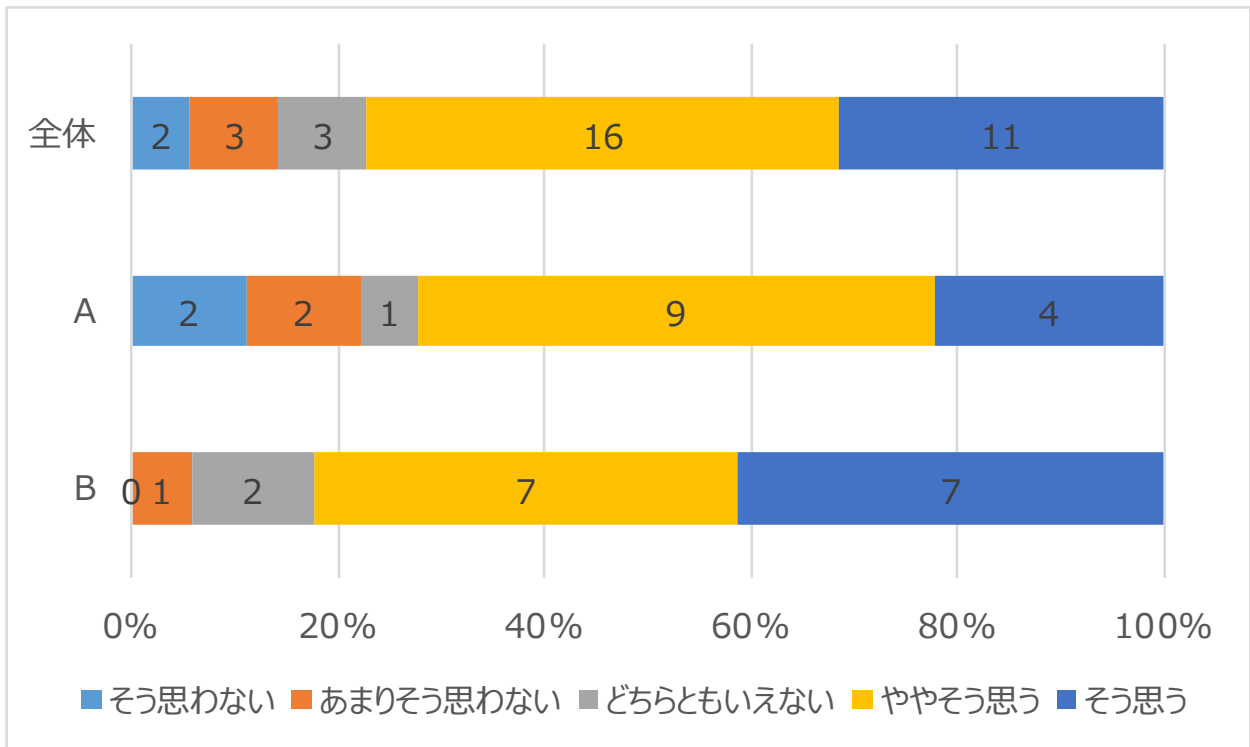


図 4-10 設問 4-(1)-6) 今回の試験とこれまでの試験との違い テーマが国際的

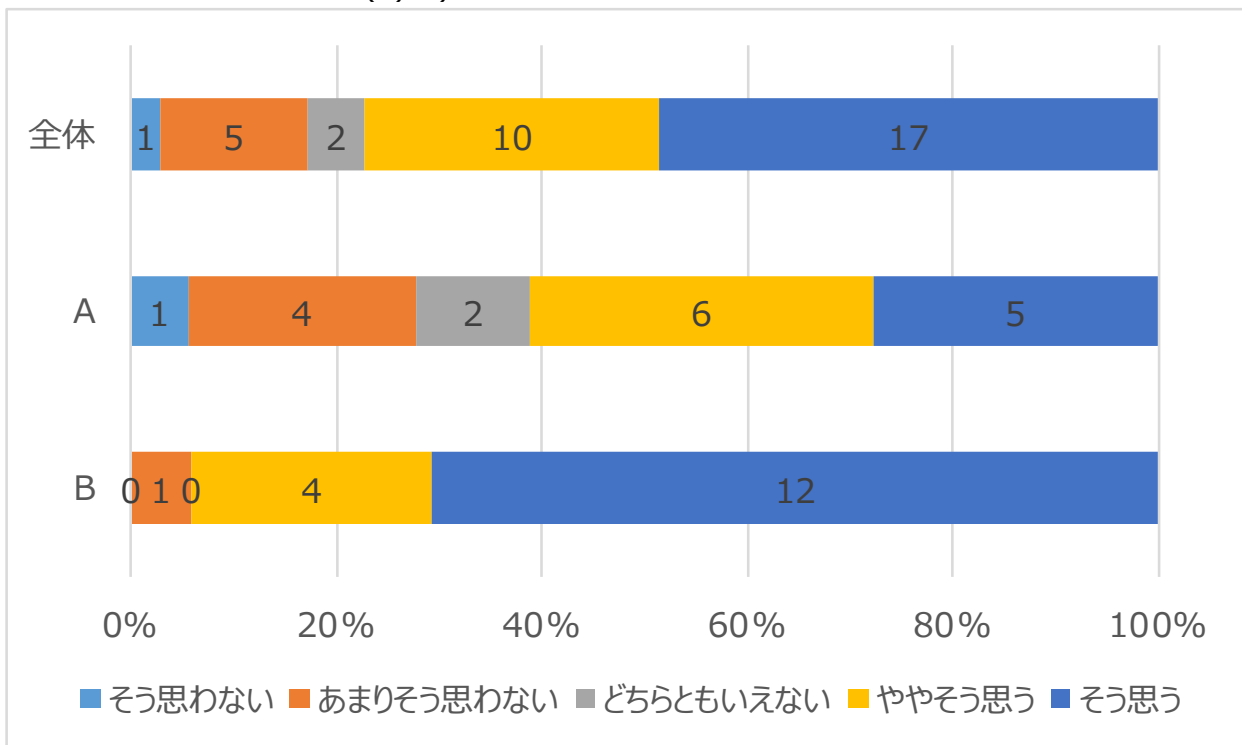


図 4-11 設問 4-(1)-7) 今回の試験とこれまでの試験との違い 幅広い知識が必要

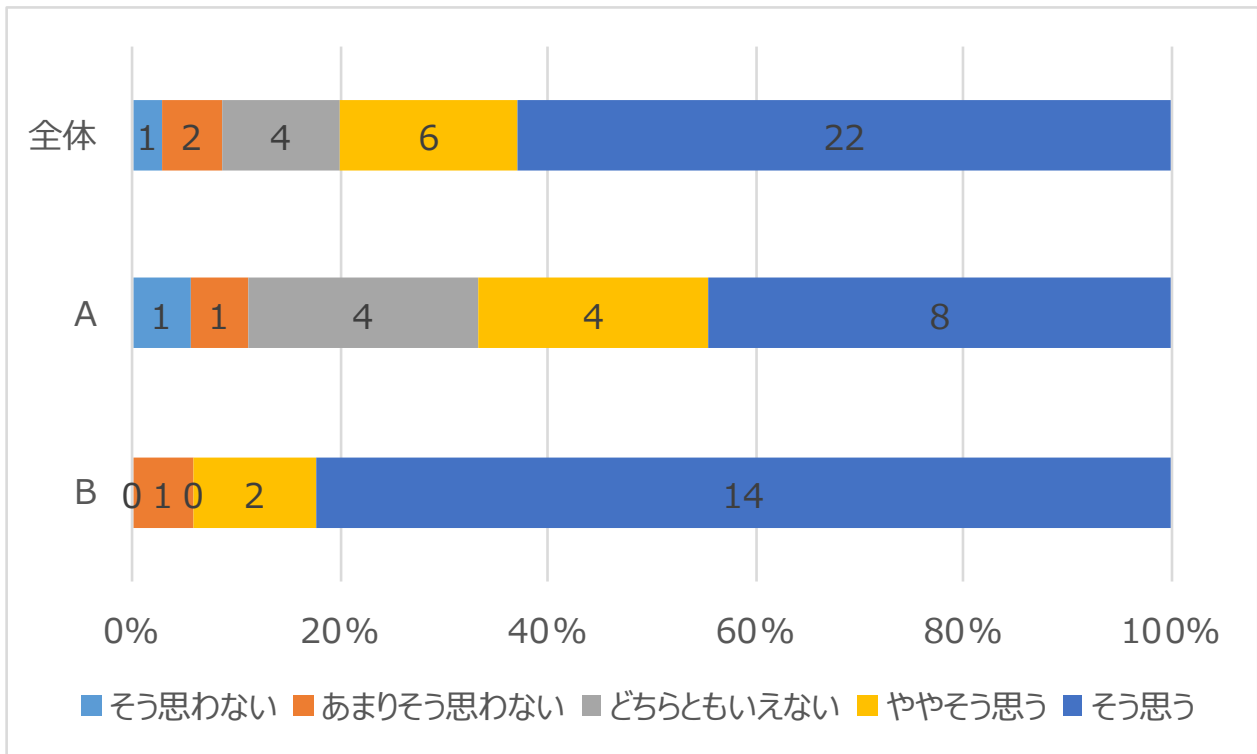


図 4-12 設問 4-(1)-8) 今回の試験とこれまでの試験との違い 図表や資料の読み込みが必要

### 5. あなたの高校生の時の学習環境についてお聞きます

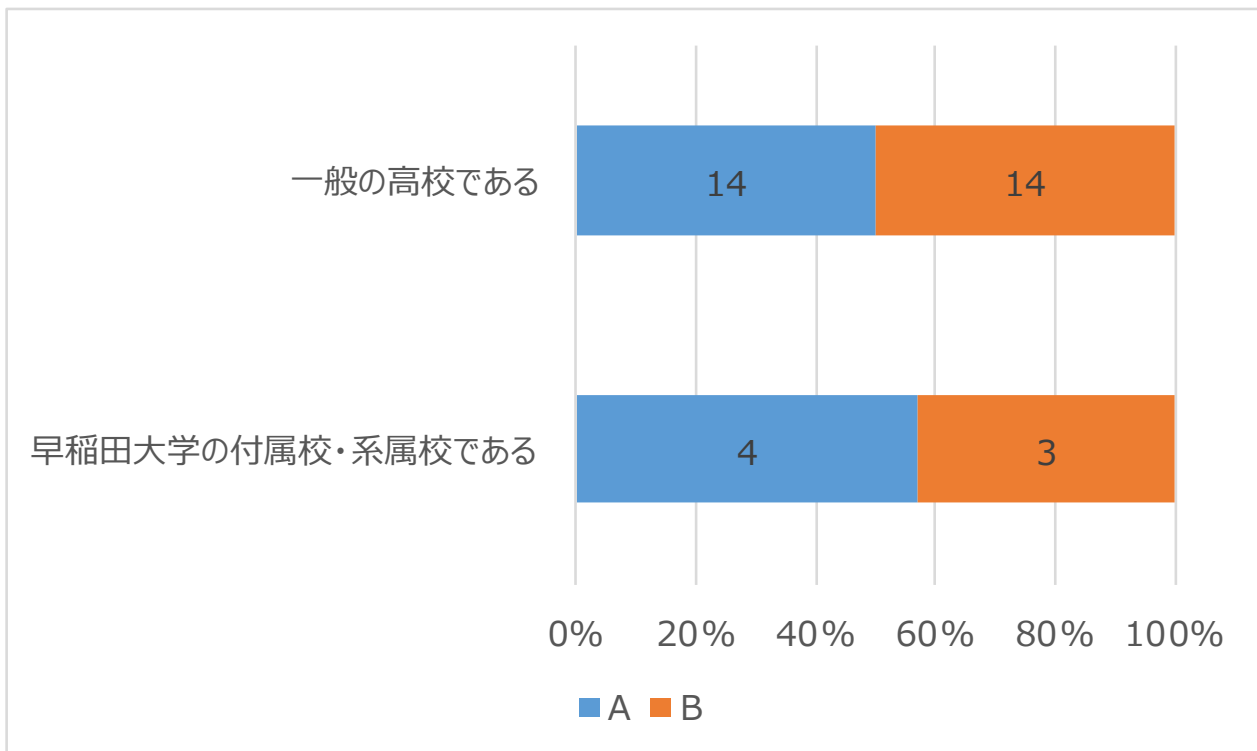


図 4-13 設問 5-(1) 高校生の時の学習環境

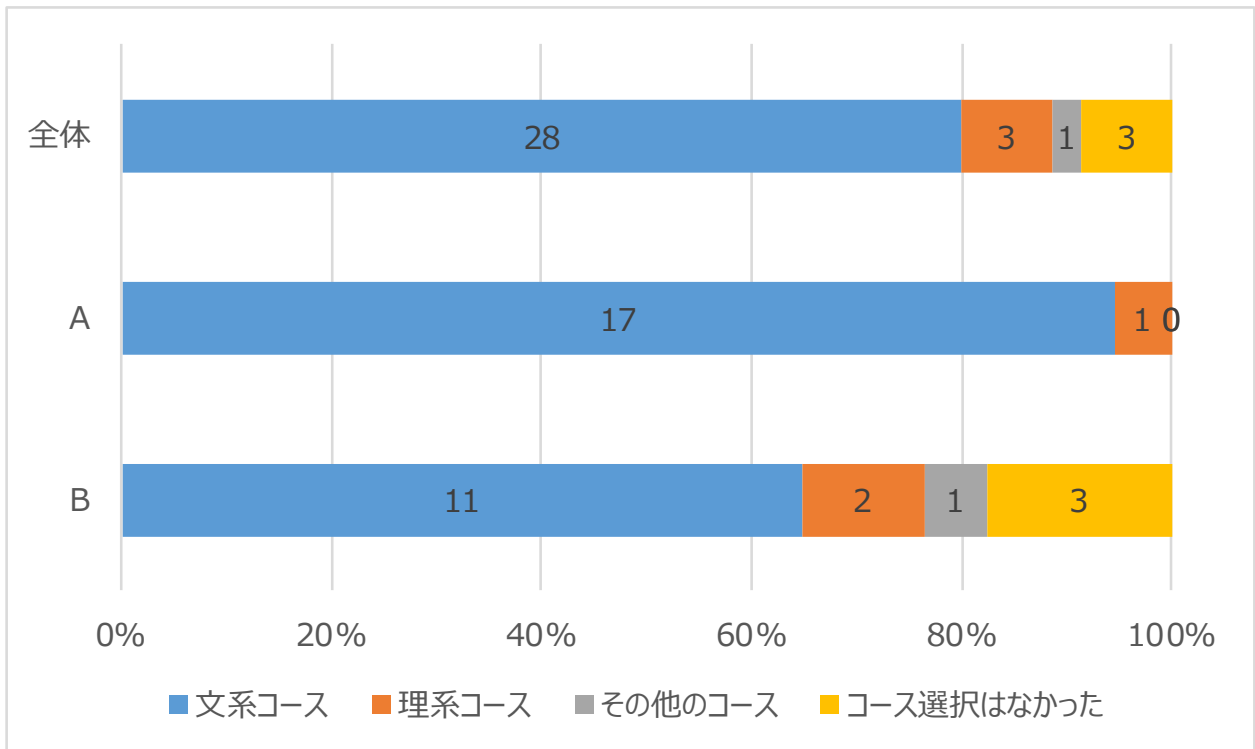


図 4-14 設問 5-(2) 高校生の時に在籍していたコース

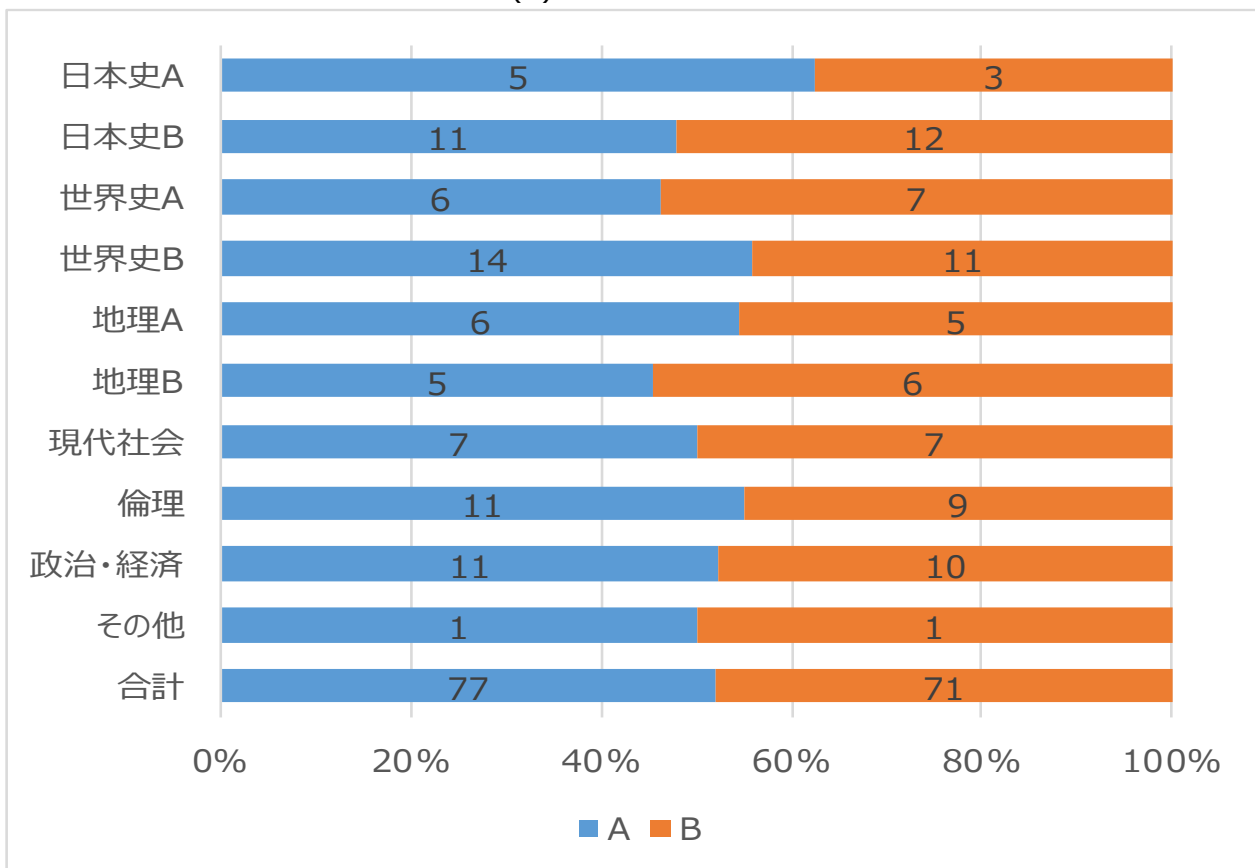


図 4-15 設問 5-(3) 高校生の時に履修していた科目

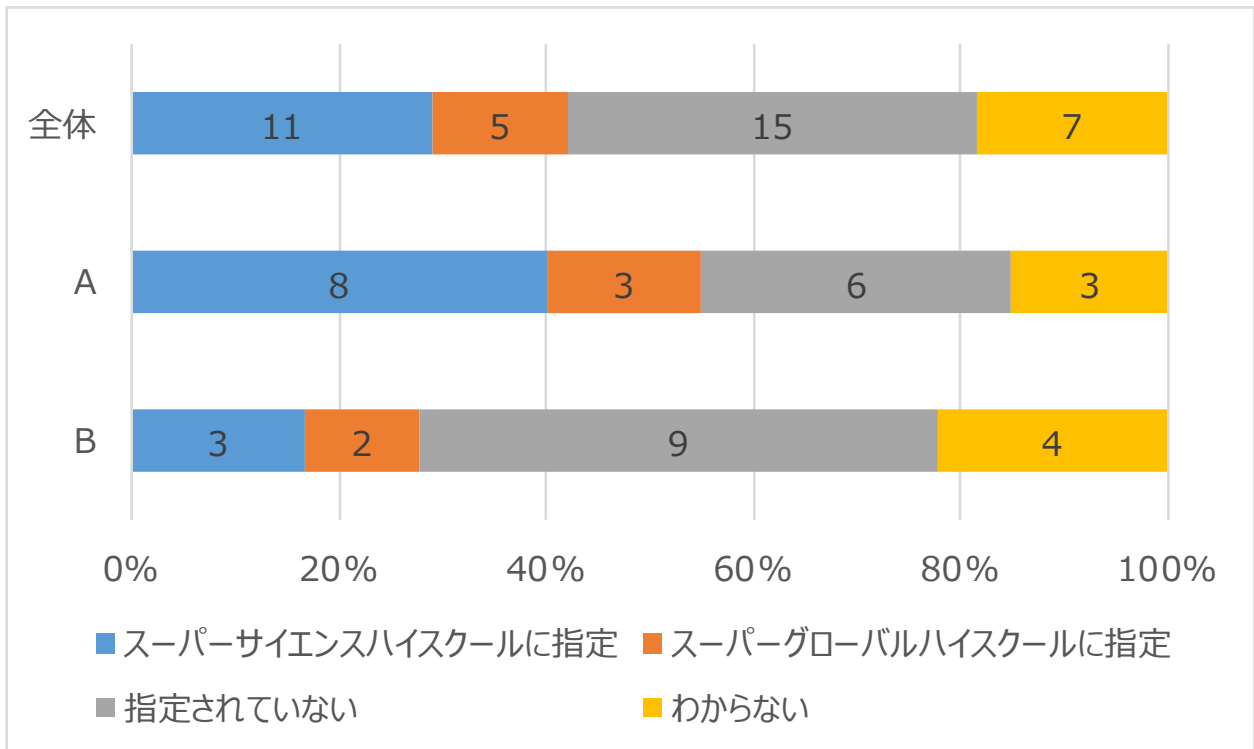


図 4-16 設問 5-(4) 卒業した高校

6. あなたの大学受験についてお聞きします

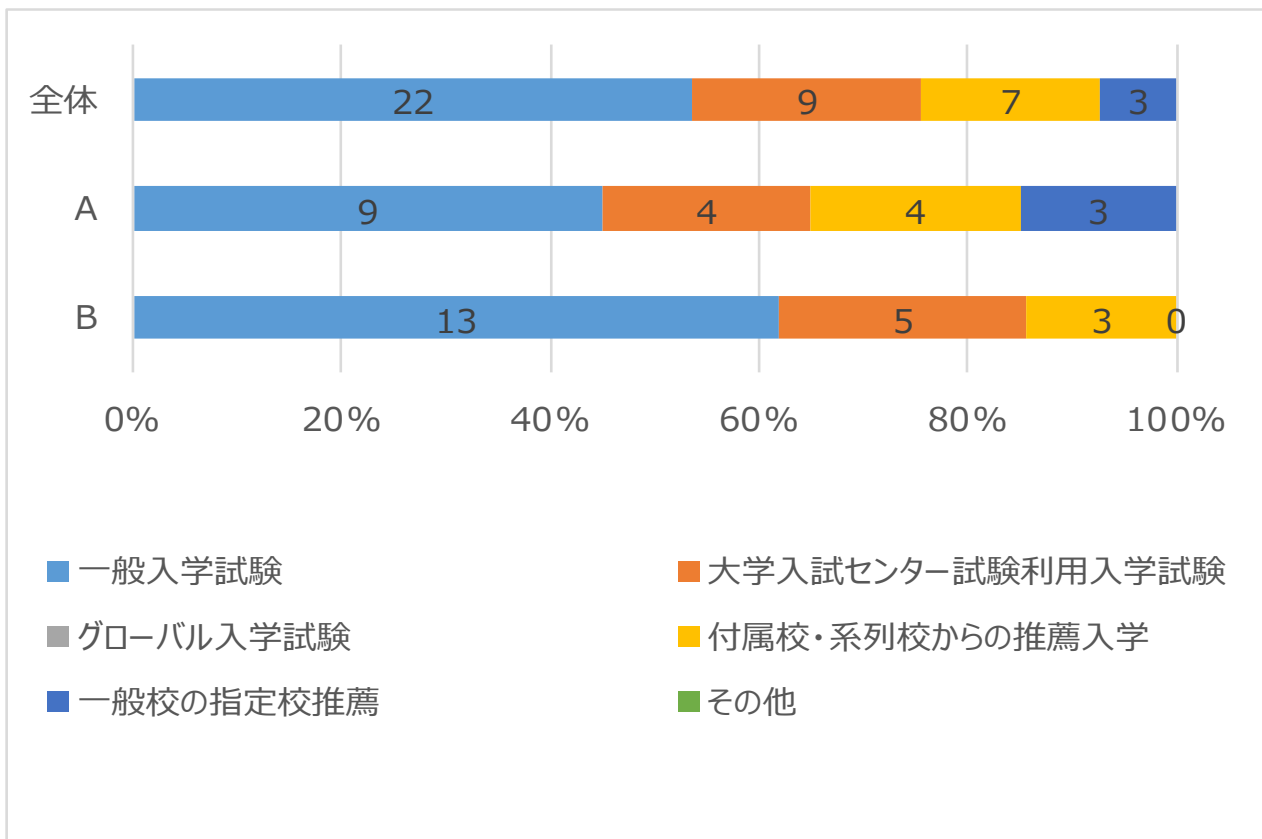


図 4-17 設問 6-(1) 早稲田大学政治経済学部受験時の入試方式

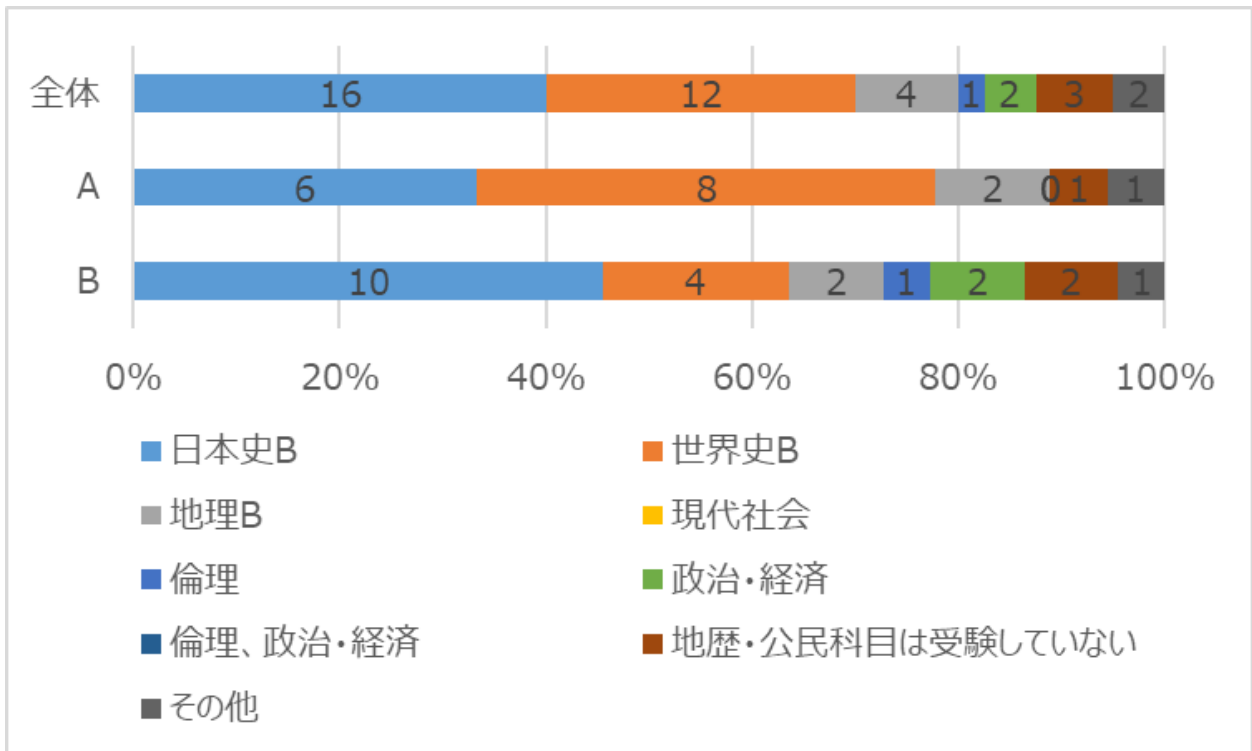


図 4-18 設問 6-(1) 早稲田大学政治経済学部受験時の地歴・公民の受験科目

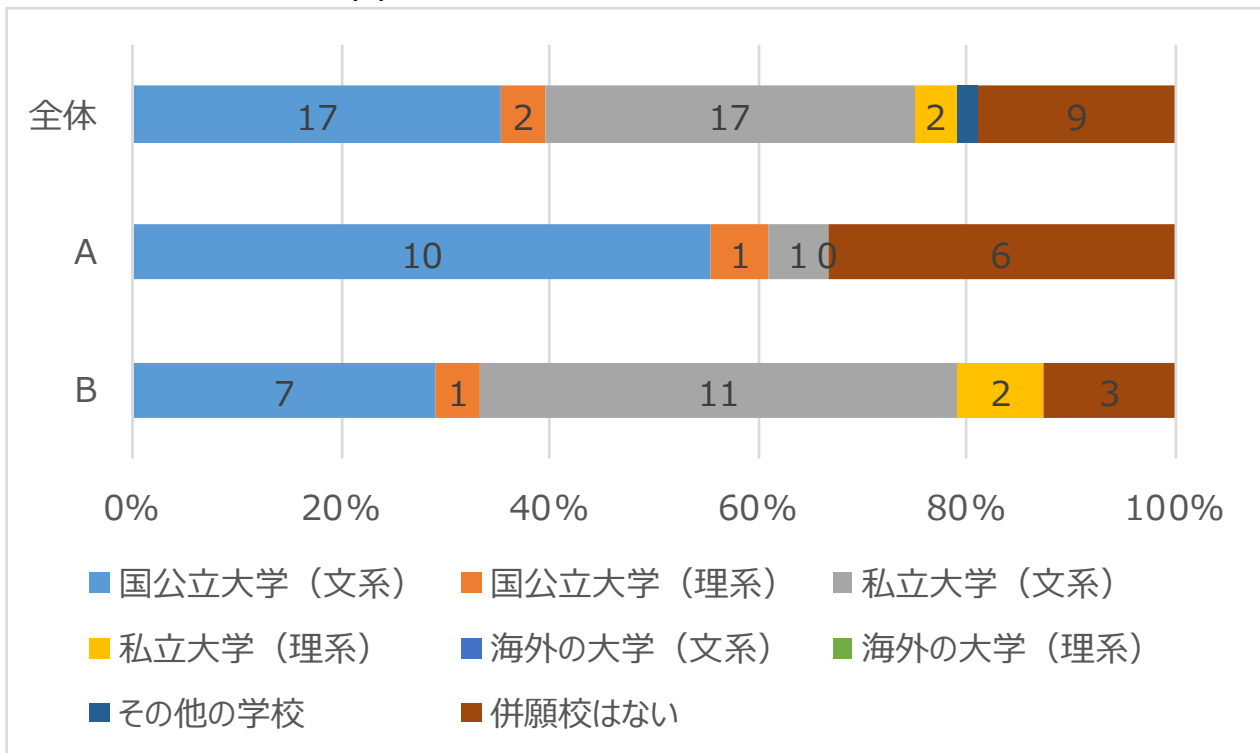


図 4-19 設問 6-(2) 早稲田大学以外の併願校



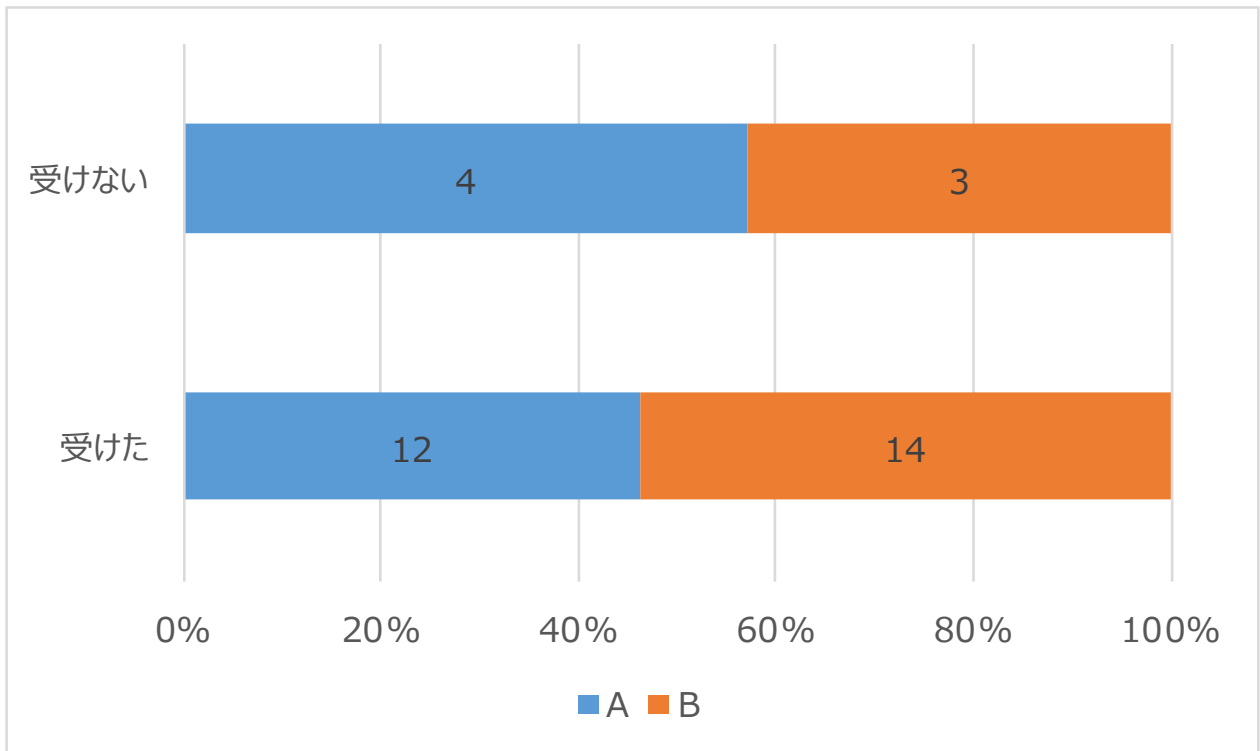


図 4-20 設問 6-(3) 他大学受験時の大学入試センター試験の受験有無

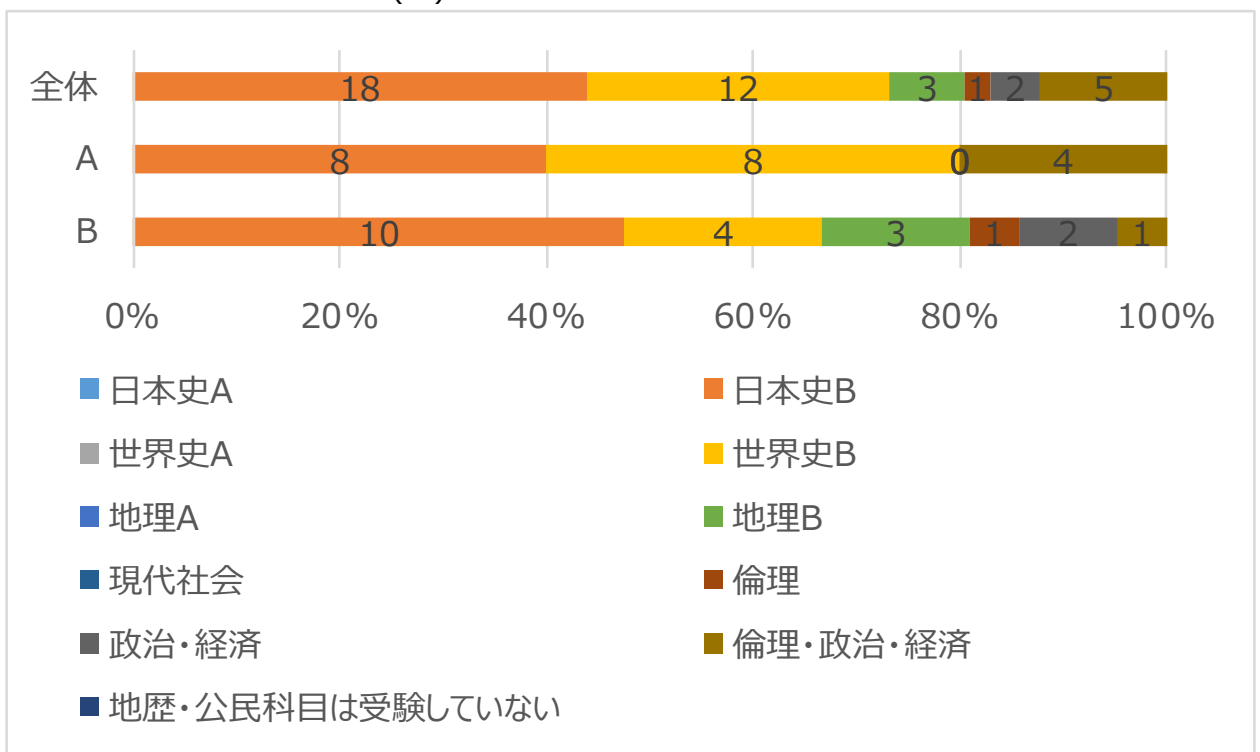


図 4-21 設問 6-(3) 他大学受験時の大学入試センター試験の受験科目

## 7. 社会動向に対する関心についてお聞きます

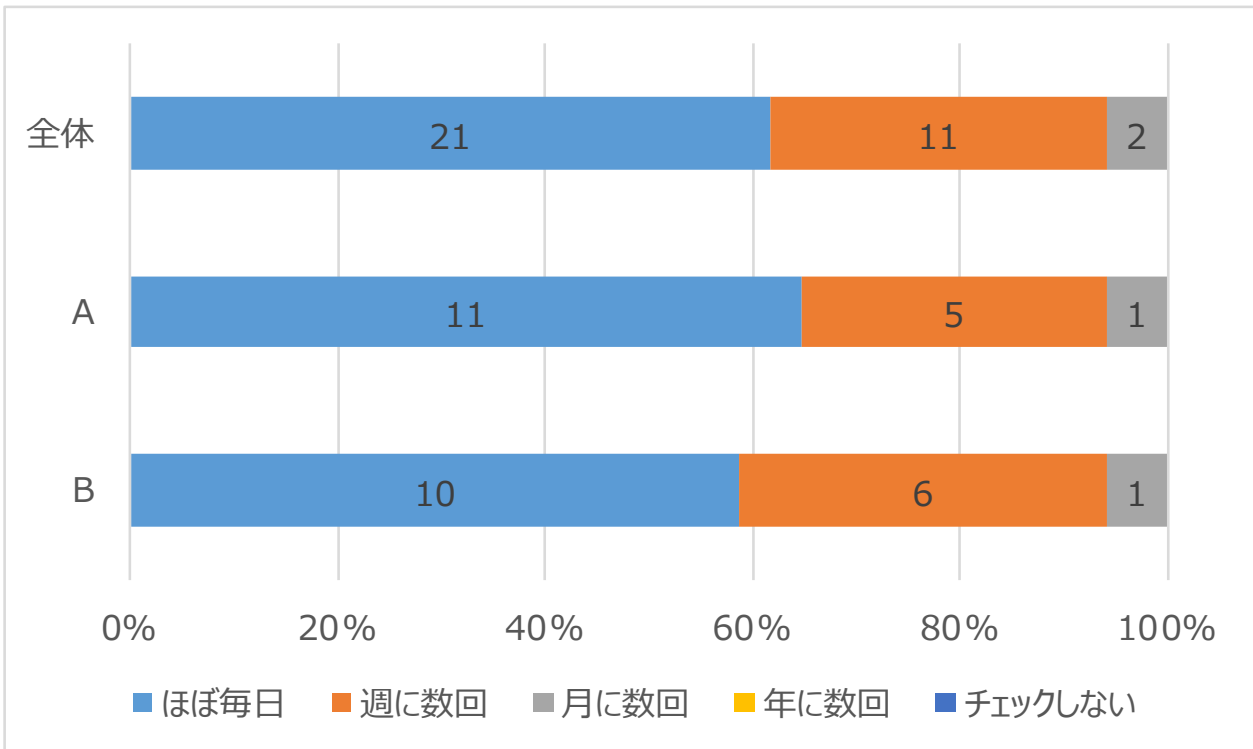


図 4-22 設問 7-(1) 政治経済や社会に関するニュースをチェックする頻度

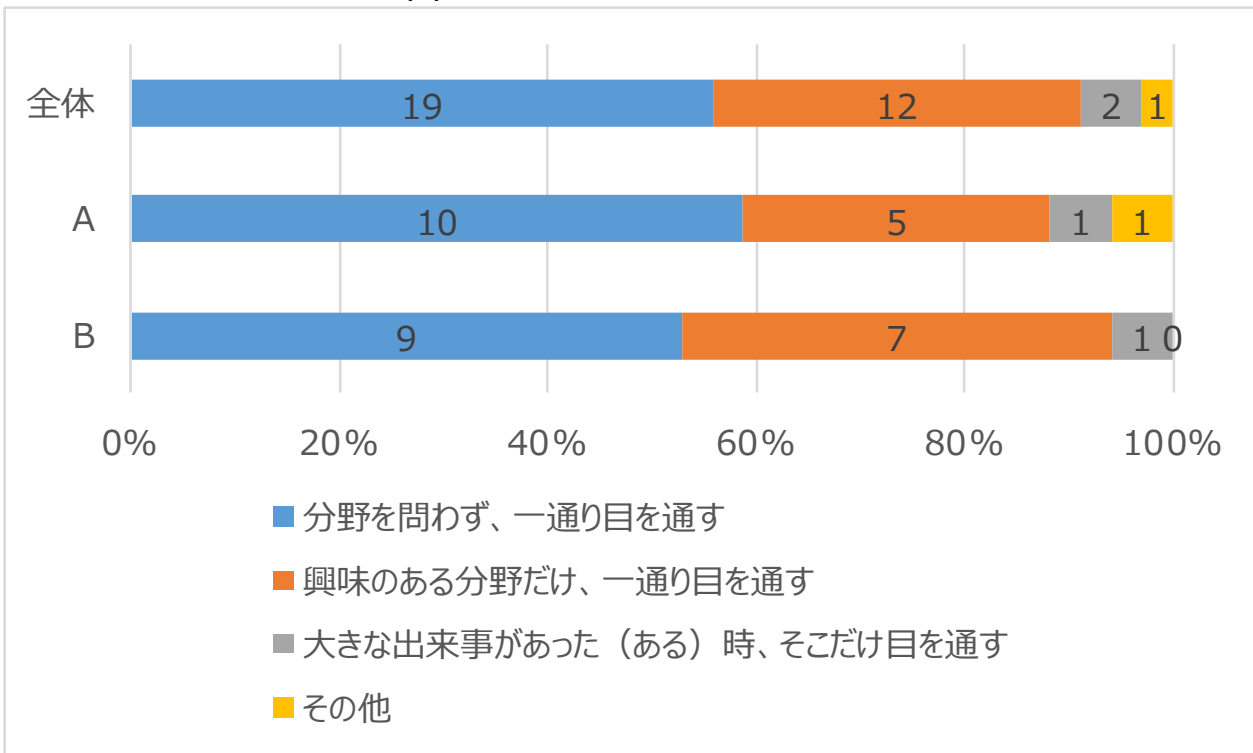


図 4-23 設問 7-(2) ニュースのチェックの仕方

4-(2)プレ試行試験を受験して、感じたことを自由にお書きください。

被験者 番号	設問 パターン	感想 (一文につき一行)
1	A	記述の問題がかなり多い印象だった。
1	A	90分での記述量だと、校正することなく直接解答用紙に解答するほうがベターではないかと感じた。
6	A	論述問題が多いことは思考力を計る上で最適であると思うが、全体的な問題量が時間に対して多すぎると感じた。
6	A	時間を増やすか、問題の量を減らすかの対策をとってほしい。
1	A	ただし、下書き用に問題冊子にも解答メモ欄(マス目)がある方が解答しやすいのではないかと感じた。
2	A	知識がなくても解ける問題(大問1、大問3問4の一部)は少し国語の問題のような感じがした。
9	A	社会科科目の試験とのことであったが、一部記述では、国語の説明文を読んで解答しているように感じられた(ex 大3問 問4(a))
4	A	基礎知識を前提として与えられた資料を読み解く形式の本試験は、単なる暗記ではなく理解を確認し、読解力と応用力を必要とするものであり、よい試験であるように感じた。
4	A	ただ、知識を問う問題や単なる読解の問題が散見され(第1問の問2、問3など)双方をうまく融合させた設問(第4問問5など)の比重を増やすことができればさらに良いと感じた。
5	A	リード文において、一文が長くてわかりにくいものがあった
11	A	センター試験のようなリード文の長さ、思考を問う記述が加わったような感じがした。
5	A	高校で形式的に倫理・政治経済を履修していたかも??
5	A	知らない知識が多く、むしろ中学校で学んだことのほうが多かった気がする
5	A	用語を用いての記述は、使用した用語に下線を引かせるべきではないか。
7	A	問題を作成された専門性が出ている試験だと感じた
8	A	選択式の問題でも考えて答える問題が多く、知識もさながら思考力を試していると感じた
9	A	高校で倫政を学んだことはないの、どこまでが高校レベルなのか不明。
10	A	考えることが大切だと感じた
10	A	記述の採点方式がどうなっているのか気になった。
11	A	内容は高校で学習した政治経済、現代社会の内容とリンクする感じがした。
11	A	記述400字は割と大変だと思う。
14	A	科目に特化した知識よりも、グラフや文章を読む力が必要だと感じました。
14	A	正誤を抜きにして解いていて楽しかったです。
14	A	資料読解は驚きましたがおもしろかったです。
16	A	ニュースを見ていれば解ける問題は少ないと感じた
16	A	しっかりした勉強をした上での知識が必要だと思った
16	A	もう少し具体的な国際問題を取り上げてほしいと思った(ex 北朝鮮))
16	A	図表や資料が多いのは構わないが、新聞記事など文字情報が多いものは少なくてもよいと思う。
16	A	税制についての問題を解いてみたいと思った。
17	A	知識だけではなくそれを使う技術が求められていると感じた。
17	A	一方で文章を読めばその場で解ける問題もあり、現代文に近いと感じた。
18	A	かなり現代抱えるホットな課題を重点的に扱っているので、受験生にそれらの問題を考えさせるきっかけとなる点でよいと思います。
18	A	ただ、内容的には学んでいなくても、その場で資料を読めば答えられるものが多いという点と、立場を選ばせているけれど、解答を誘導しているものがあつたので公平な視点に立てるような資料を並べる方が良いのかなと思いました
19	A	暗記の重要性が薄れすぎな気がした。
20	A	これまでの大学入試よりも、大学に入った後必要となる能力(表現力等)が問われた試験であると感じた。
20	A	また問われた知識はどちらかという「教養的」であり高校生に求めるものではない気がした
20	A	記述問題の負荷が大きい
21	A	特に4つの資料を読み込ませる形の記述資料を適度に読みとばすことを強いるため、技術のない高校生には時間内解答が困難になる。

- 1 B 全体を通してメッセージ性が感じられる問題作成で興味深かった
- 2 B 非常に思考力を要する内容で、頭を使いました
- 4 B 考察を要する問題が多く、難しいと思ったが、政治学、法学、経済学などについては従来の高校ではそれらに対応する学習をほとんどしなかったため、今回のような問題は高校と大学をつなぐものとして良いと感じた
- 7 B 記述量が多く、大変だったものの、とても面白かった。
- 8 B 正直かなり難しく時間が足りなかった
- 8 B 現在のセンター試験に比べ平均点は非常に下がると思う。
- 8 B 高校の学びでは足りない上に学校側の対策が大変になり過ぎてしまうのではないかと
- 8 B 現在の教員がこれを教えられるほど質が高いとは思えない。
- 9 B 従来の記憶力が求められる試験とは違うという事を感じた。
- 9 B 状況把握等、多様な力が求められると考える。
- 9 B 採点側がより抽象的なテーマ・模範解答が増える中、定義づけを行った上で正確に採点が出るのか疑問に思った。
- 11 B 個人的には全体を通して大学で学んだことを問われている試験のように感じられる難しさでした。
- 12 B センター試験の政経に東大や一橋の入試問題が混入したような感覚だった。
- 12 B グラフの作成や最後の小論文のような問題は面白かった。
- 13 B 思考力、表現力が問われるため、ぼーっと社会科の授業を受けているだけでは高得点は狙えないと思った（ある程度、得点できそうではある）
- 13 B 今回の試験時間でも十分解答は可能だが、もう少し試験時間が長い方が受験者の思考や表現力が解答に反映されるのではと思った
- 13 B 90分では解答を作成する瞬発力が得点に与える影響が大きと思う。
- 14 B 最近の話題やデータの活用など実践力が強く意識されているように思う。
- 15 B 試験時間の割に記述問題が多すぎと感じた。
- 15 B 20字や30字程度の記述や抜き出し問題ならともかく、グラフや表、資料を読み、尚且つ100～200字の記述を5題以上解答するのは高校生にはキツ過ぎると思う。
- 16 B 思っていたより難しかったです。
- 16 B この科目を高校生が受験対策するには、幅広い知識が必要なので中々大変だと思います。
- 16 B 知識を使って現状を分析するという問題形式は解いていて、楽しかったです。
- 17 B 単純な知識の問題ではないので、受験勉強が非常に難しいと思った。
- 17 B 純粋な知的好奇心が必要とされているように感じた
- 19 B 早大の問題としては適度な難易度だと思うが、この問題をモデルケースとするには難しすぎる
- 19 B 頭をひねらせる計算問題やゲーム理論など試みはよい。
- 19 B いわゆる「重箱の隅をつつくような奇問」というよりも与えられたものを使うという傾向がとても好印象
- 19 B 記述により思考力を測るという目的は果たされていると思う。
- 19 B 手書きではやや辛いと思う分量であった
- 19 B 大学レベルの話題には丁寧な誘導があったので、このアンケートの3は5にした。
- 20 B 時事問題が多かったように思います。
- 20 B 最近の話題
- 21 B 近年話題になった時事的なネタがかなり多く、面白い。
- 21 B 問題文や記述が長い、多い

#### 4.4 コンソーシアム会議

代表大学（早稲田大学）と連携大学（東京大学、一橋大学、同志社大学、関西学院大学）で構成されるコンソーシアム会議を2回（2017年9月2日、2018年3月12日）開催し、各科目の定義表や試行試験の実施方針、試行問題案、新たな入試制度について分科会の枠を超えて各大学の視点から意見交換を行った。

## 5. 本調査研究の内容、過程、成果の発信

本章では、本事業内容の成果発信に関する取組について述べる。

### 5.1 全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会大学入学者選抜改革エキスポ

(1) 開催日時 2017年5月25日(木)

(2) 開催場所 富山国際会議場 大手町フォーラム

(3) 出席者(敬称略)

・講演

司会：筑波大学教授 島田康行

報告者：

北海道大学教授 鈴木誠

東北大学教授 倉元直樹

早稲田大学教務担当理事(政治経済学術院教授) 佐藤正志

早稲田大学 教育・総合科学学術院教授 久保純子

早稲田大学 現代政治経済研究所 次席研究員 井之口智亮

・ポスター発表

早稲田大学

入試担当理事(商学学術院教授) 恩藏直人

大学総合研究センター 山田晃久

教務部教務課 高橋一城

(4) 概要

大学入学者選抜改革推進委託事業において、受託機関と連携大学等が共同して進める、人文社会分野における「思考力等」や「主体性等」を評価する大学入学者選抜の改革を効果的・効率的に推進するために取り組む研究成果の報告を行った。北海道大学(代表校)・東北大学(連携機関)からは、国語試験が測定する資質・能力の分析・評価手法に関する研究について、早稲田大学(代表校)からは、事業の説明ならびに地理、歴史、公民分野における思考力・判断力・表現力等を問う新たな入試問題の調査研究成果を報告した。また、ポスター発表を実施し、事業の進捗や各分科会の検討状況の報告を行った。

### 5.2 私大連 高大接続改革関係協議会

(1) 開催日時 2017年10月14日(土) 13:00-17:00

(2) 開催場所 ベルサール八重洲 2階 会議室

(3) 出席者(敬称略)

教育研究委員会担当理事、立命館大学総長・学長

吉田美喜夫

教育研究委員会委員長、東海大学観光学部教授

松本 亮三

大学入試センター

大塚 雄作

早稲田大学

佐藤 正志、久保 純子、都丸潤子、齋藤純一

関西学院大学

尾木 義久

#### (4) 概要

本協議会は一般社団法人日本私立大学連盟主催であり、「私立大学の入試改革を考える」をテーマに関係者が出席した。本協議会では委託事業の代表校として講演ならびにディスカッションを実施し、事業の進捗や各分科会の検討状況の報告を行った。ディスカッションでは、作問担当者が作問に集中できる環境を構築する必要性や受験者の公平性に関する意見等が出された。

### 5.3 大学入試センターとの意見交換

(1) 開催日時 2017年12月13日(水) 9:00~11:00

(2) 開催場所 早稲田大学 7号館 204教室

(3) 出席者(敬称略)

・文部科学省

1名出席

・大学入試センター

5名出席

・早稲田大学

佐藤正志、田中愛治、都丸潤子、鎮目雅人、岡田雅志、齋藤純一、井之口智亮、  
久保純子、須賀晃一、吉野孝、西郷浩

・事務局

早稲田大学大学総合研究センター(山田晃久)

早稲田大学教務部教務課(高橋一城、久保徹)

早稲田大学政治経済事務所(松本百合奈)

早稲田大学アカデミックソリューション(一宮航、西山裕子)

(4) 配布資料

① 大学入試センター試行調査(プレテスト)資料一式

② 本委託事業における思考力・判断力・表現力の定義表(歴史、地理、公共)

(5) 議題

① 「思考力・判断力・表現力」の定義について

② 質疑応答・意見交換

(6) 概要

大学入試センターが検討を進めている「大学入学共通テスト」における作問方針や「思考力・判断力・表現力」の評価基準等について本事業メンバーと意見交換を行った。意見交換では、思考力・判

断力・表現力を明確に分けるのは難しく探求の過程で総合的に問われていることや、出題の持続可能性に関する課題に関する意見等が出された。

#### 5.4 第3回ワークショップ

(1) 開催日時 2018年3月12日(月) 16:00~18:30

(2) 開催場所 早稲田大学 大隈記念講堂小講堂

(3) 出席者(敬称略)

・文部科学省

山田泰造、吉岡路

・東京大学

河本裕文、山田雅之

・一橋大学

石居人也

・同志社大学

多久和英樹、青木真美、山田史郎、津村宏臣、友淵雅行、井上圭太

・関西学院大学

北原和明、小菅正伸、尾木義久、尾木義久、細見和志

・大阪大学

桃木至朗

・立命館大学

吉越昭久

・独協大学

秋本弘章

・麻布高校

堀川禎一

・早稲田大学高等学院

本杉秀穂

・本庄高等学院

吉田茂

・早稲田大学

佐藤正志、恩藏直人、沖清豪、須賀晃一、西郷浩、吉野孝、久保純子、池俊介、

都丸潤子、鎮目雅人、加藤恵美、岡田雅志、齋藤純一、井之口智亮、川岸令和、

李成市、浅野豊美、田中孝彦、柳澤明

・事務局

早稲田大学大学総合研究センター(山田晃久)

早稲田大学教務部(横山勝常)

早稲田大学教務部教務課(高橋一城、久保徹)

早稲田大学政治経済事務所（鈴木義秀、松本百合奈）

早稲田大学アカデミックソリューション（一宮航、桑原佐知子、松田七美、田部井利佳、西山裕子）

#### （４）配布資料

- ① 地理分科会報告資料
- ② 歴史分科会報告資料
- ③ 公共分科会報告資料
- ④ 情報発信サイトのご案内
- ⑤ アンケート

#### （５）プログラム内容

##### ① 文部科学省ご挨拶

文部科学省高等教育局大学振興課 大学入試室長 山田 泰造 様

##### ② 進捗報告

事業実施責任者 佐藤 正志 早稲田大学理事（教務担当）・政治経済学術院 教授

##### ③ 各分科会からの報告

地理分科会

リーダー 久保 純子 早稲田大学教育・総合科学学術院 教授

歴史分科会

リーダー 都丸 潤子 早稲田大学政治経済学術院 教授

委員 桃木 至朗 大阪大学大学院文学研究科 教授

公共分科会

リーダー 齋藤 純一 早稲田大学政治経済学術院 教授

委員 青木 真美 同志社大学商学部 教授

##### ④ 休憩（質問票回収）

##### ⑤ 質疑応答

##### ⑥ 情報発信サイトの開設について

##### ⑦ 閉会挨拶

#### （６）概要

高校・大学教員等を対象にした公開ワークショップを開催し、約 200 名の参加者に対し、各分科会の検討状況の報告や会場からの質疑応答を実施した。

#### （７）会場との質疑応答の内容

質問者：予備校関係者

著作権の関係で入試問題にそっくり載らない。

その関係で問題集を独自に買うしかなかった地域の方が不利になる可能性。

資料は著作権フリーのものを使用してもらえると業界は助かる。

著作権や引用するもののガイドラインは議論されているのか。

回答：



歴史分科会は様々なデータの使用を検討している。なるべく公開されている情報や無料で入手可能な材料を使用しているものやフリーのものを使用している。しかし、カバーしきれない場合も存在する。使用する著作物ごとに許可いただいている。

質問者：高校教員

定義表が作成された経緯を聞きたい。問題作成の際の参考にしたい。

思考力判断力が普遍的な力であり、それが地理歴史の分野にどのように活用されると考えられているのか。それとも歴史などの分野特有の思考力と考えられているのか。そこが明確にならないとその分野を学習する意味が主張できない。特有でないといほかの科目で代替可能になる。その辺の議論や定義がどのようなものか聞きたい。

回答 1：

こうした定義を作ろうという考え方は社会科だけではなく情報や数理などの他の分野との関わりということで作ってきたもの。共通テスト用の場面でも同じようなことをやっており、それとも照らし合わせながら妥当性の検証が必要。

回答 2：

共通のたたき台をもとにそれぞれの科目ごとに検討した。地理の場合は資料を読み取り内容を理解、あるいは事象間の相互作用を理解し、因果関係を考える等の定義を作った。自分たちが注目したのは地理的見方・考え方。どこにあり、どのくらいの広がりを持つのかという問題意識、地図を使った表現等を議論してきたので特有なものもあると考えている。

回答 3：

分科会独自で作った思考力判断力表現力もある。

回答 4：

常識的な判断力も重視しているがそのうえでさらに時系列に沿って因果関係を理解する。また、資料に基づいてストーリーを再構築できること、複数の資料の重みをはかれるといったこと、証拠をもとに仮説を自分たちでたてていく力など色々なレベルで歴史を見ること等を重視したい。

回答 5：

両方の要素がなくてはいけない。資料の読み取りは国語の問題では、という指摘があるが、材料が歴史なのでそうではない。国際的な学力テストで日本の子供は成績が優秀だが一番順位が低いのは読解力である。指導要領でもそこは重視していきたい。読解力にかかわるものは重視していかなければならない。

回答 6：

思考力：所有と経営の分離の中で数字を書き込ませる。

判断力：政治と経済の移民の問題で A, B 異なった立場とった場合はどのような理由、根拠エビデンスがそれぞれの立場をサポートする材料になるのか。ダミーのキーワードを入れて排除する力をみる。

表現力：文章、作図で問う。文章を書かせる場合は、どの資料からどのポイントを選んで論拠にしたのかと問うことが出来るので単純な国語の問題ではなくなる。

このように、3 要素がバラバラにあるわけではないと思う。

質問者：大学教授

理数で同じ事業を担当している。  
新しい問題の作成に頭を悩ませている。  
何をもって新しい問題とするのか。

回答 1：

判断力を問う事は難しい。  
複数の観点をサポートする論拠を見つけてもらう。  
3要素を複合化して問ってもらえば良いとのこと。

回答 2：

新しさという部分は意識していない。  
合教科や公共が新しさになっている。

質問者：高校教員

私学が受験科目で地理や公共を設置するのか。  
大学が受験科目として設置しないと発展的に新カリキュラムに設置できない。  
知識は必要とのことだが 2 単位の中で高校生徒が知識を得ることは難しい。  
大学側が 3 教科を受験科目として設定しないと発展しない。知識の裏付けは難しい。  
大学としての考え方を聞きたい。  
本校では 4 月からの新カリキュラムを検討するが、学校の時間割に 3 教科を入れるのは困難。受験用のカリキュラムになってしまうため。  
委託事業の中で何らかのアクションを起こしてくれない限り、地理、公共が消えてしまうのでは。

回答 1：

大変難しい、重要な問題。大学としてどう考えるかまでは至っていないが、議論はしている。

回答 2：

これまでの地理 A、地理 B とは大きく異なると理解している。すべての高校生が地理総合、地理探究を学ぶことになる。大学でも地理を学んでくれることを望んでいる。

回答 3：

大学が受験科目を設置するのは少し先になるのでは。  
高校が教育する時期と大学が入試科目を決める時期とズレがあるのではと思う。  
今後詰めていかなくてはいけない問題。

回答 4：

歴史では、探究科目とのつながりを考えていきたい。  
試行試験を考えている段階では、世界史 B、日本史 B と歴史総合に関わるような基本的知識を使う問題を考えている。

回答 5：

高校の先生からは早く大学が決めてくれないと困るという意見を聞く。  
合教科の試験について、一部ではささやかれている。慎重な検討が必要。引き続き検討しい。

回答 6 :

政治・経済は、政治社会の制度や公共政策の理解、妥当性。

倫理は、個人や集団から見た時のケア、別の宗教を信じている人との関係

新しい科目の公共は、基礎科目ではなくて両方に跨るような学習をすること、問を設定することがベスト。

入試科目として公共を設置することは約束できない。

回答 7 :

今の段階では決まっていない。

大きい大学は科目の設定を学部が判断する。

善悪で決めるのは難しい。

高校でしっかり学んだことを大学側が評価することが大事だと思う。

#### (8) 会場からの質問票の内容

所属	質問科目	質問内容
1) 企業	地理	・GIS 利用に際して、各レイヤを構成していくため、データ群、特に「オープンデータ」の取扱いについて民間ができること、大学コンソーシアムとしての取り組みや方針、お考えがあればうかがいたい。権利等の課題もあるが教育目的の共通資産の在り方として、入試問題設定時の基礎資料にもなり得るため。
2) 高校教員	地理	・知識も当然必要、とのことですが、現状の地理 B 検定教科書で設定される知識量と比較をすると、増 or 減どちらか？そしてどの程度増減するのか？ ・歴史総合の様に研究会による精選用語集はないのか？
3) 高校教員	地理	・GIS を活用した授業とは、具体的にはどのようなもの（どの程度の技能）が求められているのでしょうか。また、それを入試で測るとしたら、どのような測りかたが想定されるのでしょうか
4) 高校教員	地理	・地理総合では生徒が GIS を活用して、主題図を作成したりする場面が求められると思いますが、高校での GIS 環境の整備については各学校に任せられるということになりますか？
5) 高校教員	その他 (全体)	・日本最大級の受験生の試験を、思考力を問う問題として出題し、それを全て客観的に採点することができるのか？ ・教科相互の評価基準・難易を同じレベルにできるのか？ ・今までの入試問題と問題傾向を大きく変えることができるのか？
6) 高校教員	地理	・地図写真、グラフなどは中学入試ではもうとっくに採用されているが？ ・良問サンプルに書かれている通り、知識も大切だということであるが、知識と思考力を同時に身につけるためにはどうすべきか？ ・御校レベルの生徒をどのような問題で評価するのか？
7) 高校教員	歴史	・試行問題のじっくり読んでもらう問題は国語力ではないのか？ ・センター世界史は新思考入試を意識したようであるが、問題がひどい状態となっている。このような状況が起きるのでは？ ・「つなぐ・比べる・例える」は既存の問題でも問えるのでは？

8)	高校教員	公共	<ul style="list-style-type: none"> <li>・なぜ政治経済学部で政経が入試科目から削除されたのか？</li> <li>・大学に合格した生徒から、高校でやっていることとほぼ同じ内容をやるのであるが、大学の授業はわかりにくく、つまらないと言われるがそれについてはどうか？</li> <li>・解答例を見ると、結局、知識が必要である。国語力も問われるのでは？で、解答例はあたり前のことで、国立が今までに出していた問題とそんなに変化がないのでは？採点基準は明確か？</li> </ul>
9)	大学教員	歴史	<p>試行試験について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・対象者を日本史 B・世界史 B 履修者（履修中）を中心にとするのは、A 履修者（世界史 A、日本史 B／日本史 A、世界史 B、というようなパターン）を排除するものではない、ということでしょうか？</li> <li>・論述問題も含めて、試験時間数・問題数は、おおよそどの程度にする予定でしょうか？</li> </ul>
10)	高校教員	歴史	<ul style="list-style-type: none"> <li>・資料 P3「2. 試行問題作成プロセス（1）」にある「穴埋め. 択一式でも表現力は問える」の部分について、なかなかイメージしにくいので、具体的な問題例があれば提示して頂けると有難いです</li> </ul>
11)	高校教員	歴史	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本史、世界史の共通問題とは具体的に何を主眼に想定しているのか</li> </ul>
12)	高校教員	歴史	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「歴史的思考力」とは何か、という問いの設定が難しいと感じました。しかし、従来の入試問題はあまりにも用語中心であるため、リード文の内容の読み取りはほとんど意味を持たないものでした。したがって、対話形式・史料読解であれ、リード文を読み解釈することをどれだけ問題につなげられるかが肝であると思います。ただ、その際に「現代文との差は何なのか」という批判が避けられないものになると思います。この点についてどのようにお考えでしょうか</li> </ul>
13)	高校教員	歴史	<ul style="list-style-type: none"> <li>・思考・判断・表現の 3 力を重視するにあたり、前提となる知識は必要となるということですが、その分量は従来通りなのでしょうか。そこが選りすぐられないことには、時間的制約という課題が解決できないと考えます。</li> </ul>
14)	高校教員	歴史	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「用語の精選」について、大学側は入試作題においてどのようなスタンスとなるが想定していることを考えて欲しい</li> </ul>
15)	高校教員	歴史	<ul style="list-style-type: none"> <li>・用語の精選はどの程度実現するのか。</li> </ul>
16)	高校教員	公共	<ul style="list-style-type: none"> <li>・従来の「倫理」の要素はどの程度盛り込まれるのか。</li> </ul>
17)	高校教員	歴史	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各社の教科書は、どの様に変わり、入試を見すえたとしたら、どの様な観点で教科書を選べばよいのか？</li> </ul>
18)	高校教員	歴史	<ul style="list-style-type: none"> <li>・試行試験についてですが、現行の指導要領の生徒は世界史が必修なので、例えば、日本史を受験科目として学習している生徒は、世界史 A or B と重なる部分から共通問題が出るということですか？逆に世界史を受験科目にしている生徒は、日本史を履修していない（地理を履修している）生徒もいるのですが、そういう人に対してはどう共通問題を出題されますか？中学の歴史は日本史中心だったからそのあたりからですか？</li> </ul>

19)	高校教員	歴史	<ul style="list-style-type: none"> <li>・東大、一橋などの難関国立大や早稲田大学などの私大の新テストにおける指定科目に歴史総合や地理総合が入るのかどうか？</li> <li>・前回もこの質問をさせて頂きましたが検討中とのこと、問題の内容も大切ですが、制度がどうなっていくのか知りたいです。</li> <li>・少なくとも早稲田大学がどうするつもりなのかはお答え頂きたいです。</li> </ul>
20)	高校教員	歴史	<ul style="list-style-type: none"> <li>・思考力の定義の表れは独自につくられたものですか？これは「思考力」という普遍的な力を歴史分野に活用しようとしているのか、歴史分野に「特有の」思考力を検討しているのかどちらですか？後者が明確にならなければ歴史学習の必要性が保証されないと思うのですが。</li> </ul>
21)	高校教員	歴史	<ul style="list-style-type: none"> <li>・歴史総合に関する話題は多く見かけるが、世界史探究・日本史探究の検討はどれくらいすすんでいるのか</li> </ul>
22)	高校教員	歴史	<ul style="list-style-type: none"> <li>・知識偏重の脱却と基礎知識は必要との話がありましたが、通史的な理解がどこまで必要となるか。お考えを伺いたいです。</li> </ul>
23)	大学教員	歴史	<ul style="list-style-type: none"> <li>・穴うめや択一で、どのように表現力が問えるとお考えでしょうか（歴史）</li> </ul>
24)	大学教員	その他	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大学としては、作問にどのくらい時間がかかるか考えておいた方がよいとお考えでしょうか</li> <li>・作問専任の教員の検討はなされているのでしょうか</li> </ul>
25)	高校教員	歴史	<ul style="list-style-type: none"> <li>・e-Portfolio が入試に使われると伺っています。e-Portfolio の「探究活動」の項目に「論文」がありますが、世界史探究・日本史探究でも論文執筆が必須になるのでしょうか。大学が高校生の「論文」を読んで選抜に利用する、というあり方は今、どの程度想定されていますか。</li> </ul>
26)	高校教員	歴史	<ul style="list-style-type: none"> <li>・史料等は多目ということですが、どれくらいでしょうか？今の高校生は飛ばし読みをしてしまいます。高校生はどれくらいの読書スピードがあると想定しているのでしょうか。</li> <li>・また、速く書くことが困難な生徒についてはどのような対応をなさるのでしょうか？</li> </ul>
27)	高校教員	歴史	<ul style="list-style-type: none"> <li>・歴史は、史料中心になりそうですが、そのため近現代重視になるのでしょうか？</li> </ul>
28)	高校教員	歴史	<ul style="list-style-type: none"> <li>・早大国教日本史のような、英文資料のよみとりを考えていますか。</li> </ul>
29)	高校教員	歴史	<ul style="list-style-type: none"> <li>・史料問題は高校で使用している副教材としての、資料集などで対応できる範囲なのか。</li> </ul>
29)	高校教員	歴史	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今までの過去問は一切生かすことができないのか。</li> <li>・思考問題としては・・・（世界史の場合） {東大の大問① 東京外語大の文章読解問題} のようなイメージなのかな？</li> <li>⇒サンプル問題が提示されないのでイメージがなかなかできないのです。</li> </ul>
30)	高校教員	公共	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「公共」のサンプル問題 A パターン第 1 問は、いわゆる「小論文」的な問題と考えるとよろしいですか？</li> </ul>
31)	企業	歴史	<ul style="list-style-type: none"> <li>・試行問題について、プレテストとの違いはどのような点にありますか？</li> </ul>
32)	企業	公共	<ul style="list-style-type: none"> <li>・試行試験（実試ズミのもの）は HP 等で公開予定はありますか？</li> </ul>

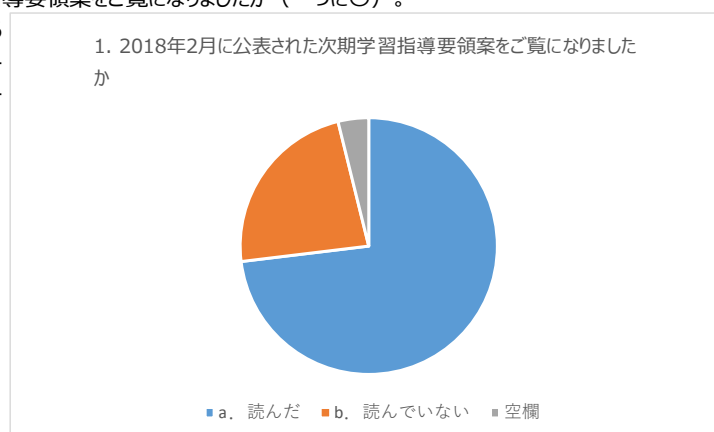
33)	高校教員	公共	・資料読解が多いことによって、学力帯は低い生徒にとって解答は難しいと思われるが、どのように解答を担保するか
34)	高校教員	その他	・政治的な中立性を担保する（しなければいけない）側面はあるのか
35)	高校教員	公共	・早大や同志社など、難関私大と呼ばれる私大の個別試験で必修「公共」は、選択「政・経」「倫理」と同格の入試科目として扱うのか？「公共」と「政・経」「倫理」は科目として並列にとらえているのか、それとも「公共」は基礎的、探究的科目で「政・経」は応用的にとらえているのか？
36)	高校教員	公共	・公共のみならず、地理や歴史も同様だと感じたのですが、検定教科書を主に用いただけでは、太刀打ちできないと思いました。担当教員の工夫のしどころだと思いますが、新聞や雑誌、ニュースといったものも日頃から目を通していることを前提として作問はされていくのでしょうか
37)	大学教員	公共	・受験者数と採点に要する時間の想定は？例えば、この科目を受験する者が1,000人いたとき、何人の採点者が何時間で採点できると見込んでいるのか。信頼性の高い採点基準が設定可能なのか ・回帰式は数学の学習指導要領の範囲外です
38)	高校教員	その他	・高校生の感覚からすれば 地理と歴史と公共とで、どれが有利ですかとなるでしょう。分科会では、それぞれ試行問題にとりまれているようですが、それぞれ別個で完成していくのでしょうか ・「共通テスト」との傾向の違いはどうなるのか関心があります。
39)	高校教員	地理	・グーグルマップ等を利用する場合、広告が表示されてしまうため、授業での利用を制限されています。この広告の問題について指針などはありますか
40)	高校教員	歴史	・移民問題などは予備校は確実に予想してくると思われる 予備校の予想問題集にぶつからない形で継続的に出題は可能か？ちなみに慶応経済の日本史の問題は、グラフよみとりなど良問と思われるが、昨今は過去問をやっておくとパターンが読めるのであまり思考しなくても解答が出来てしまう感じがする。
41)	高校教員	その他	・各科目・教科 読解量が多く、一日、二日で5教科行くと相当な負荷が受験生にかかるが、各教科で調整はないのか？
42)	企業	その他	・どの科目でも資料問題が多くなると、著作権の都合からその入試問題をネットにのせたり、問題集にのせたりすることが難しくなります（赤本など）。これによって、実は高校でも予備校でも自学する人でも、対策しにくくなるのではないかと思います。資料の数や出典についてのガイドラインや議論などはあるのでしょうか？
43)	高校教員	その他	・総合科目と探究科目の関係性について（探究の中に総合を含めるのか） ・試行試験はどの規模で実施予定か
44)	企業	その他	・現在作成中の問題例は、どういった位置付けで公開される予定なのでしょう？
45)	高校教員	地理	・もう少し具体的に「試行問題」について伺いたい
46)	高校教員	歴史	・高校現場（授業やカリキュラムマネジメント）にどういった要望があるか？どのような変化を期待するか？

47)	高校教員	その他	・スクリーンの画面が暗くて、見えづらいと思われます。 ・PPデータ（進捗報告）はどこで入手できますでしょうか？
48)	高校教員	地理	・地理総合の問題における知識の分量はどの程度を想定していますでしょうか？
49)	高校教員	歴史	・「歴史」と「地理」のプレ試行入試の検証結果は、どこで拝見することができますでしょうか？ ・「公共」と比べて「歴史」と「地理」の論述量は少なくなりますか？
50)	高校教員	その他 (全体)	・そもそもこの研究は、各大学で行われる個別入試についての研究ということでしょうか？

### (9) アンケート集計結果

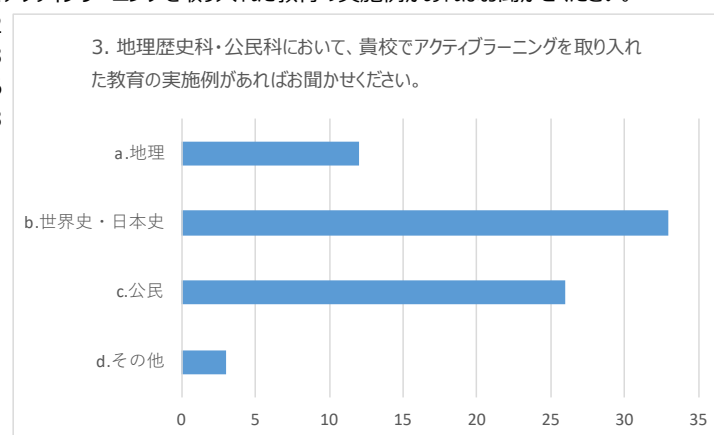
1. 2018年2月に公表された次期学習指導要領案をご覧になりましたか（一つに〇）。

a. 読んだ	76
b. 読んでいない	24
空欄	4



3. 地理歴史科・公民科において、貴校でアクティブラーニングを取り入れた教育の実施例があればお聞かせください。

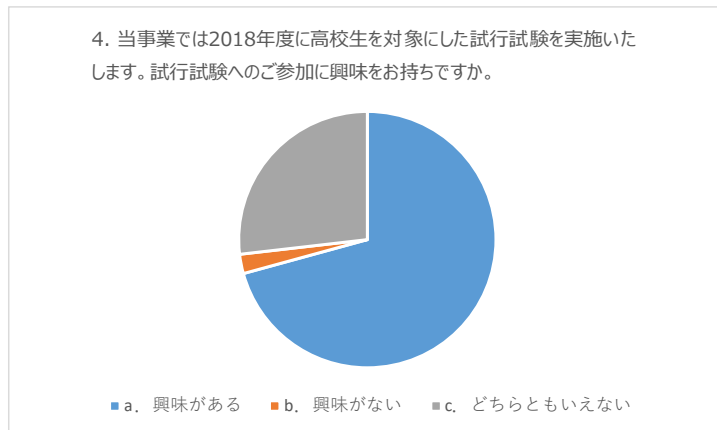
a. 地理	12
b. 世界史・日本史	33
c. 公民	26
d. その他	3



4. 当事業では2018年度に高校生を対象にした試行試験を実施いたします。

試行試験へのご参加に興味をお持ちですか。□(一つに○) □

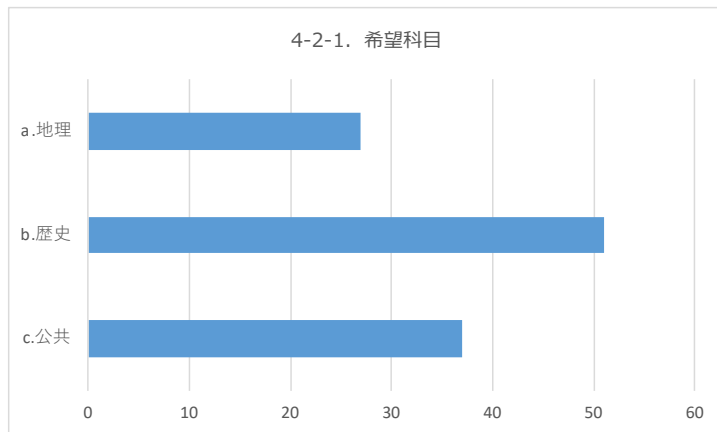
- a. 興味がある 58
- b. 興味がない 2
- c. どちらともいえない 22



4-2. 次の設問は、予備調査として全体の傾向を把握させていただくためにお聞きます。お分かりになる範囲で□回答ください。|

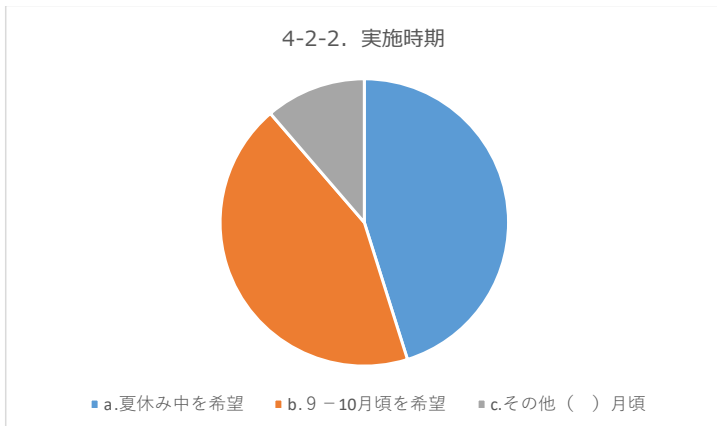
1. 希望科目（複数選択可）

- a. 地理 27
- b. 歴史 51
- c. 公共 37



2. 実施時期（ひとつに○）

- a. 夏休み中を希望 28
- b. 9 - 10月頃を希望 27
- c. その他 ( ) 月頃 7

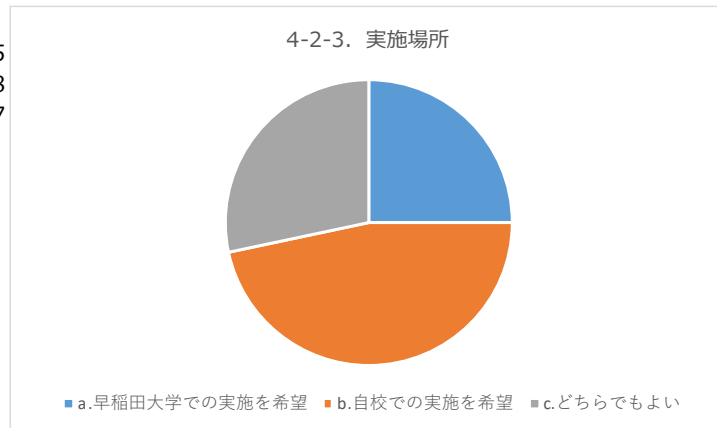




3. 実施場所 (ひとつに○)

- a.早稲田大学での実施を希望
- b.自校での実施を希望
- c.どちらでもよい

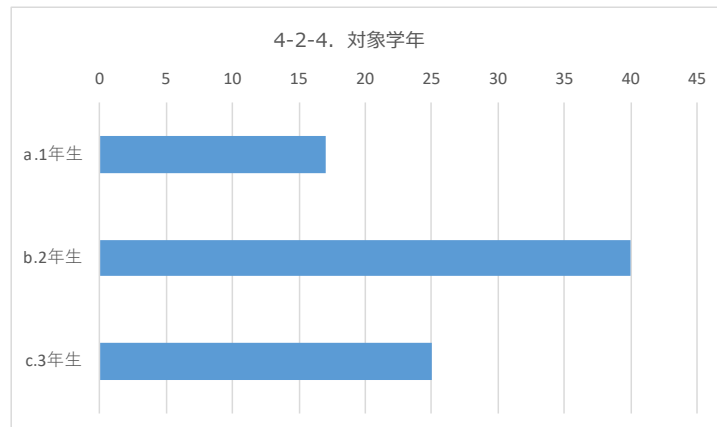
15  
28  
17



4. 対象学年 (複数選択可)

- a.1年生
- b.2年生
- c.3年生

17  
40  
25



地理歴史科・公民科において、貴校でアクティブ・ラーニングを取り入れた教育の実施例があればお聞かせください

自由回答欄

教科	教育内容	評価方向
1) 公民	模擬選挙	活動へのとりくみ
2) 世界史・日本史 公民	世界史・日本史：奴隷解放宣言（英文 or 日本語訳）を読み、リンカン・共和党の立場と南北戦争を考える。  公民：倫理「頭痛・肩こり・樋口一葉」という井上ひさしの舞台を観賞して「死」、「生」について考える。	世界史・日本史：議論→発表→レポート  公民：議論→レポート
3) 公民	模擬投票において「どのように投票先を選ぶか」「何を基準として選択するか」模擬機会を通して、現実の諸課題を議論する。新聞から情報収集、レポート作成…etc.	難しいところですが、ルーブリック評価が一般的ですが時間的にかなり厳しいです。
4) 公民	持ち寄った新聞記事を選定し、要約の上、疑問点や深掘り調査。（本や図鑑、データ、インターネット）で調べまとめる。	評定には入れていない。（考査での評価のみ）生徒同士の相互評価をしている。
5) 地理 公民	公民：班ごとに分かれてディベートを行なっている。	異なる班の内容について評価。ディベートのテーマについての基本的知識については確認テストを実施。勝敗については生徒が判断。
6) その他 公民	公民：模擬選挙・投票、生命倫理、ディベート、レポート&プレゼン その他：平和学習フィールドワーク	公民：平常点化、点数化して評価
7) 世界史・日本史	資料から考えるグループワーク。 イギリスの歴史教科書を使用しての授業（ロールプレイングなど）生徒による「問い」の設定。生徒を司会者とするクラス討論。	論述試験、レポート、生徒自身のたてた問いに対して仮説をつくらせる。選択問題が資料読解させる問題（苦戦・・・）
8) 世界史・日本史 公民	世界史・日本史：関西研修旅行での日本史の研究レポート  公民：模擬裁判	世界史・日本史：5つの観点を設定して、その中の項目に○×をつけるのと教師のコメント 公民：部外活動として高校模擬裁判、選挙権（日弁連）への参加（代表者）で審査員による評価（勝ち負けで）
9) 世界史・日本史	アクティブ・ラーニングと言えるかは分かりませんが、講義を行った後にその内容に関連する様々な大学の入試問題（論述問題）をグループで議論しながら解答をつくる。それを他のグループが批評し、採点する。	特に評価は行っているわけではありませんが、一応こちらで作成した解答基準をもとに採点しました。

10)	地理	ケッペンの気候区分の各特長をジグソー法で組み合わせる。	
11)	地理	箱根巡検（地学とも共に）	担当外なので詳しくはわかりません。
12)	世界史・日本史 公民	各教員が個々に取り組んでいるので内容はよくわかりませんがグループワークが多いのではないかと思います。	
13)	公民	総合授業「憲法と私」	憲法に関する多角的なテーマを設定し、数名のゲスト講師から講義を行っていただいた。授業前と授業後にディスカッションの時間を設け、発表を行った。
14)	公民	生命倫理（生命生殖に関する）について、デザインベビー、赤ちゃんポストなど多数の論点を調べさせ、発表、討議	
15)	世界史・日本史	・ジグソー法を用いた、中世史料の読み合い。 ・イスラーム分野の教科書文章の作り直し ・フランス革命、事象の並び替え	
16)	世界史・日本史	ペアワークなど	ルーブリックなど
17)	世界史・日本史	学び合いの授業、課題を提供し、グループや全体での学び合いを通じて、一人一人の学ぶ権利と保障しようとして実践しています。	授業での姿勢と定期考査
18)	世界史・日本史 公民	日本史：KP法の活用。リフレクションシートにルーブリックを組み込み毎時自己評価  倫理：ペアワーク、グループワーク実施後のミニ小論文（B6程度）	
19)	地理	SDGsに関する調べ学習+課題解決に向けての提言をまとめて発表。（グループごとに1テーマ選ばせる）	あらかじめ評価の観点を設定し、その達成度を評価。地理Aの平常点の一部に組み込む。また、SDGsの概要について、定期試験で出題。
20)	世界史・日本史	クリミア戦争を主題にしたロールプレイング形式の学習後史実との比較を行う。	・個人での行動を記入したプリント ・グループ内での振り返り 記述式のプリントで史実との差、他国の行動分析を確認しました。
21)	公民	地方行政と町おこし等の話題。全国、特色ある地域の例を学んだ後、自分住む地域のそれを調査し、新たな町おこしのアイデアを提案する。グループ活動で行う。発表とレポート提出（各自）	

22)	世界史・日本史	文化史について特徴や美しさについて主に美術作品	どのような視点でどのような考えを持ちえたか、特徴を適確につかんでいるかどうか。積極的に意見をいっているか。協調性があるか。
23)	世界史・日本史	分野ごとにグループで調べてそれらを共有し、大テーマに入る前の導入をする	点数化はしない
24)	世界史・日本史 公民	ICT（タブレット PC）を活用した資料説明等	
25)	公民	18歳選挙権に絡めた模擬投票などについて	授業への参加度（発言など）
26)	世界史・日本史	教科書にある内容について実際に古文書を生徒たちに読ませ、考えさせるという授業をやったことがあります（「三行半」を題材として教科書にある説明と実態との違いについて）	
27)	世界史・日本史	短めの論述をペアワークで解くというもの	テスト、論述形式で
28)	世界史・日本史	現在校、前任校で（学校単位ではなく、科目担当者が実施）昨年度学事出版教育文化賞参照	ルーブリック等 資料活用、協働、文章、小論文 （反論も意識して論理的に展開できるか）表現、プレゼン発表等
29)	世界史・日本史 公民	生徒を班に編成し、課題を与えて討論させ、結論やそれに至るプロセスを発表させる	いわゆる平常点に組み入れる。また、アクティブ・ラーニングの結果高まった学力はペーパーテストの点数にも反映されると考えて、ペーパーテストの得点をもって評価する。
30)	世界史・日本史	基本的に4人班で協力しながら学ぶ。しかしまだ、発展途上国であるので授業中に2つ程の大きな問についてはグループで話し合い、その位は議論も入る。大学では説明しにくいです。私がやっています。促して楽しいと生々しています。	振り返りシート（コメント）、相互評価、定期考査での論述問題による確認。
31)	地理 世界史・日本史 公民	学びあい、情報意見の共有、授業内容の振り返り、ICTの活用	
32)	地理	GIPやハザードマップを活用し、地域で洪水があったとき、どこに避難し、どう対応をとるかを考える。	学校近くのフィールドワークを行い、GIPやハザードマップを利用しレポートを書かせ、その内容で評価する。
33)	世界史・日本史	課題をグループに分かれて取り組む。グループ同士の競争（盛り上がる）	授業中の取り組み（主体性、協働性など）+授業中の課題を踏まえて定期考査の結果

34)	世界史・日本史	世界史 A において帝国主義～第 2 次世界大戦までの世界史を扱い、小項目の探求課題を設定（「何故ドイツ国民はヒトラーとナチス政権を支持したのか」など）グループで史料の読み込みや解釈を深めていく。	小項目ごとの小レポート、毎回のグループでのワークシートなどについてルーブリックを設定し評価をする
35)	世界史・日本史	① 習った知識を小テストで確認する際に、事前にリード文を配布し、出題をグループで予想させる。 ② 論述 あるテーマの因果関係を考え話し合わせそれを論述させる。	① 小テスト ② 論述テスト
36)	世界史・日本史	論述問題の答えを評価し合う 問題をつくらせて評価し合う	上記の活動について、明確には評価していません。
37)	地理 公民	地理：地形の読図や EU に関するジグソー学習など 公共：移民・難民・民族紛争に関するダイアモンドランキングなど	グループ活動の様子やコメントペーパーの内容から評価する（活動のルーブリックを示すなど）
38)	公民	現在のニュースを見て、それに対して発言をしてもらい、それを教師や生徒にも考えさせる	定期試験において客観的な基準により採点している。
39)	世界史・日本史	教えて考えさせる授業（東大の市川伸一先生の実践）で授業の半分を知識注入。後半を知識に用いた思考、表現の作業や学び合いなどを行っています。	
40)	その他	中 2～高 2 までの生徒の学年をまたいで、月に 1 度、大学のゼミのように、1 年かけて課題を設定し探求していくという総合学習を実施している。	ルーブリック評価シートをもとに、毎回グループ毎に評価する項目が活動内容によって異なる。生徒の自己評価と担当委員の評価。
41)	世界史・日本史	来書世界史 B の「深める」を活用する エキスパート班、ジグソー班に分かれ資料読解、発表等を行う。 分析力、コミュニケーション力、表現力を養うことを目標とする（該当テーマの理解を深めると共に）	模索段階につき未定 複数教員がそれぞれの指導案に基づいて授業を行い、後日教科会議にて授業の様子を発表し情報共有を行う。授業を見学した教員も意見を述べる。
42)	公民	「現代課題」分野において、倫理思想の学習を踏まえ解決策を議論させる	従来の学習を正しく踏まえているか、証拠立てて議論できているか。発表者の内容を正確に理解できているかなどをルーブリックにして生徒同士に採点させ、教員の評価の 1 つに入れている
43)	地理 公民	GIP 実習（MANDARA による主題図作成） 貿易ゲーム	レポート作成

44) 世界史・日本史 公民	世界史・日本史：付箋を使用したもの（歴史事象を時系列に並べさせプレゼンさせる） 公民：模試判断	まだ評価していない
45) 地理 公民	中高一貫校における中学校にて中 1、中 2 で各 1 単位ずつ地理 AL を授業科目として設置。中 3 で 1 単位を公民 AL として授業科目として設置。	ループブック評価 （2019 年度より、高 1 で歴史総合、公共、高 2 で地理総合を設置予定
46) 世界史・日本史	基本的にすべての時間、アクティブ・ラーニング型で（ペアワーク、ジグソー法、KP 法を）行っている	定期考査に加え、パフォーマンス評価を加える、ループブックは目標提示と生徒総合の自己評価に。
47) 世界史・日本史 公民	地歴研究（併設大学への進学を前提とするクラスで実施）教材・テーマ（テキスト映像）それを基にクラスメイトの意見を聞く、自分の意見を書く。	生徒同士の相互評価、レポート評価
48) 世界史・日本史	資料、史料の取り組み	ワークシートの評価
49) 世界史・日本史	ほぼ毎時	定期テスト、個人レポート、グループレポート等による
50) 公民	「自由」論比較する。ミル・ヘーゲル・カント 教科員の設定内容をまとめる。 3 人のどれを選ぶのかを決めている。 まとめた内容をグループで紹介しあう。 グループで併用する	提供されたワークシートの記載内容により、4 段階評価

本日のワークショップに関する感想をご自由にお書きください。

- 1) 公共などで具体的な問題をみせていただき勉強になりました。  
当社でも社内で各種試作問題を作っていますが、配分、難易、採点、弁別性など課題が多く、トライを続ける日々ですので、本日の会に参加し、多くの解決への手掛かりをいただきました。ありがとうございました。
- 2) 大学側が求めている力は我々高校側が現在模索し、取り組んでいる「身につけさせたい力」と符合しているように思います。しかし、こと入試となると、学校、科をあげて 3 年スパンで育成したいものです。実施対象の学生が入学する来年度以降に、並行して問題の方向性をブラッシュアップしていくスケジューリングとは我々にとりかなりの大きな課題となっています。「高大接続」という観点からもっと情報が提供されることを期待します。
- 3) そもそも歴史科目で思考力、判断力を問うことの難しさを痛感しました。いっそのこと、社会生活を営むうえで知っておくべき常識を身に着ける科目と割り切って考えてしまっても良いのではと感じます。
- 4) 「入試が高校の教育を縛りつけてはならない」という言葉は非常に重要なキーワードだと思います。どうか中途半端な形にならず、次世代の日本人に問われる力を高大接続で達成できるよう方向性をお示しいただけたらと思います。
- 5) 学力観を問う入試は、生徒の幅広い字力にどのように合わせて行っていくのか考えさせられた。本校の生徒に資料読解ができるか（能力もだが意欲の点からも）・・・。  
資料の量に関わらずとも、学力を問えるのかどうかは、知りたいです。また、「国語的な問題・・・」という議論がありましたが、地歴公民科はこれにこたえていかねばならないと思いました。センターのプレでも国語的な問題があり

ましたし、国語の問題にも「契約」の問題が出題されていました。「地歴公民科ならでは」の問題とはなにか考えていかねばならないように思いました。（個人的には、知識・概念を現実課題に活用させることが大切かと考えておりますが…）勉強になりました。ありがとうございました。

- 6) 公共に関して、具体的な試行問題を挙げて頂けたのはありがたいです。現高1で本校の教員もこのような取り組みを行なっているので今後の授業展開の裏付けとなると思います。
- 7) 「つなぐ、比べる、例える」のキーワードを念頭に、思考力育成型の作問に取り組んでみたいと思いました。
- 8) 地理歴史科、公民科の教育を発展させたいと考えている集団での議論をいかに高校の現場、入試のため、学校経営のため、さまざまな効率化をはかりたい人々に届けてゆか問題は多いと感じた。文科省の要求に対して、どうしても何かつくり出すところに考えがいきがちだが、今までのこれらはもうやらない、繰り返さない、の方が分かりやすい。破壊あってこそかもしれない。
- 9) 同じ委託事業でも、理数分野とは進め方や考え方に違いがあることがわかり、興味深く聞かせて頂いた。
- 10) 早稲田大学ほどの大学ですので、もう少し積極的にこの事業の中で、大学・高校や世間に対してどのようなことを働きかけていきたいのか、示して頂きたいと感じました。  
具体的問題が示せないというタイミングで難しかったと思いますが、今日の改革全般に関して、大学側としての取り組み姿勢、還元性に、やや不安を感じてしまいました。
- 11) そもそもこの事業は何のテストを試作検討するためのものか不明でした。
  - ・現在のセンター試験にかわる共通テストの試作なのか？
  - ・各私立大の個別入試に出題する問題の試作なのか？
  - ・ここで検討した方向性は全私学に共有されるのか
  - ・ここでつくられた3力の定義は全私学大 or 全大学に共有されるのか？
- 12) われわれ教員に「思考力」「判断力」「表現力」がどれだけあるのか、問われているような気になってきました。本校の場合は、中学入試でこの議論の成果を生かしていきたい。
- 13) 各分科会での試行問題の検討状況がよくわかりました。質疑応答の中で出てきた、受験科目となるのか、カリキュラムにどのように組み込んでいくか、という問題はやはり現場では大きな問題です。総合科目、公共ともに2単位なので扱える内容・分量にかなり制約があります。また、2単位ものの授業では、学校行事等の関係で継続性の強い取り組みがしづらいという特徴もあります。（例えば、私立校では2月中）次の授業まで2週間空くこともあります。）作業などの授業の組み方が難しいとあらためて実感しました。理想はふくらみますが、現実はなかなか厳しいな、というのが現在の正直な気持ちです。
- 14) 学校での教育を入試の関係については、まだまだ不明なことが多い両方とも実現可能なのかという疑いもあります。分かりやすい情報提供を求めていましたが、今日のワークショップはとても参考になりました。
- 15) 質疑の時間にもありましたが、受験科目となるのか、ならないのかというのが大きな問題かと思えます。残念ながら受験科目とならない科目はカリキュラム作成時に重要視されません。また、判断力などの力も問う、でも知識も問うというのは完全に足し算の論理になってしまっているのではないのでしょうか。時間数の制約もある中で、高校現場はいっぱいいっぱいです。
- 16) 私大の一般入試がどのように変わるのか、教科書がどのように変わるのか、授業はどのように変えていくべきなのか、明確な方針が分からず（まだ決まっておらず）不安に思っています。今回のような貴重な機会をありがとうございました。
- 17) 貴重な内容でとてもよかったですと思います。  
高校での授業内容や定期試験を大きく変えなければならない必要性を痛感していますが、具体的な方法、方

向性がまだ見えてきません。今まで作り上げてきたものを変更するのはかなり困難だと思います。これからも、情報を発信していただくと助かります。

- 18) 各分科会の進捗状況に差があるのはやむを得ないが（公民分科会のように）問題サンプルを示していただくとイメージが喚起されて良かったと思う。質疑応答も含めてとても勉強になりました。ありがとうございました。
- 19) 公共分科会の報告は大変興味深かったです。
  - ・検討過程で、実際の高校教育の現場を大学側の先生方はどの程度実際に（アンケート等だけでなく、ヒアリングや見学も含め）ご覧になっているのか気になりました。
  - ・シンポジウム最後に公共の先生から「新聞やニュースくらいは追って欲しいとの発話がありました。家庭環境等厳しい生徒にとっては学校外での学びでの差が入試で問われるのは格差の要因につながる懸念があると危惧します。
- 20) 貴事業についてよく理解できました。来年度の試行試験ではより広範な（従来型の）学力層のサンプルを集めていただきたいと思います。
- 21) 公共分科会の発表が具体的であり、非常にイメージしやすかった。採点に費やす時間の説明、2人採点の方法等わかりやすい。採点にプレが生じないのか、マーク解答とどう組み合わせるのが重要であろう。
  - ・ポピュリズムの設問があったが、大学生レベルとしては適当であろうが、それに当たるテーマ、どのようなものをお考えなのか、気になるところである
  - ・2022年度順次実施予定の新学指導要領に関する質問納得です。2020年、2022年、2024年を意識した提案であってほしい。
- 22) 本校がさらに理解を深めた上で授業を改革しなければならないと焦りを感じます。全校をあげてやらなければおそらく無理なのだろうと痛感します。
- 23) 進捗状況のご報告ありがとうございました。大変ご苦労されている内情と高校現場の指導に対するご配慮がよく伝わってきました。

公共分野ではプレ試行試験の具体案をご紹介いただき参考になりました。記述式では採点基準の共有が難しいという印象を抱きました。
- 24) やはりいわゆる中～下の大学がどのように作問するのか、また継続して作問されるのか課題だと思いました。
- 25) 私大、特に10万人以上の受験生を集められている大学は採点が大変な論述だけでは入試問題がつかれないと思っていました。

やはり択一式もありそうですね。それでも3力を問える問題作成を楽しみにしています。
- 26) 情報収集の注意：東京の国公立附属教員の意見は全国多数派の公私立校のサンプルにはならない。（教員は授業研究に熱心だが入試問題については十分に目を通してさえないので意見を鵜呑みにしない方がよい）（私は公立の経験、入試問題の研究は去年しています）

バカロレア問題を見て、論文指導していた経験があればプレテストの意問やめざす方向性は理解できる（高校教員も作ってみればわかる。現役の生徒を教えている高校教員がつくってみた問題を見てみたらどうでしょう）
- 27) 同じ「社会科」でも発表の仕方が発想の違いがみられ、興味深かったです。

改革の流れはわかりましたが、詳細はWEB等に情報をとらなくてはならない。情報が多過ぎて整理して把握し、生徒への指導に結び付け新カリキュラムを組むのは大変そうです。

フロアからの質問のレベルが低すぎ、どうして生徒の力（世界に羽ばたけるような）を伸ばすことを考えられないのか。安直に大学へ入れればよいのか。怒りがこみ上げてきました。どうして入れる対策ばかりを考えるのか。ひどすぎる。本当に21世紀に生きる子供たちのことを考えているのかと思いました。



共通一次前の教養主義の時代の高校教育を知らない教員が多いのでしょうか。自分の受けた教育の範囲でしか考えられないのなら、もうほとんどの教員は共通一次後の教員ですから、改革もなにもありませんね。

- 28) 具体的な動き、取り組みがもう少し開示されるか（特に文部省からの説明）期待していましたが、却って疑問符を抱えることになりました。
- 29) それぞれの分野の現状を理解することが出来ました。ありがとうございました。
- 30) 試行試験の方針や具体例について踏み込んだお話を伺え大変参考になりました。「公共」で示して頂いたようなプレ試行試験の具体例を「地理総合」「歴史総合」についても実施後にお聞きする機会があると幸いです。
- 31) 大学にゴールを定めてほしいと考えます。ゴールに沿ってゴールを目指して必要な能力を育みます。中学入試ではキーコンピテンシーをもとに思考・判断・表現を問う作問をしている学校が多々あります。
- 32) 高校の先生の質問がその通りと思いました。従来の入試においても例えば世界史 B については早稲田大学の難解な入試がトップにあり、どうしても上位の生徒はそこをターゲットにした勉強に取り組み、必然的に高校や予備校はそこから逆算した授業を行うこととなります。したがってやはり大学側が早い段階で入試科目を提示していただくのと、そして良質な試行問題を提示していただく必要があると思います。
- 33) 高校教員としてはやはり、カリキュラムをどう構成するかに最も関心があります。そのためには、新テストや国公立個別試験や私大入試に新しい科目がどのように活用されるのか。見通しを早く伺いたいところです。（各大学の判断になるとは理解してはいますが）
- 34) 前回のワークショップに参加いたしました。前回と比べて具体的な内容でとてもわかりやすかった。ワークショップに参加される方々はどのような問題が作問されるのかということに関してとても興味がおありだと思いますので今回のように問題が示されたことは今後の指導のあり方に大きな影響を与えるものと思う
- 35) 全体的な取り組みの内容はわかりました。  
サンプル問題（「公共」で示してくれたように）をもっと多く提示して頂けた方がイメージが膨らんだのかもしれない。
- 36) 最近の入試制度の変更は急ぎすぎる場合が多いので、当の生徒が困らないタイミングを考慮してください。少なくとも年度内に発表にならないように配慮してください。
- 37) 「公共」から入試問題を通じて興味・関心を喚起する高校授業をというお話がありました（これは歴史や地理も同じでしょう）であればやはり高校側との双方向のディスカッションが必要と考えます。登壇者がすべて大学の先生側でどうして高大接続なのかと疑問に感じました。生徒たちが混乱し、犠牲にならないようにと現場の教員として感じました。
- 38) 今の試験と大きく試験内容を変えるのは本当に可能なかどうか。  
結局、負担を強いられるわりに、費用対効果が少ないのではないか。もちろん大学入試が変わることは賛成であるが、総合にフォーカスしている理由が知りたかったです。
- 39) 大学の作問担当の方々の、かなり本音の部分がきけたような気がします。
- 40) 「総合」科目と「探究」科目とを受験（入試）の中でどう位置付けるか。今後大きな課題となるだろう。
- 41) 質疑応答で、現時点で決まっていないことが多いことが分かった。入試改革の情報をこれからも追っていこうと強く思った。
- 42) 公共分科会のように具体的に出题したいサンプルや聞きたいコンピテンシーなどを前提としながらそう変化させるには何が必要か。実施において高校教育での課題は何かなどと考えていくことが有効であると感じました。
- 43) このたびの改革が叫ばれながら現場（高校）の実感として、「難しい」「問題である」と思っていた点が現実的にクローズアップされてきたと思う。逆に言えば「わかりきっていたこと」をあえてこれだけの時間をかけて行って実証し

たに過ぎないのかとも思う。文科省の先見性のなさが大いに不安。サンプル問題にせよ、早稲田大学の学生に行わせても、どこまで意味があるのか。このままでは、一層の教育格差、社会格差につながる改革にしか思えない。過去問を自分でも時間をかけてしっかりと行い、合格できる従来の入試のほうがはるかに公正である。

- 44) 大変貴重な講演をいただきありがとうございました。思考力、判断力、表現力を問う問題作成の難しさを改めて感じました。

論述問題では採点面のハードルが高く、マーク式問題の中で三要素を問う問題を盛り込むという部分に現実的な可能性を感じました。

高等学校においても知識を基に考える力を養う授業を充実させていきたいと思いますが、入試でそのような問題が多くなると、それに答えられる技術の習得が主になってしまう懸念を持ちました。また限られた授業時間数の中で考えるために必要な知識と三要素を問う問題の対策との時間的な配分の難しさを感じました。

- 45) 具体性の欠如（高大接続の高校現場における視点が不足）

この改革に対し、あまり知識のない教員です。いくつかの勉強会に参加させていただき、少しずつ理解が進んでいます。またこのような機会があると嬉しいです。

- 46) 試行試験がどのような問題か早く知りたいと思いました。またプレ試行試験のモニターが私立大の学生に偏っており現在の国立を通過した学生だとどのような結果になるのかが興味を持ちました。

- 47) 大学教育の場においてもっとも重要であると思われる。批判的視野（どのような立場、状態、意見を持っていたとしても）を醸成することが求められると考えられるがそのような観点からの作問は意見として表出することはないのでしょうか

## 5.5 情報発信サイト

高校・大学関係者と本事業の情報発信、情報共有を行うため、早稲田大学公認のコミュニティ型 Web サイト「QuonNet（クオンネット）」において、招待制のクローズドコミュニティである情報発信サイトを構築した。第 3 回ワークショップや高大連携歴史教育研究会等で参加を募集したところ、2018 年 3 月 28 日現在において、165 件の登録希望があった。

当サイトではワークショップ等の資料を掲載しており、引き続き本事業の情報発信、情報共有のツールとして活用する。

The screenshot shows the QuonNet website interface. At the top, there is a navigation bar with links for 'QuonNetとは', 'よくある質問', '使い方ガイド', '日本語 / English', 'ようこそ! 高大接続改革事業事務局さん', and 'ログアウト'. Below this is the QuonNet logo and a search bar with the text 'キーワードから探す' and 'ヨミモノ' entered. There are buttons for '探す', 'メンバーを探す', and '詳細検索'. A text size selector is also present with options for '大', '中', and '小'. A dark navigation bar contains links for 'マイページ', 'つどう / コミュニティ', 'つくる / サクピン', and 'よむ・しる / ヨミモノ'. Below this is a breadcrumb trail: 'HOME > つどう > 高大接続改革事業 (地理歴史科・公民科)'. The main content area features a large white box with the title '文部科学省大学入学者選抜改革推進委託事業 人文社会分野(地理歴史科・公民科) 情報発信サイト'. Below this is a '新着トピック' section with two items: '2018/03/14 10:28 (資料) 本事業の概要資料' and '2018/03/14 10:21 (資料) 2018年3月12日第3回高大接続改革ワークショップ資料'. On the left side, there is a sidebar with a 'トピックカテゴリ' section containing links for 'お知らせ(0)', 'イベント(0)', 'メンバー紹介(0)', '活動の記録(0)', '資料(2)', and 'ギャラリー(0)'. There is also a '管理' button.

情報発信サイトのトップページ

本報告書は、文部科学省の大学入学者選抜改革推進委託事業委託費による委託業務として、学校法人早稲田大学が実施した平成29年度「高大接続改革に資する、思考力・判断力・表現力等を問う新たな入学者選抜（地理歴史科・公民科）における評価手法の調査研究」の成果を取りまとめたものです。

従って、本報告書の複製、転載、引用等には文部科学省の承認手続きが必要です。